

第410回香川海区漁業調整委員会次第

日 時 令和7年8月25日(月)
14:00～15:30

場 所 高松市サンポート1番1号
高松港旅客ターミナルビル7階会議室

1 開 会

2 挨 拶

3 議事録署名人の指名

4 議 題

- (1) 海区漁場計画の変更について(事前協議)
- (2) イイダコ資源管理の取組み状況について(報告)
- (3) 第1回資源管理方針に関する検討会(トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群)の概要について(報告)
- (4) 令和7年度全国海区漁業調整委員会連合会の要望活動結果について(報告)
- (5) その他

5 その他

海区漁場計画の変更について（事前協議）

1 今回の海区漁場計画の内容

今回、県内8漁協から計27件の新規・変更の要望があり、令和8年4月1日を免許予定日として手続きを進めていく。漁協別の内訳は以下のとおり。

鴨庄漁業協同組合

漁協毎の 計画番号	漁業の名称	対象種	現行免許 番号	内容	漁場の位置	関係地区	漁業時期	備考
—	藻類養殖業	のり その他藻類	区17	放棄	さぬき市鴨庄 長浜地先	さぬき市鴨庄	10/1～翌年 3/31	計画区2 に統合
区2	藻類養殖業	あおのり のり その他藻類	区18	区域拡張 対象種(のり) 追加	さぬき市鴨庄 長浜地先	さぬき市鴨庄	あおのり・そ の他藻類 10/1～翌年 7/31 のり 10/1～翌年 3/31	
区3	藻類養殖業	わかめ あおのり のり その他藻類	区19	漁期延長 対象種(あお のり)追加	さぬき市鴨庄 白方地先	さぬき市鴨庄	わかめ・そ の他藻類 11/1～翌年 4/30 のり 10/1～翌年 3/31 あおのり 10/1～翌年 7/31	
区4	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり	—	新規	さぬき市鴨庄 穴子地先	さぬき市鴨庄	1/1～12/31	
区5	魚類小割式 養殖業(くろ まぐろ養殖業 を除く)	ぶり類 まだい その他魚類	区419	区域縮小 漁期延長	さぬき市鴨庄 長浜沖地先	さぬき市鴨庄	3/15～ 翌年2月末日	

土庄中央漁業協同組合

漁協毎の 計画番号	漁業の名称	対象種	現行免許 番号	内容	漁場の位置	関係地区	漁業時期
区1	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり	—	新規	小豆郡土庄 町小部地先	小豆郡土庄 町大部	1/1～12/31
区2	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり	—	新規	小豆郡土庄 町大部中藻 沖	小豆郡土庄 町大部	1/1～12/31
区3	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり	—	新規	小豆郡土庄 町豊島家浦 地先	小豆郡土庄 町豊島家浦	1/1～12/31

四海漁業協同組合

漁協毎の 計画番号	漁業の名称	対象種	現行免 許番号	内容	漁場の位置	関係地区	漁業時期
区1	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡土庄 町小江地先	小豆郡土庄 町小江	1/1～12/31
区2	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡土庄 町伊喜末地 先	小豆郡土庄 町伊喜末	1/1～12/31

北浦漁業協同組合

漁協毎の 計画番号	漁業の名称	対象種	現行免 許番号	内容	漁場の位置	関係地区	漁業時期
区1	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡土庄 町北浦小島 地先	小豆郡土庄 町馬越・屋形 崎・見目・小 海	1/1～12/31
区2	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡土庄 町北浦元目 地先	小豆郡土庄 町馬越・屋形 崎・見目・小 海	1/1～12/31

内海漁業協同組合

漁協毎の 計画番号	漁業の名称	対象種	現行免 許番号	内容	漁場の位置	関係地区	漁業時期
区1	藻類養殖業	のり	区55	区域拡張	小豆郡小豆 島町田浦南 地先	小豆郡小豆 島町苗羽、 堀越、田浦、 西村	10/1～翌年 3/31
区2	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡小豆 島町田浦地 先	小豆郡小豆 島町苗羽、 堀越、田浦、 西村	1/1～12/31

池田漁業協同組合

漁協毎の 計画番号	漁業の名称	対象種	現行免 許番号	内容	漁場の位置	関係地区	漁業時期
区1	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡小豆 島町三都地 先	小豆郡小豆 島町神浦	1/1～12/31
区2	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡小豆 島町吉野地 先	小豆郡小豆 島町吉野	1/1～12/31
区3	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡小豆 島町室生地 先	小豆郡小豆 島町室生	1/1～12/31
区4	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡小豆 島町飛崎西 地先	小豆郡小豆 島町蒲生	1/1～12/31

与島漁業協同組合

漁協毎の 計画番号	漁業の名称	対象種	現行免 許番号	内容	漁場の位置	関係地区	漁業時期
区1	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり・ あかがい	-	新規	坂出市瀬居 町北浦地先	坂出市瀬居 町・沙弥島・ 与島町・岩 黒・櫃石	1/1～12/31
区2	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり・ あかがい	-	新規	坂出市瀬居 町竹浦地先	坂出市瀬居 町・沙弥島・ 与島町・岩 黒・櫃石	1/1～12/31
区3	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり・ あかがい	-	新規	坂出市瀬居 町東浦漁港 本浦地先	坂出市瀬居 町・沙弥島・ 与島町・岩 黒・櫃石	1/1～12/31
区4	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり・ あかがい	-	新規	坂出市沙弥 島東地先	坂出市瀬居 町・沙弥島・ 与島町・岩 黒・櫃石	1/1～12/31
区5	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり・ あかがい	-	新規	坂出市小与 島地先	坂出市瀬居 町・沙弥島・ 与島町・岩 黒・櫃石	1/1～12/31
区6	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり・ あかがい	-	新規	坂出市岩黒 地先	坂出市瀬居 町・沙弥島・ 与島町・岩 黒・櫃石	1/1～12/31
区7	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり・ あかがい	-	新規	坂出市櫃石 島南東地先	坂出市瀬居 町・沙弥島・ 与島町・岩 黒・櫃石	1/1～12/31

中讃西部漁業協同組合

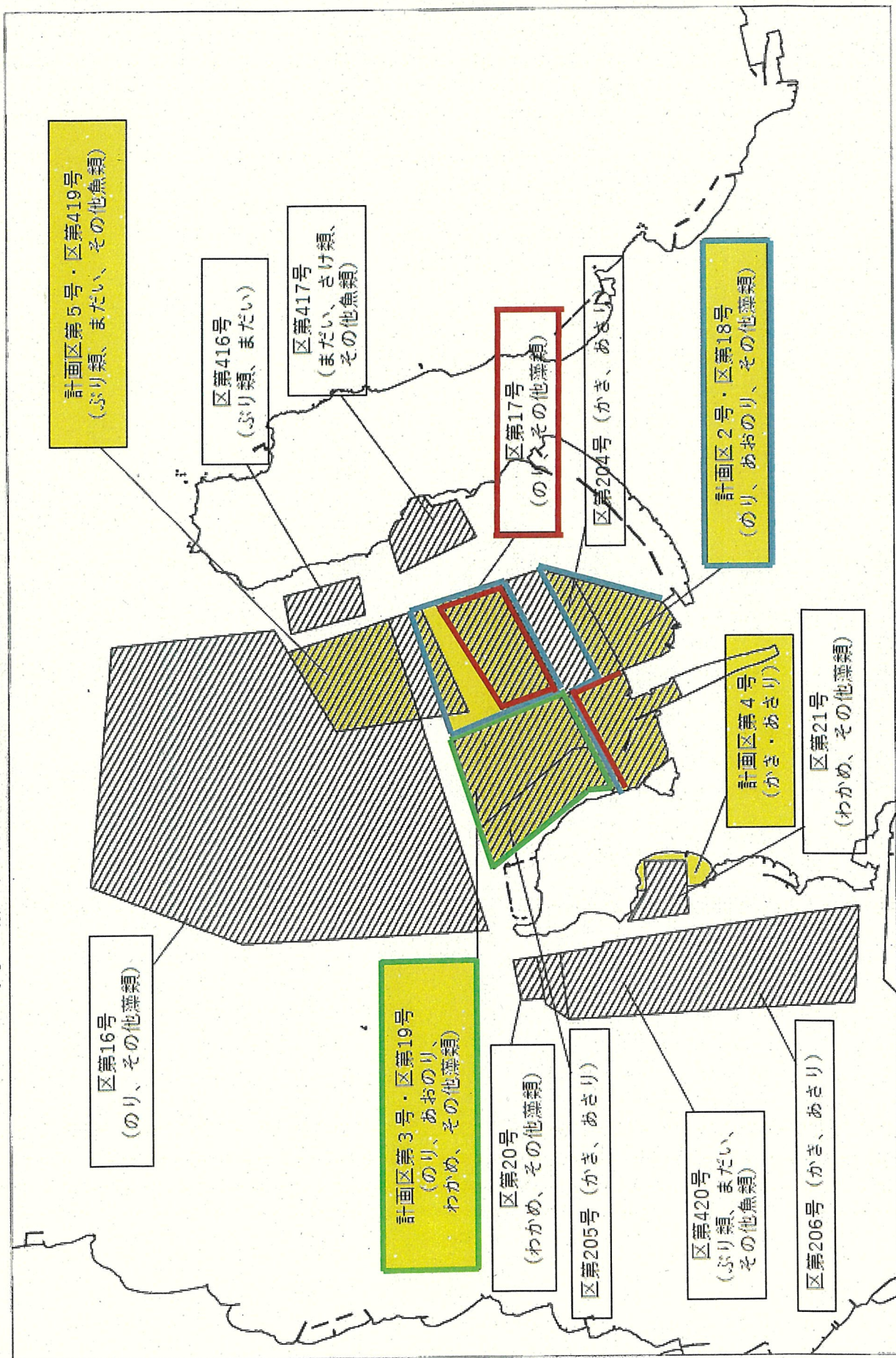
漁協毎の 計画番号	漁業の名称	対象種	現行免 許番号	内容	漁場の位置	関係地区	漁業時期	備考
区1	藻類養殖業	のり	区112	区域縮小	丸亀市中津 地先	丸亀市(中讃 西部漁業協 同組合の地 区に限る。)	10/11～翌年 4/10	
区2	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり	-	新規	丸亀市中津 地先	丸亀市(中讃 西部漁業協 同組合の地 区に限る。)、 仲多度郡多 度津町(中讃 西部漁業協 同組合の地 区に限る。)	1/1～12/31	藻類養殖業 区112の縮小 部分

2 漁協ごとの総合連絡図、漁場計画及び漁場図 資料1-2、資料1-3

3 漁場ごとの行使計画表 資料1-4

4 今後のスケジュール 資料1-5

鴨庄漁業協同組合 総合連絡図(区画漁業権)



1:20,000

0 0.25 0.5 0.75 1 1.25 km

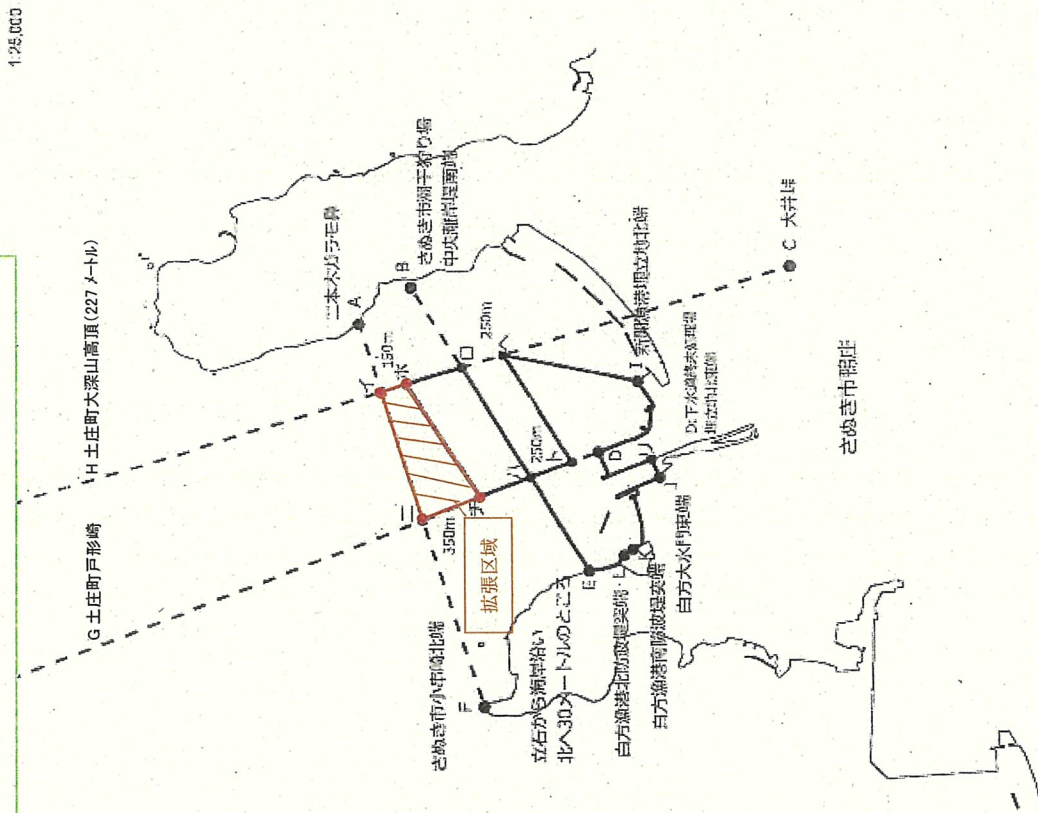
計画番号 区第2号 (区第18号の変更)

藻類養殖(あおのり、その他藻類)

期間:10月1日から翌年7月31日

のり

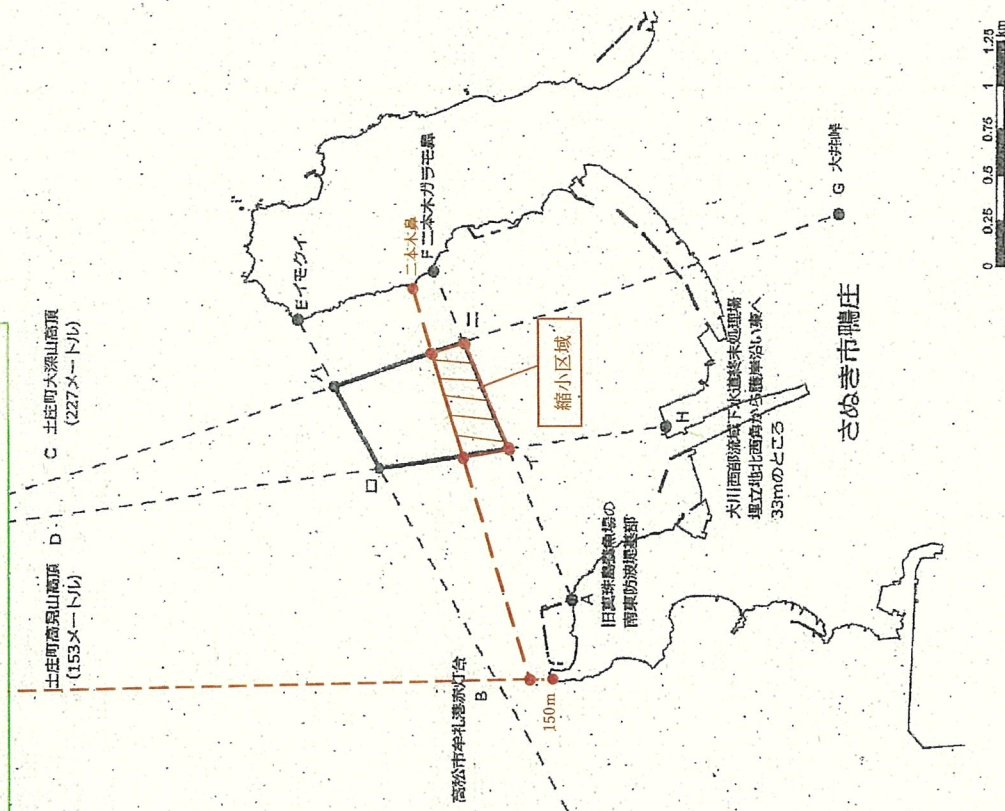
期間:10月1日から翌年3月31日



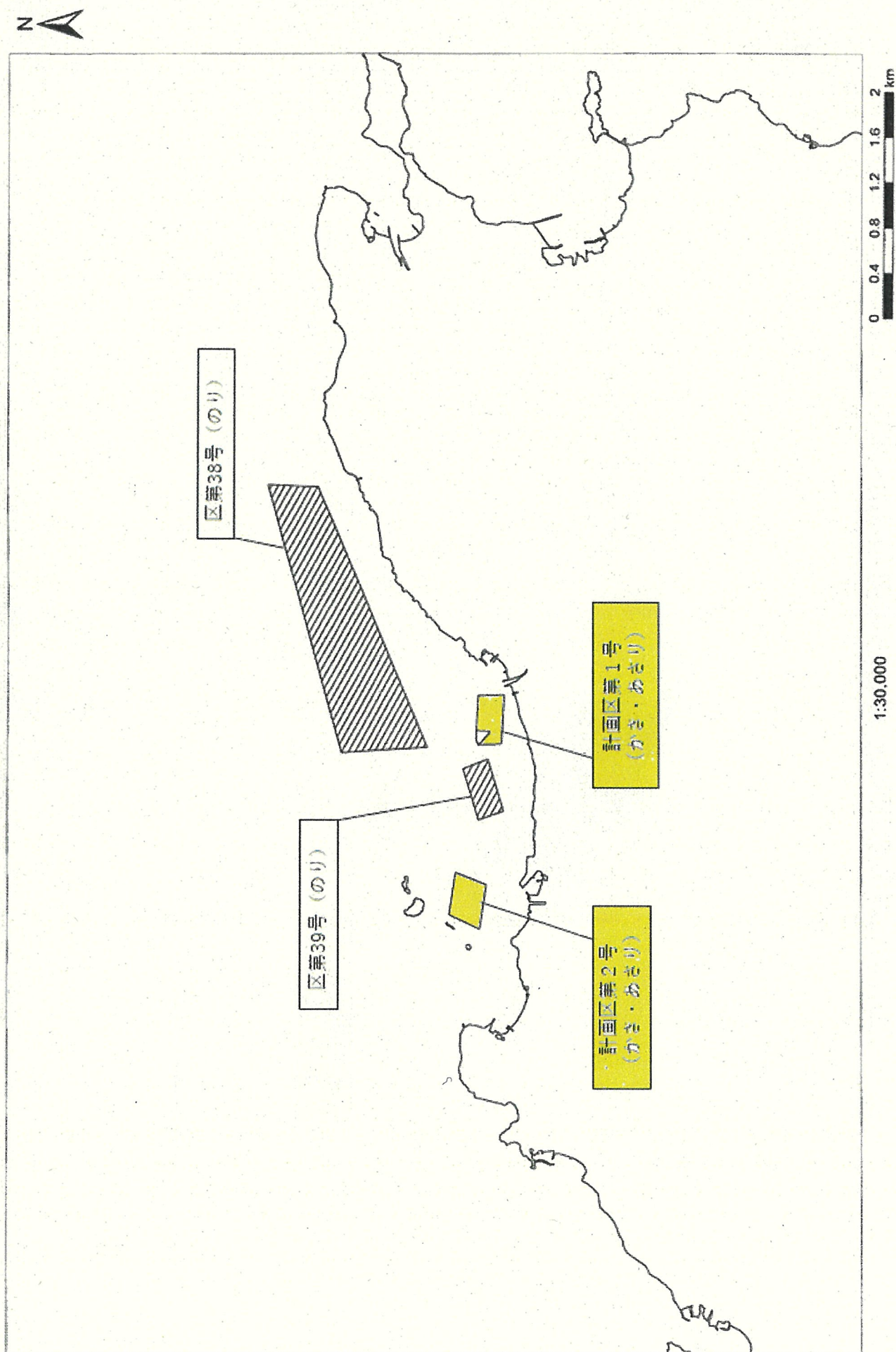
計画番号 区第5号 (区第419号の変更)

魚類小割式養殖業(ぶり類、まだい、その他魚類)

期間:3月15日から翌年2月末日

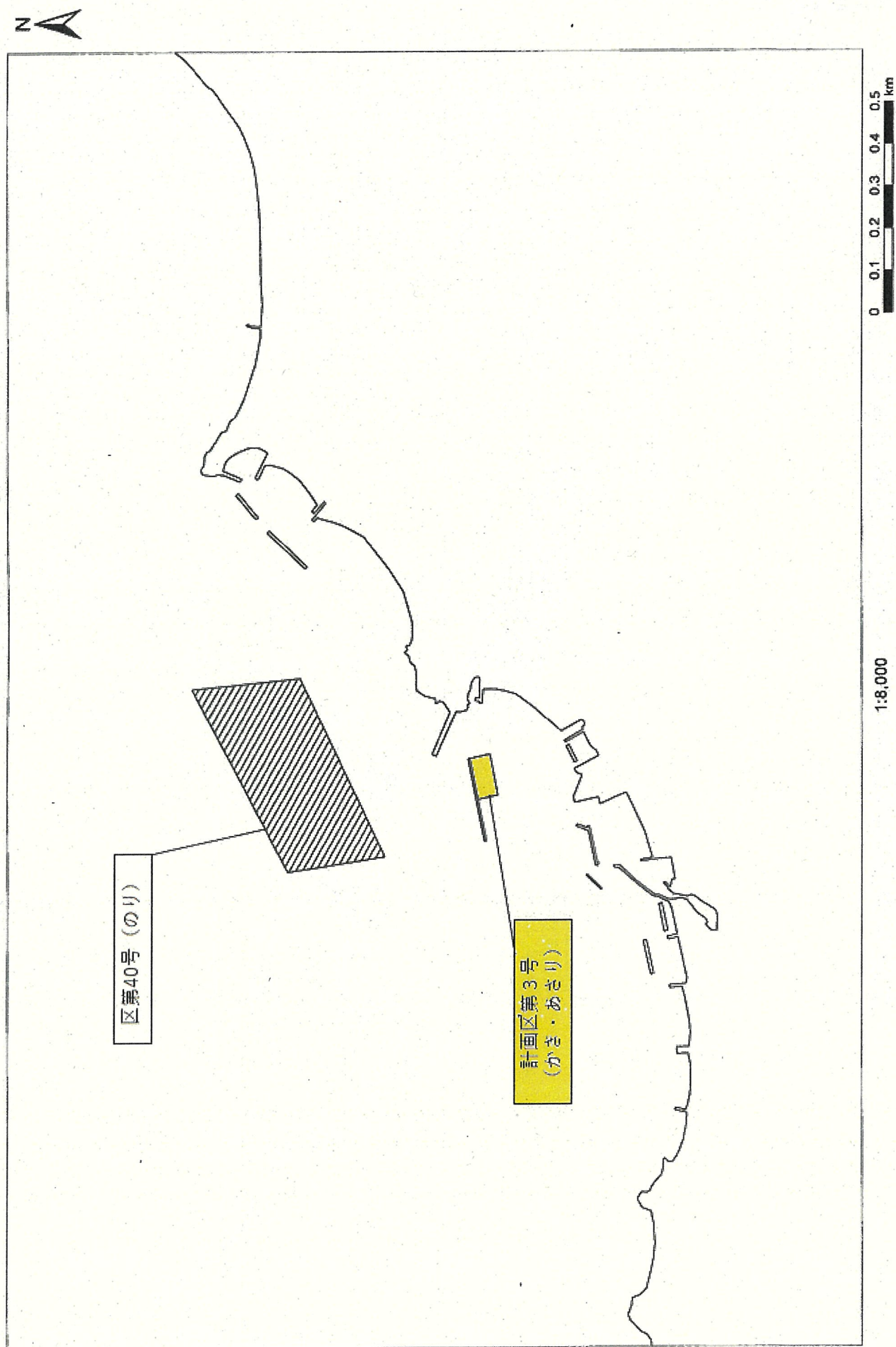


土庄中央漁業協同組合 総合連絡図(区画漁業権)

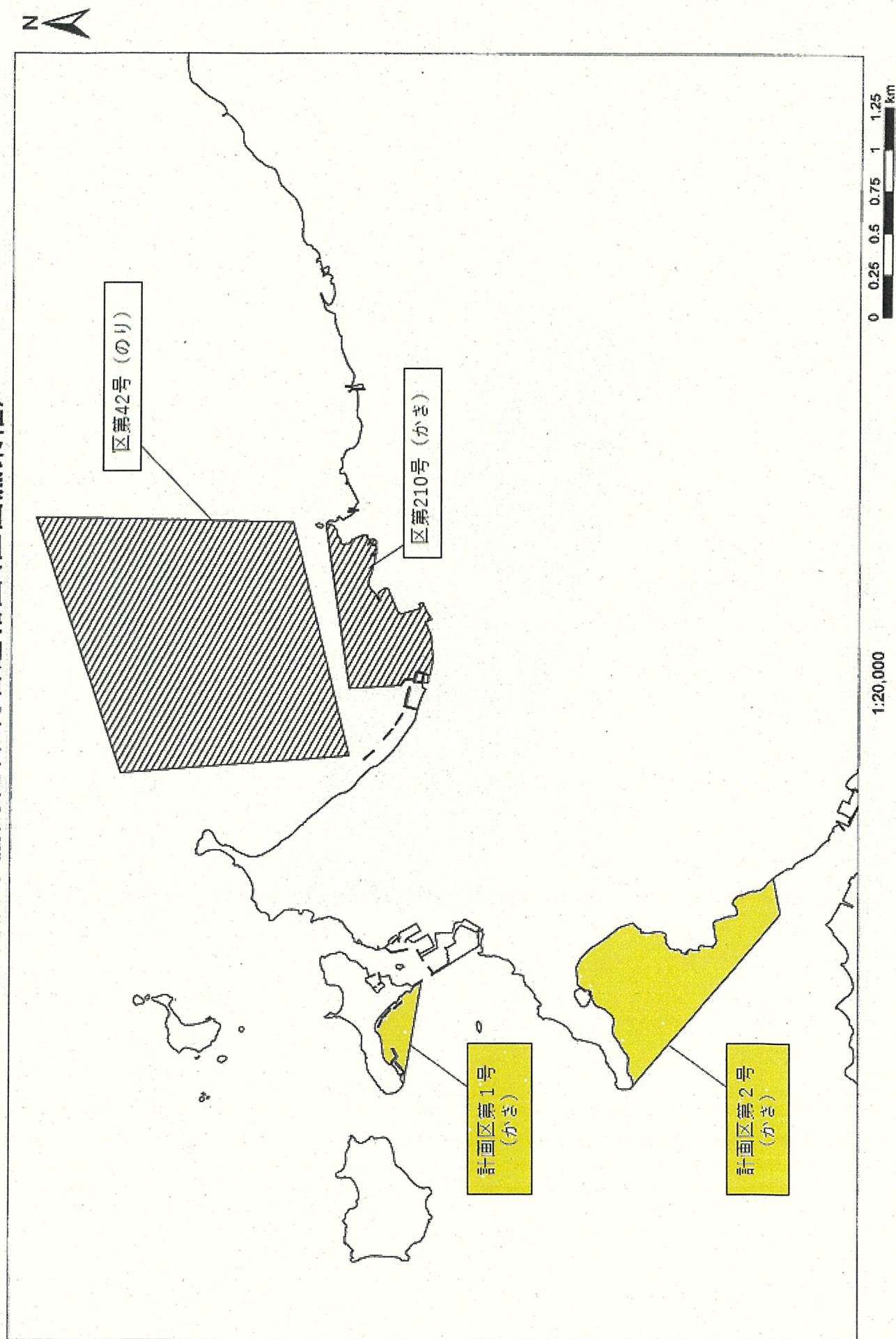


1:30,000

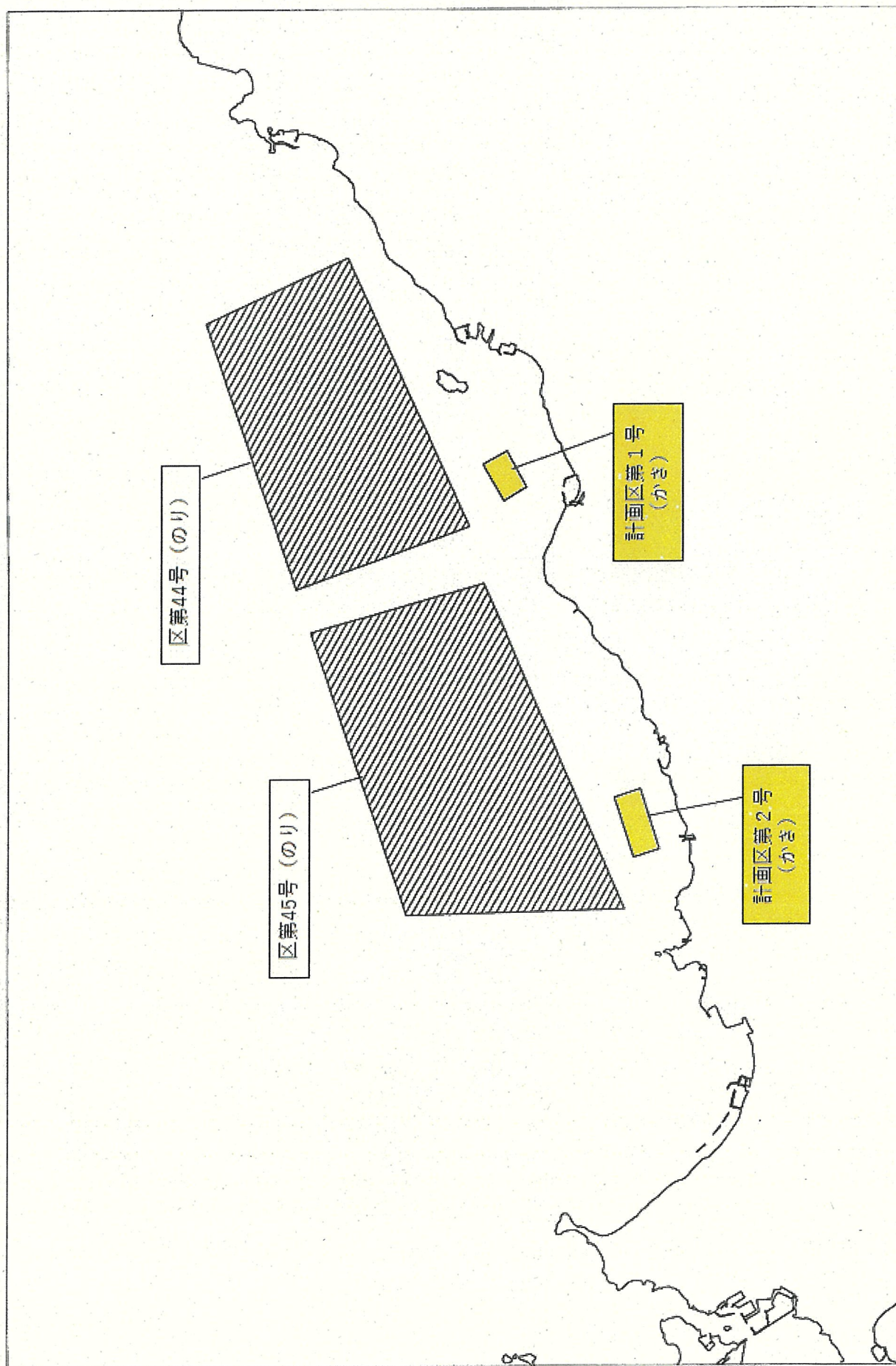
土庄中央漁業協同組合 総合連絡図(区画漁業権)



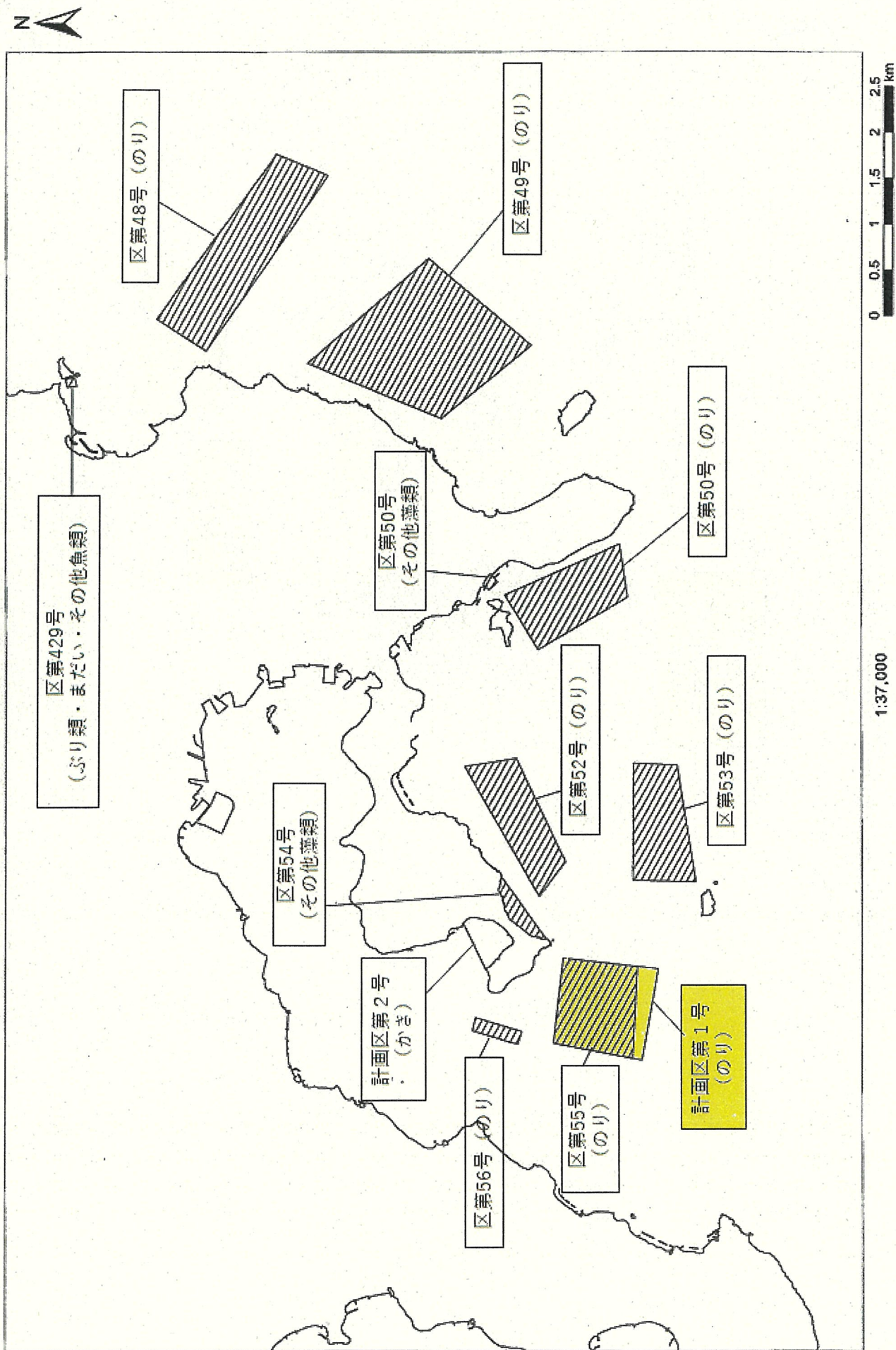
四海漁業協同組合 総合連絡図(区画漁業権)



北浦漁業協同組合 総合連絡図(区画漁業権)

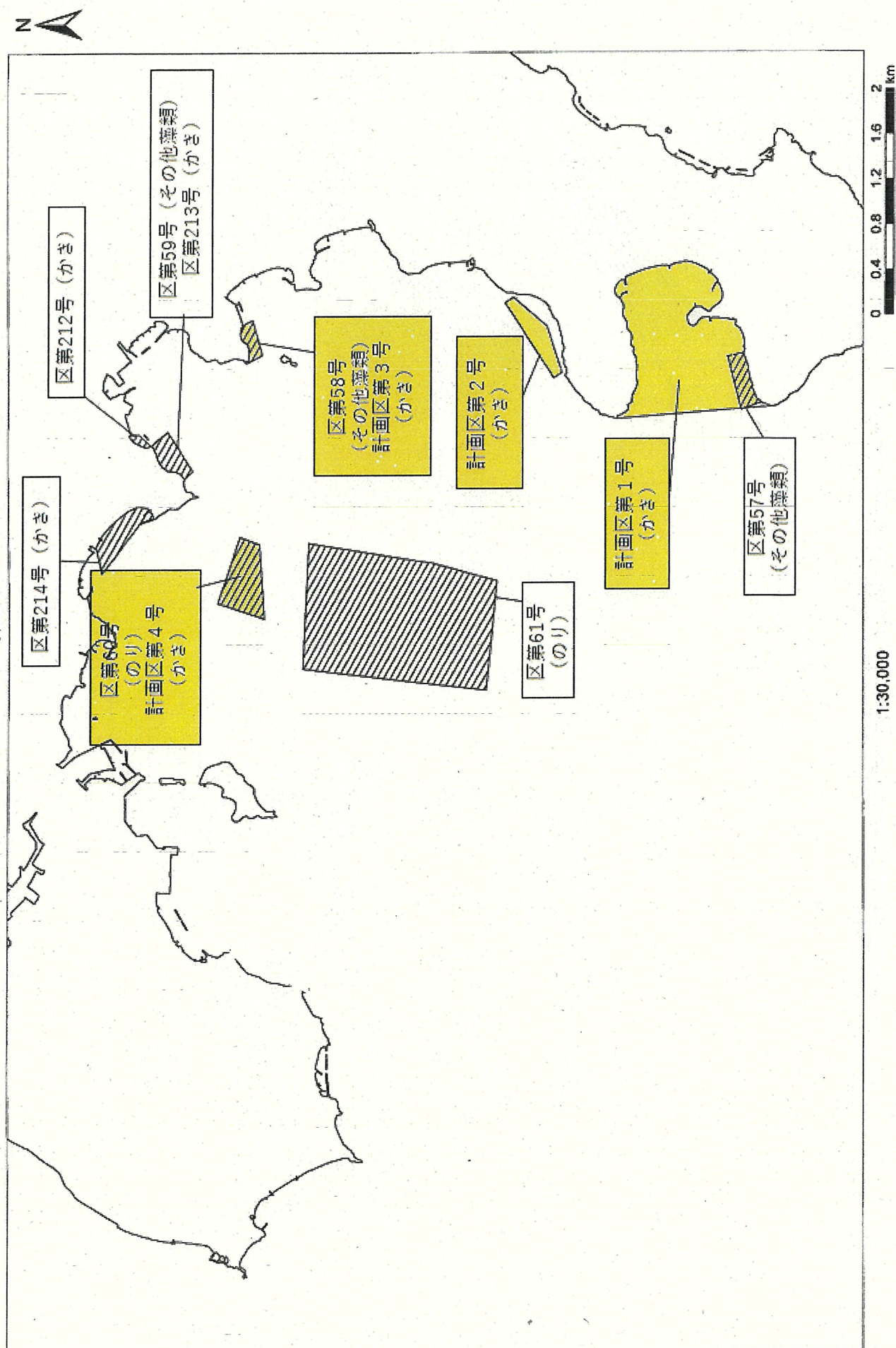


内海漁業協同組合 総合連絡図(区画漁業権)

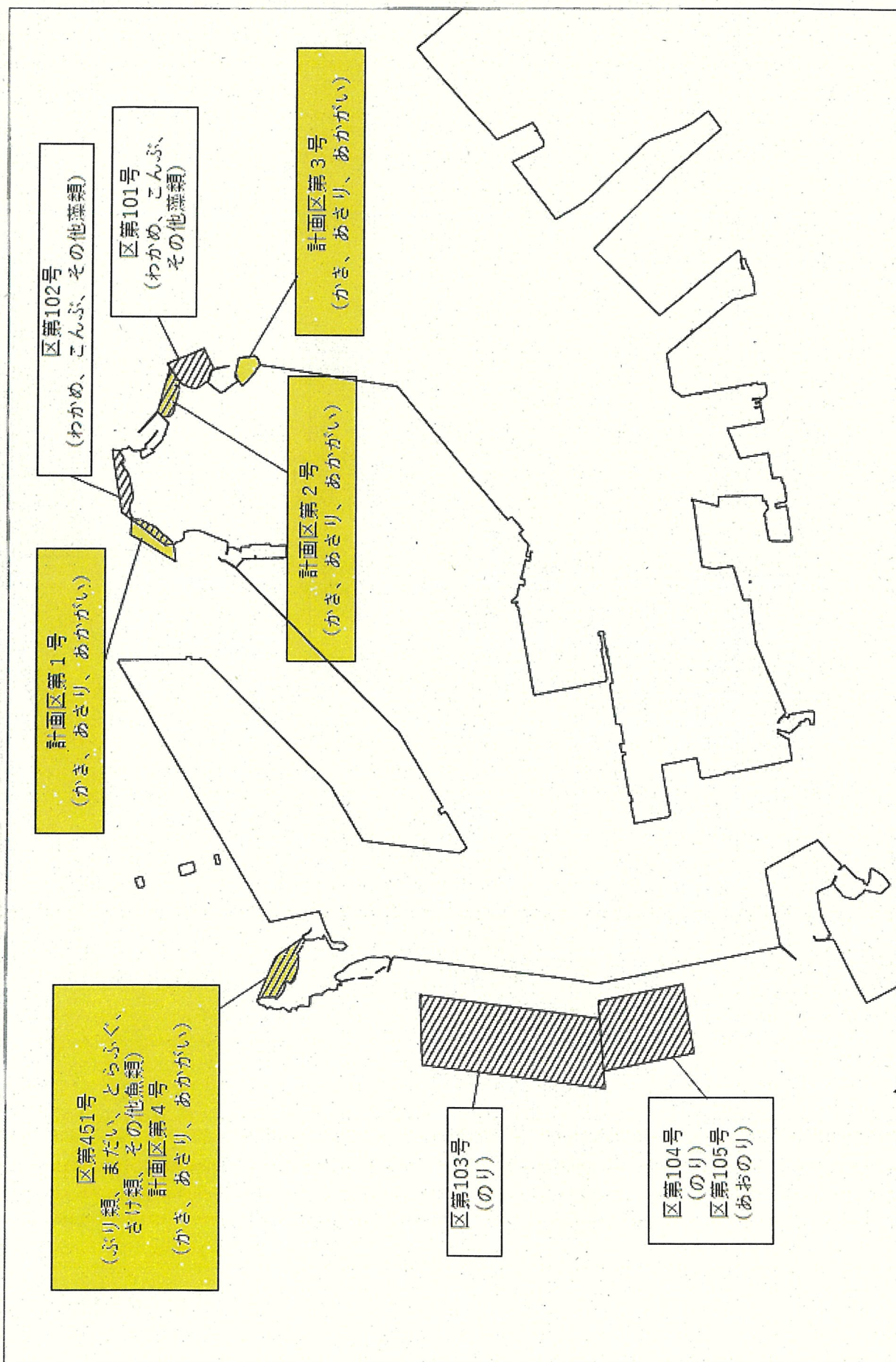


1:37,000

池田漁業協同組合 総合連絡図(区画漁業権)



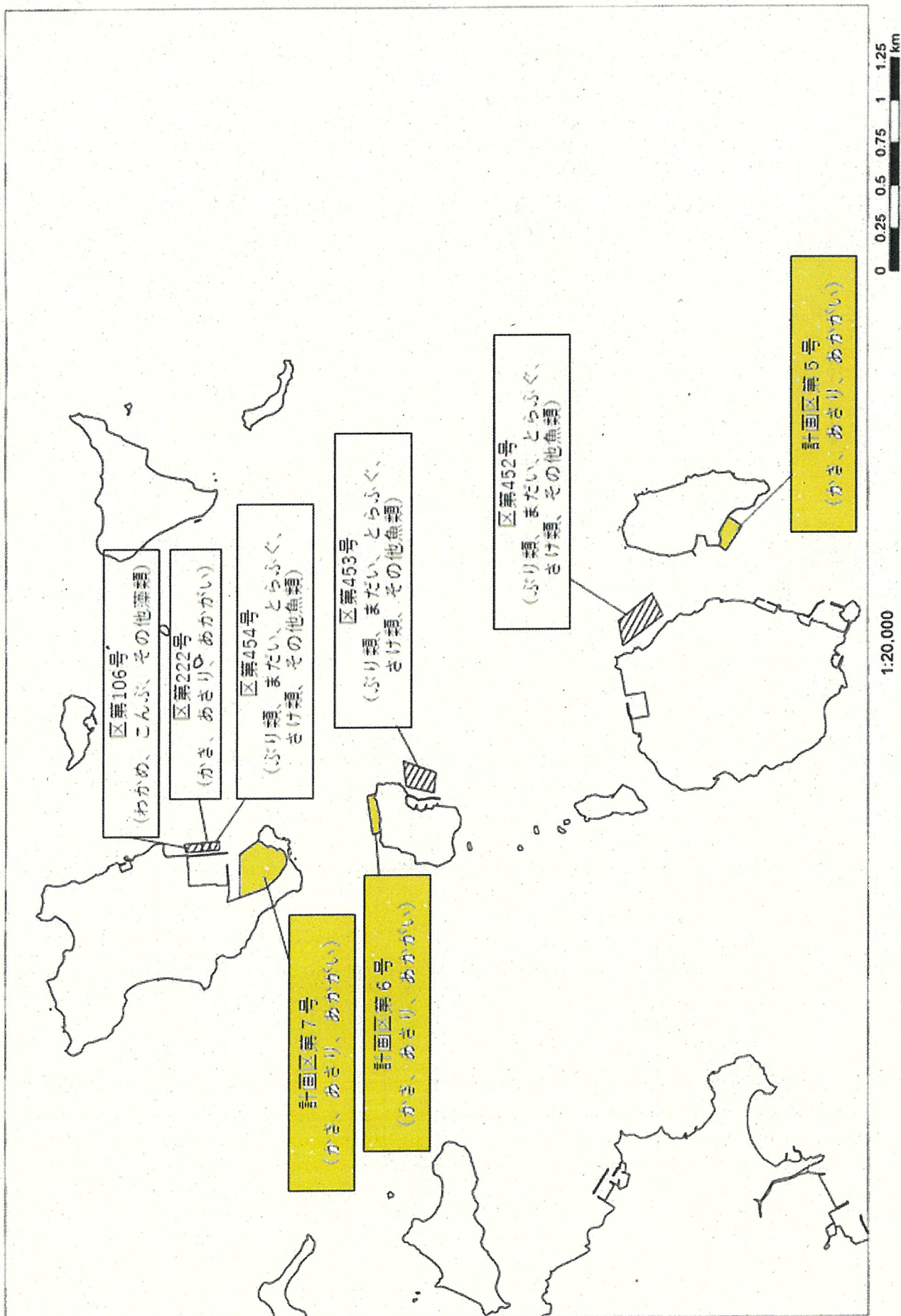
与島漁業協同組合 総合連絡図(区画漁業権)



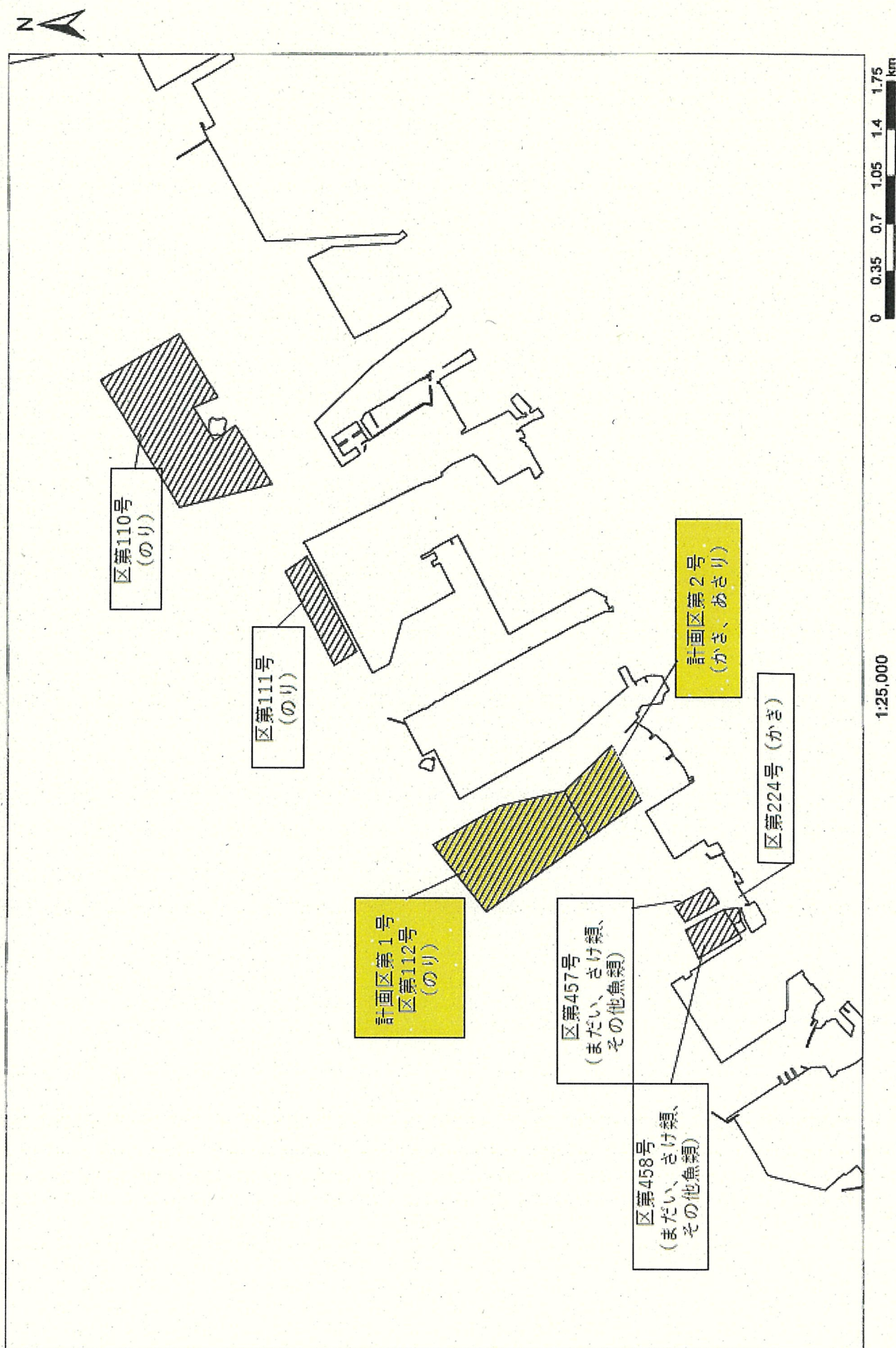
1:20,000

0 0.25 0.5 0.75 1 1.25 km

与島漁業協同組合 総合連絡図(区画漁業権)



中讃西部漁業協同組合 総合連絡図(区画漁業権)



漁 場 計 画

計画番号 区 2 号 (のり、あおのり、その他藻類)

(区第 18 号の変更)

1 漁場の位置及び区域

漁場の位置 さぬき市鴨庄長浜地先

点の位置

- 基点 A 二本木ガラモ鼻
- // B さぬき市潮干狩り場中央離岸堤南端
- // C 大井峠
- // D 大川西部流域下水道終末処理場埋立地北東端
(北緯 34 度 20 分 48.263 秒、東経 134 度 11 分 55.962 秒の点)
- // E 立石から海岸沿い北へ 30 メートルのところ
(北緯 34 度 20 分 50.47 秒、東経 134 度 11 分 28.322 秒の点)
- // F さぬき市小串崎北端
- // G 土庄町戸形崎
- // H 土庄町大深山高頂 (227 メートル)
- // I 新開漁港埋立地北端
(北緯 34 度 20 分 40.499 秒、東経 134 度 12 分 11.088 秒の点)
- // J 白方大水門東端
(北緯 34 度 20 分 37.084 秒、東経 134 度 11 分 49.533 秒の点)
- // K 白方漁港南防波堤突端
(北緯 34 度 20 分 42.065 秒、東経 134 度 11 分 33.65 秒の点)
- // L 白方漁港北防波堤突端
(北緯 34 度 20 分 43.428 秒、東経 134 度 11 分 32.79 秒の点)
- 点 イ A から F 見通し線と C から H 見通し線との交差点
- // ロ B から E 見通し線と C から H 見通し線との交差点
(北緯 34 度 21 分 12 秒、東経 134 度 12 分 16 秒の点)
- // ハ B から E 見通し線と D から G 見通し線との交差点
(北緯 34 度 21 分 0 秒、東経 134 度 11 分 50 秒の点)
- // ニ A から F 見通し線と D から G 見通し線との交差点
- // ホ ロ から C 見通し線上ロから 250 メートルのところ
(北緯 34 度 21 分 4 秒、東経 134 度 12 分 19 秒の点)
- // ヘ ハ から D 見通し線上ハから 250 メートルのところ
(北緯 34 度 20 分 53 秒、東経 134 度 11 分 54 秒の点)
- // ト J から鴨部川左岸と直角に東への延長線と鴨部川右岸との交差点
(北緯 34 度 20 分 38.764 秒、東経 134 度 11 分 54.037 秒の点)

漁場の区域 イロ、ロハ、ハヘ、ヘホ、ホ I、ト J、KL、Eハ、ハニ、ニイの 10 直線と I ト、J K、L E 間最大高潮時海岸線に囲まれた区域

2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁業の名称	漁業時期
藻類養殖業	のり：10月1日から翌年3月31日まで あおのり、その他藻類：10月1日から翌年7月31日まで

3 関係地区 さぬき市鴨庄

4 漁場図（別紙のとおり）



漁 場 計 画

計画番号 区第3号 (わかめ、のり、あおのり、その他藻類)

(第19号の変更)

1 漁場の位置及び区域

漁場の位置 さぬき市鴨庄白方地先

点の位置

基点A 立石から海岸沿い北へ30メートルのところ

// B 白方十字岩

// C 小串高頂

// D さぬき市猿子島高頂

// E 小串崎北端

// F 二本木ガラモ鼻

// G さぬき市潮干狩り場中央離岸堤南端

// H バベギ鼻

// I 大川西部流域下水道終末処理場埋立地北東端

// J 土庄町戸形崎

点 イ AからG見通し線上Aから50メートルのところ
(北緯34度20分51秒、東経134度11分30秒の点)

// ロ BからH見通し線上Bから50メートルのところ
(北緯34度20分56秒、東経134度11分29秒の点)

// ハ CからD見通し延長線とEからF見通し線との交差点
(北緯34度21分14秒、東経134度11分12秒の点)

// ニ EからF見通し線とIからJ見通し線との交差点
(北緯34度21分21秒、東経134度11分41秒の点)

// ホ AからG見通し線とIからJ見通し線との交差点
(北緯34度21分0秒、東経134度11分50秒の点)

漁場の区域 ニホ、ホイ、イロ、ロハ、ハニの5直線に囲まれた区域

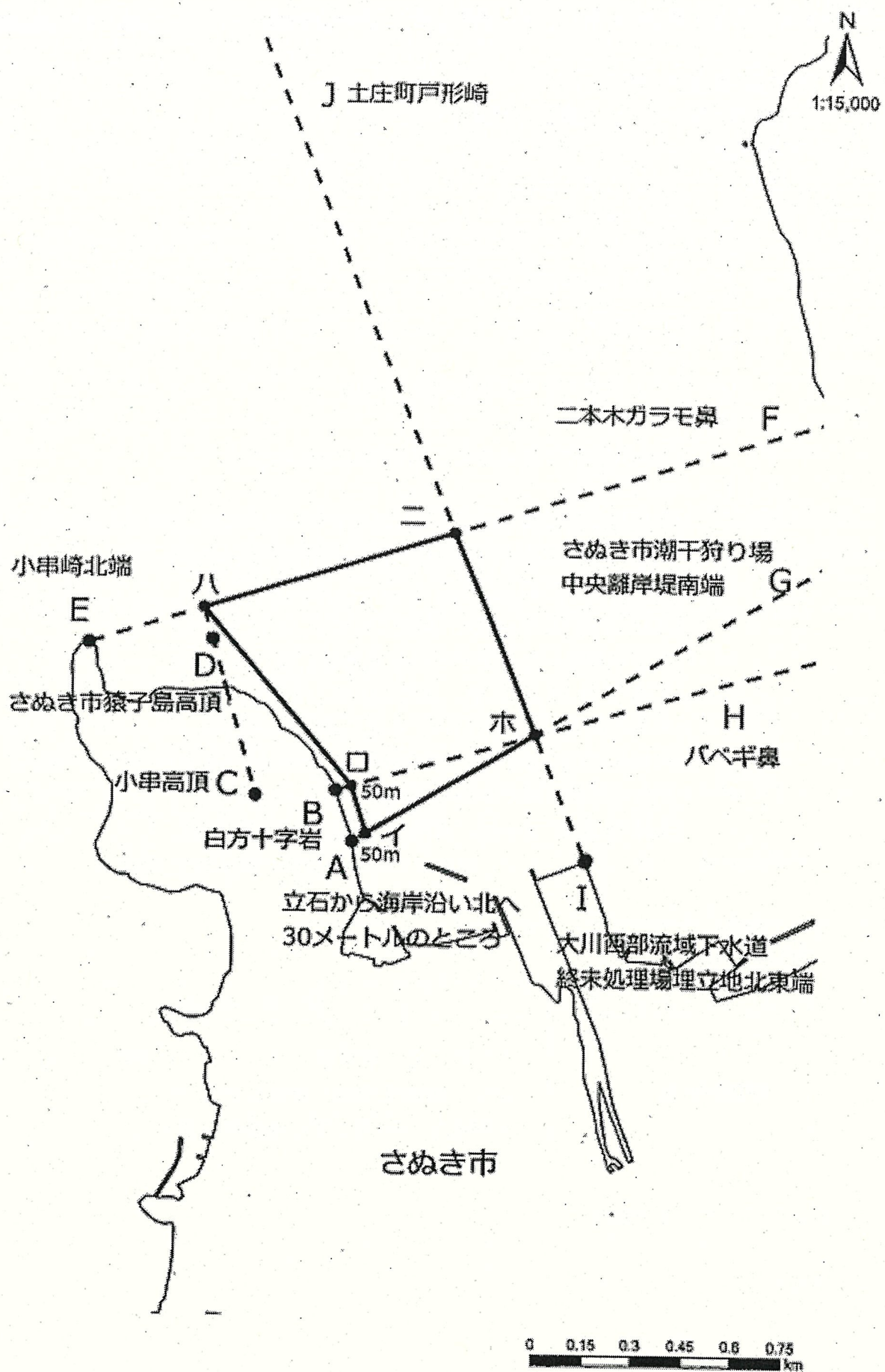
2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
藻類養殖業	わかめ、その他藻類：11月1日から翌年4月30日まで のり：10月1日から翌年3月31日 あおのり：10月1日から翌年7月31日

3 関係地区 さぬき市鴨庄

4 漁場図 (別紙のとおり)



漁 場 計 画

計画番号 区第4号 (かき・あさり)

(新規)

1 漁場の位置及び区域

漁場の位置 さぬき市鴨庄穴子地先

点の位置

基点A ヒョウタンゴ鼻北端

// B 穴子海岸北西端

// C 穴子中央三差路

// D 穴子水門北防砂堤突端

// E 高松市牟礼港赤灯台

点 イ AからB見通し線とホからE見通し線との交差点

// ロ BからA見通し線上Bから50メートルのところ

(北緯34度20分45秒、東経134度11分6秒の点)

// ハ ホからニ見通し延長線とホからイ見通し線と平行にロから東に見通した線との交差点

(北緯34度20分45秒、東経134度11分13秒の点)

// ニ CからE見通し線上Cから50メートルのところ

(北緯34度20分39秒、東経134度11分13秒の点)

// ホ DからE見通し線上Dから20メートルのところ

(北緯34度20分37秒、東経134度11分13秒の点)

漁場の区域 Bロ、ロハ、ハホ、ホイ、イAの5直線とAB間最大高潮時海岸線に囲まれた区域

に囲まれた区域

2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

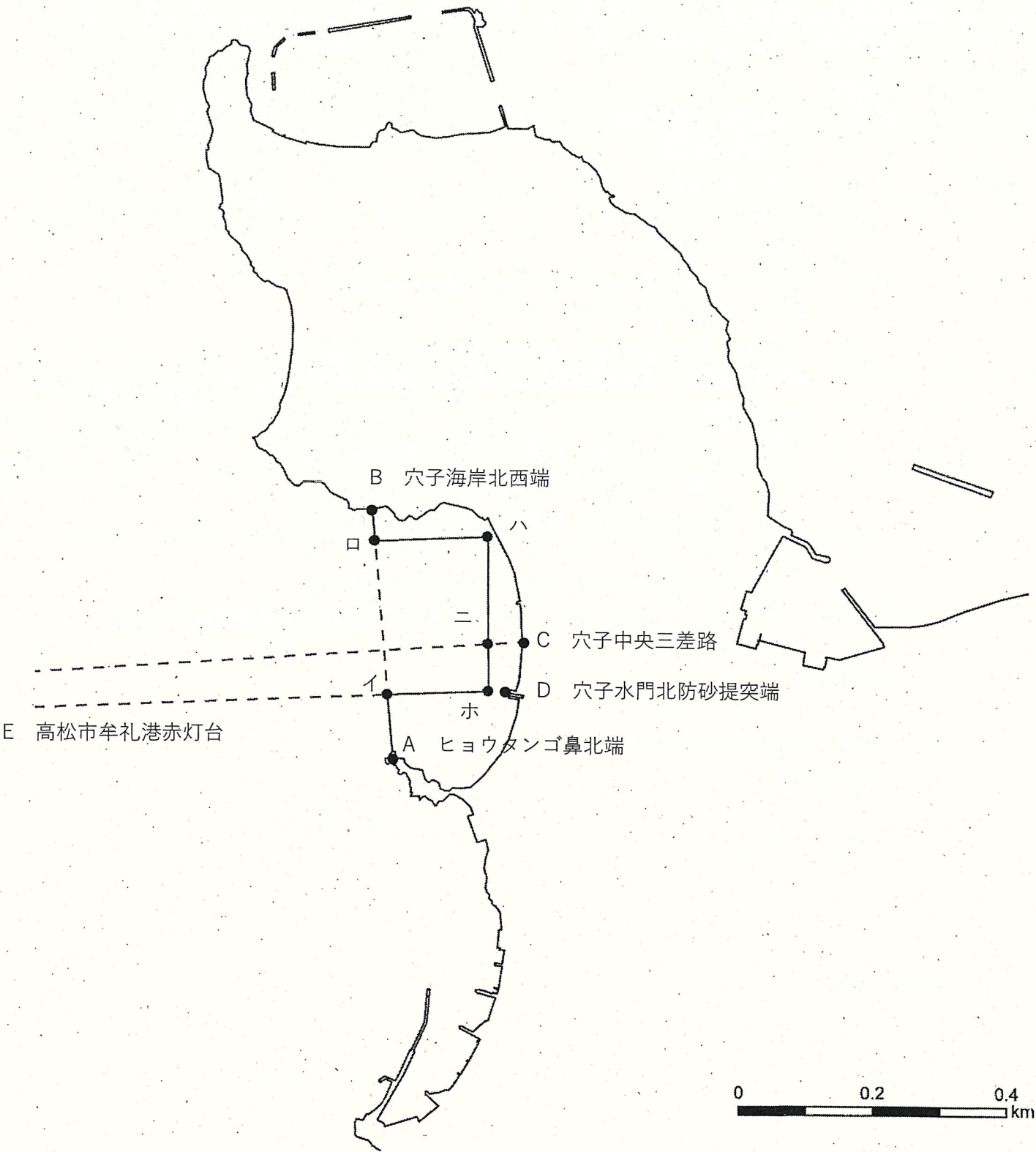
第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 さぬき市鴨庄

4 漁場図 (別紙のとおり)

N
1:7,500



漁 場 計 画

計画番号 区第5号（ぶり類、まだい、その他魚類）

（区第419号の変更）

1 漁場の位置及び区域

漁場の位置 さぬき市鴨庄長浜沖地先

点の位置

基点A 小串崎北端

// B 高松市牟礼港赤灯台

// C 土庄町大深山高頂（227メートル）

// D 土庄町高見山高頂（153メートル）

// E イモクイ

// F 二本木鼻

// G 大井峠

// H 大川西部流域下水道終末処理場埋立地北西角から護岸沿い東へ33メートルのところ

点 イ ホからF見通し線とHからD見通し線との交差点

// ロ BからE見通し線とHからD見通し線との交差点
（北緯34度21分44秒、東経134度11分43秒の点）

// ハ BからE見通し線とGからC見通し線との交差点
（北緯34度21分53秒、東経134度12分1秒の点）

// ニ ホからF見通し線とGからC見通し線との交差点

// ホ AからD見通し線上Aから150メートルのところ
（北緯34度21分15秒、東経134度10分58秒の点）

漁場の区域 イロ、ロハ、ハニ、ニイの4直線に囲まれた区域

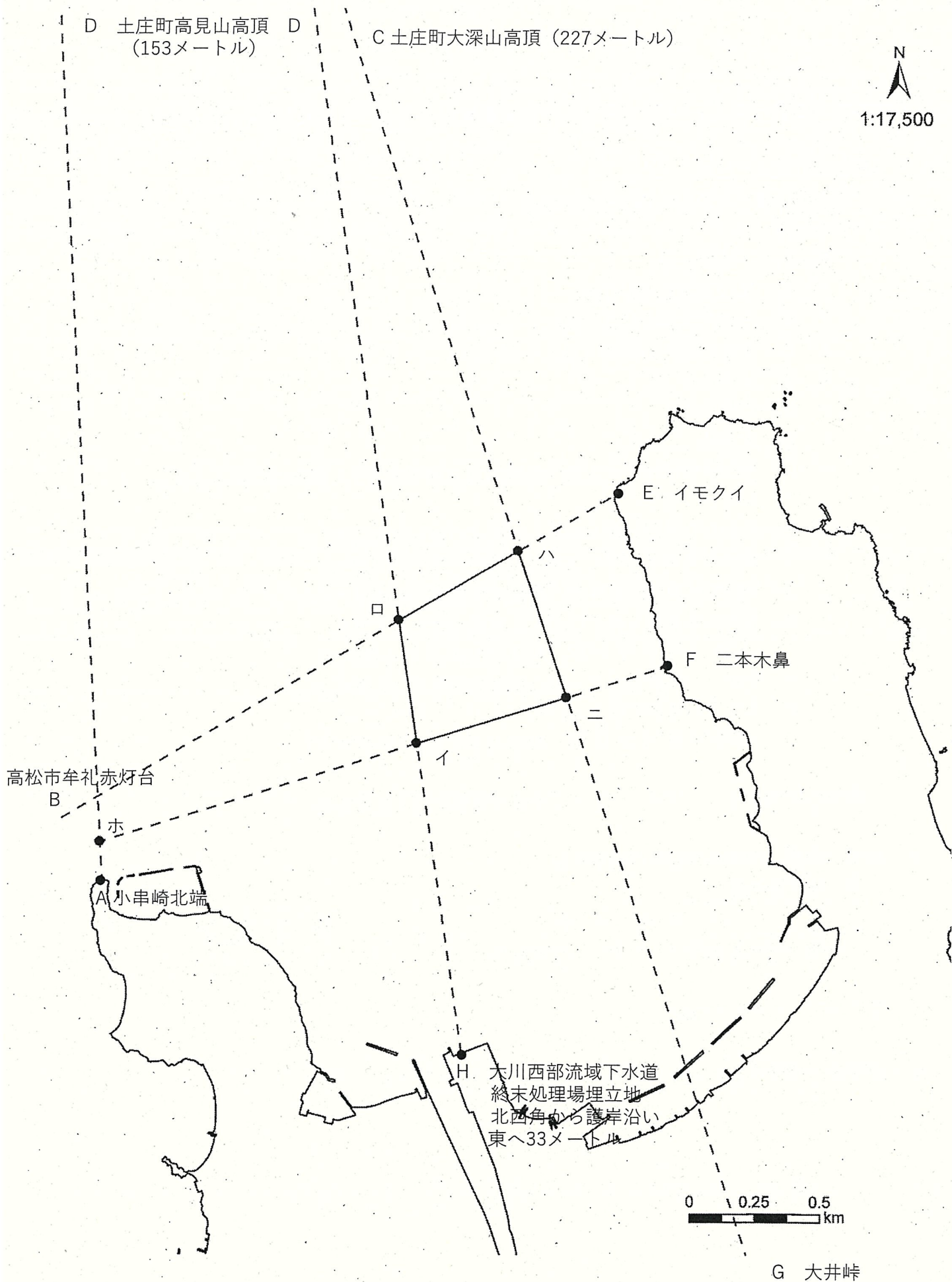
2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
魚類小割式養殖業（くろまぐろ養殖業を除く）	3月15日から2月末日まで

3 関係地区 さぬき市鴨庄

4 漁場図（別紙のとおり）



漁 場 計 画

計画番号 区第1号 (か き・あさり) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

漁場の位置 小豆郡土庄町小部地先

点の位置

基 点 基点A 小島西端

// B シルバービーチ西砂止突端

// C 小部漁港2号導流堤西側突端

// D 小部漁港5号防砂堤西側突端 (東側左岸突端)

// E 小部漁港1号防波堤基部

// F 小島北端

点 イ AからB見通し線とEからF見通し線と平行にDから西に見通した線との交差点

(北緯34度32分58秒、東経134度17分49秒の点)

// ロ EからF見通し線とBからA見通し線と平行にCから北に見通した線との交差点

(北緯34度33分5秒、東経134度18分7秒の点)

// ハ Dからイ見通し線とCからロ見通し線との交差点

(北緯34度32分57秒、東経134度18分7秒の点)

漁場の区域 Aイ、イハ、ハロ、ロFの4直線と最大高潮時海岸線に囲まれた区域

2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業の時期

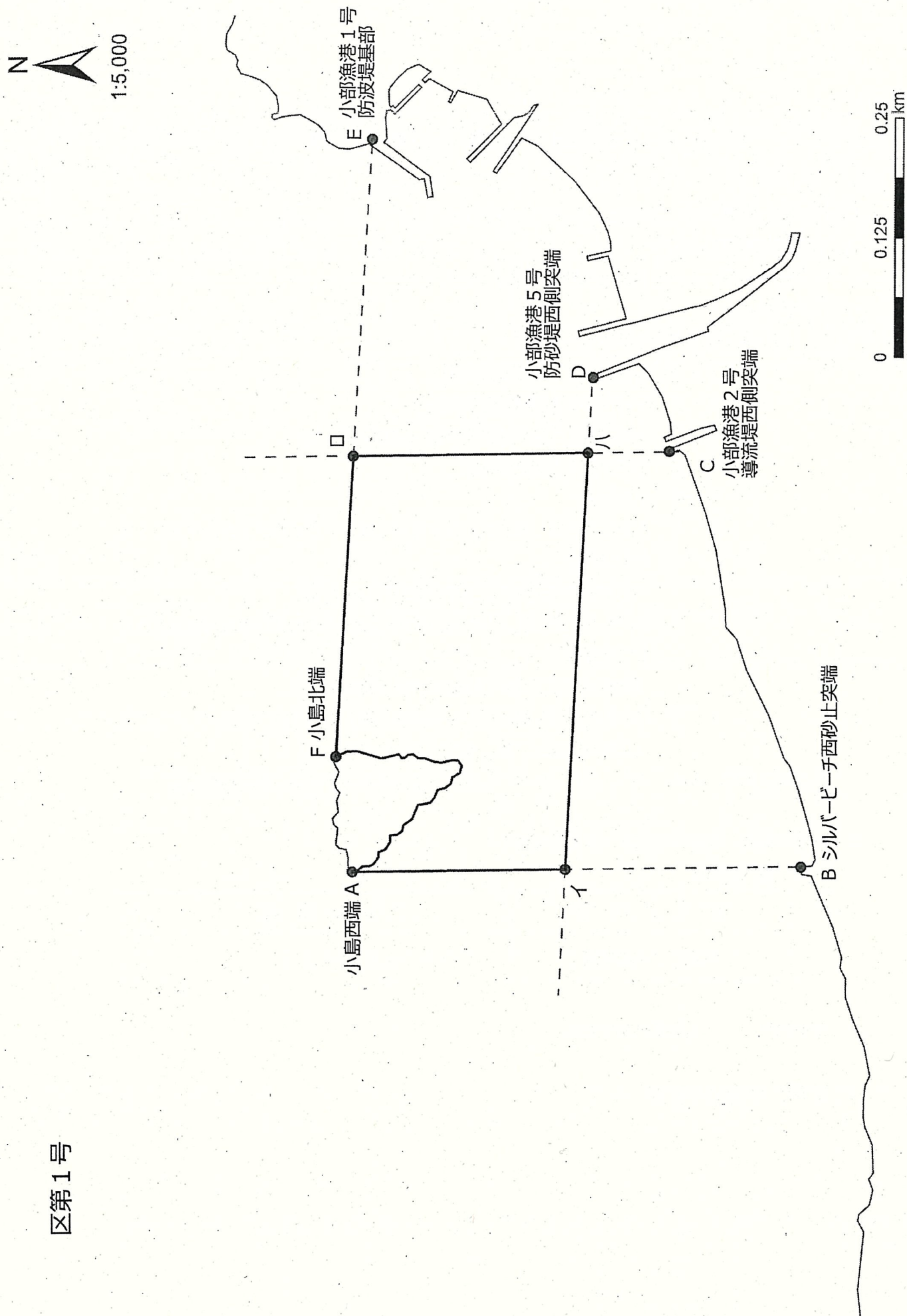
第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 小豆郡土庄町大部

4 漁場図 (別紙のとおり)

区第1号



漁 場 計 画

計画番号 区第2号 (か き・あさり) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

漁場の位置 小豆郡土庄町大部中藻沖

点の位置

基 点 基点A 高良鼻西端

// B 大島南端

// C 桂川東岸北角

// D ウノ石

// E 小島北端

// F 中ノ島高頂

点 イ AからB見通し線とEからF見通し線との交差点
(北緯34度33分15秒、東経134度16分50秒の点)

// ロ CからD見通し線とEからF見通し線との交差点
(北緯34度33分13秒、東経134度17分0秒の点)

// ハ DからC見通し線上ロからCへ300メートルのところ
(北緯34度33分3秒、東経134度17分0秒の点)

// ニ AからB見通し線とEからF見通し線と平行にハから東に見通した線
との交差点
(北緯34度33分6秒、東経134度16分44秒の点)

漁場の区域 イロ、ロハ、ハニ、ニイの4直線に囲まれた区域

2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業の時期

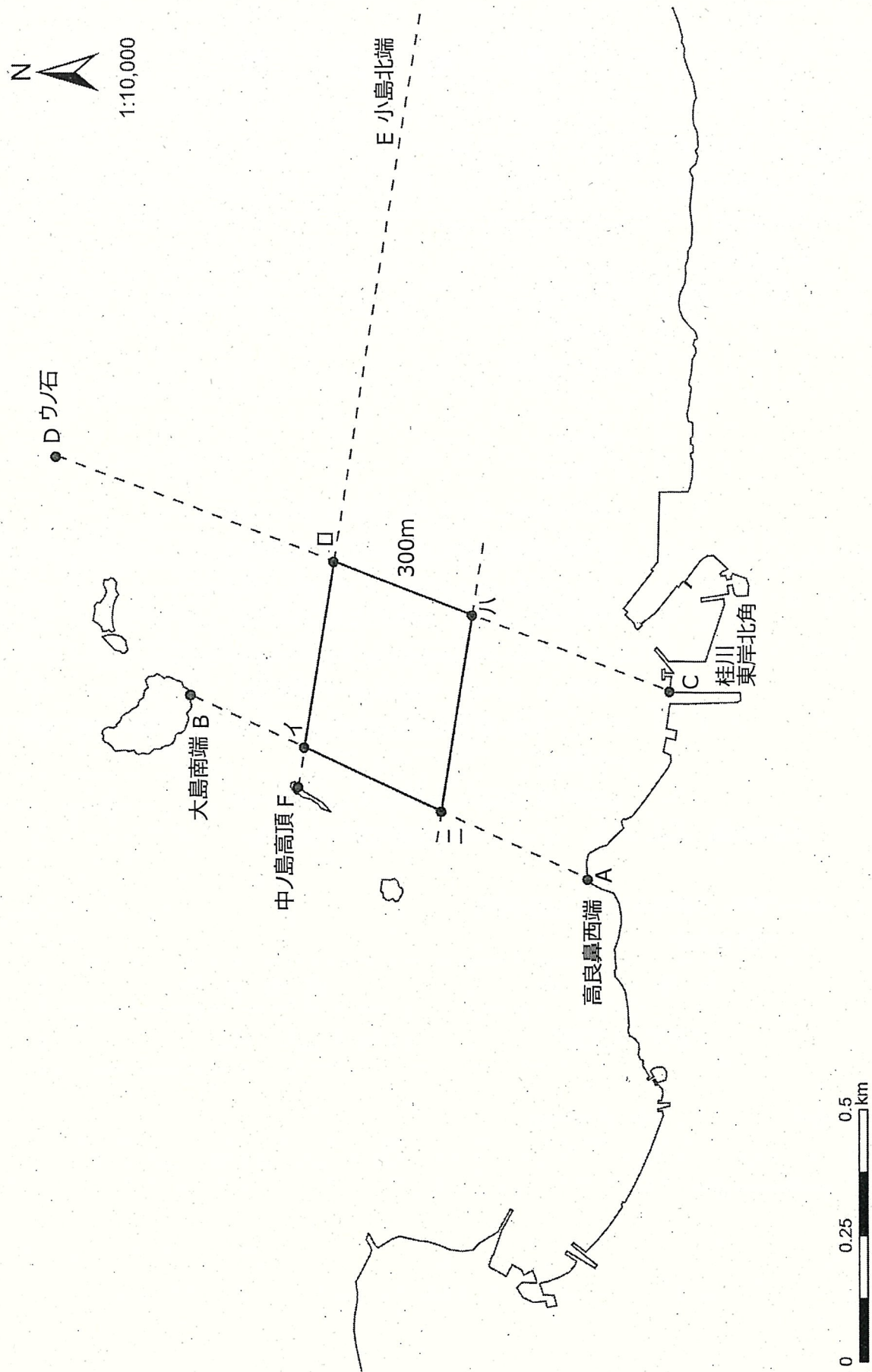
第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 小豆郡土庄町大部

4 漁場図 (別紙のとおり)

区第2号



漁 場 計 画

計画番号 区第3号 (かき・あさり) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

漁場の位置 小豆郡土庄町豊島家浦地先

点の位置

基 点 基点A 家浦港外一文字防波堤東端

〃 B 家浦港外一文字防波堤東端から100メートルのところ

点 イ AからB見通し線と直角にAから南に50メートルのところ
(北緯34度27分48秒、東経134度10分4秒の点)

〃 ロ AからB見通し線と直角にBから南に50メートルのところ

漁場の区域 AI、イロ、ロB、BAの4直線に囲まれた区域

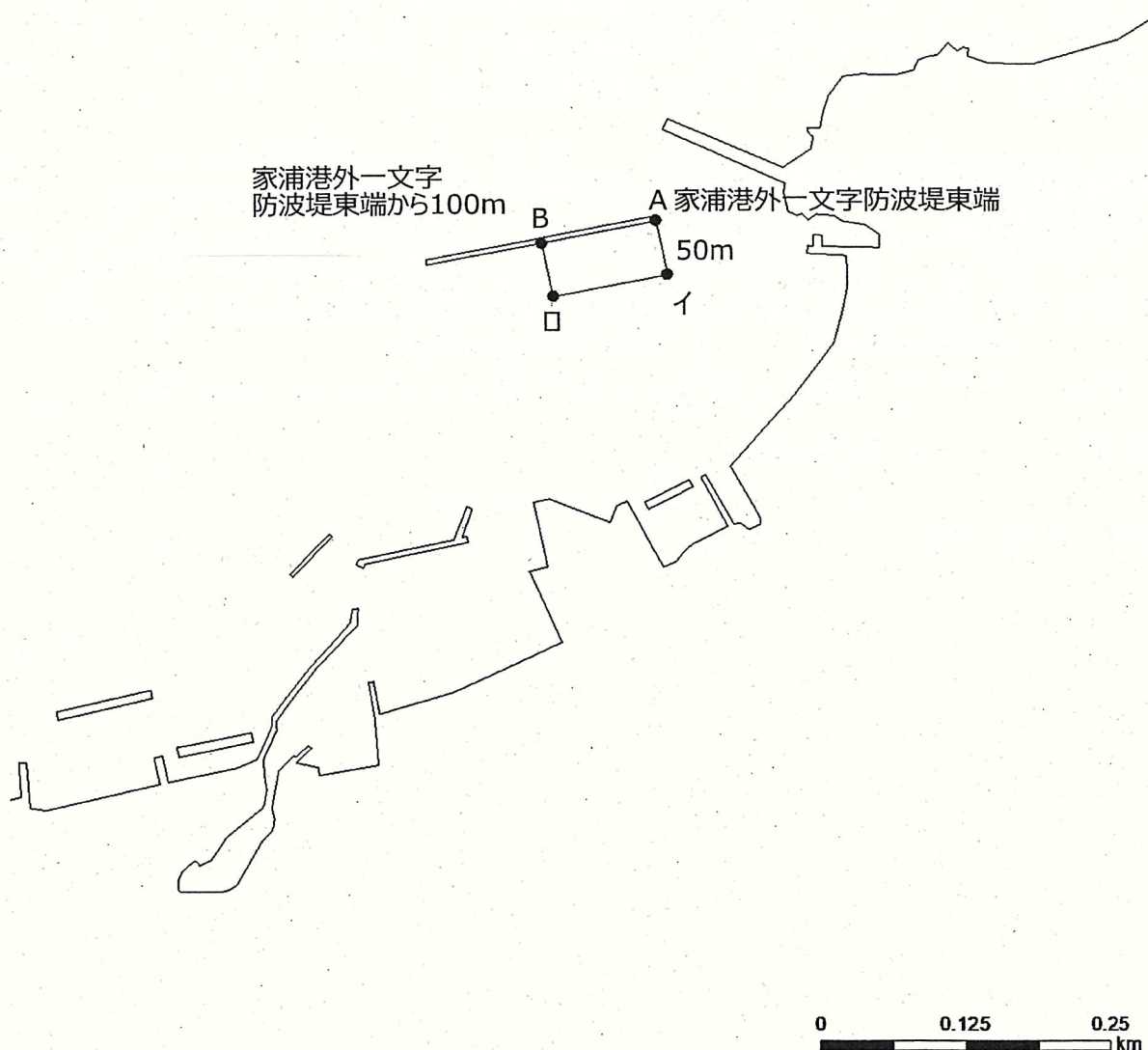
2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業の時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 小豆郡土庄町豊島家浦

4 漁場図 (別紙のとおり)



漁 場 計 画

計画番号 区第1号 (かき) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

ア 漁場の位置 小豆郡土庄町小江地先

イ 点の位置

基 点 A 沖之島灯台

B 沖之島西南端

ウ 漁場の区域 AからB見通し線と最大高潮時海岸線に囲まれた区域

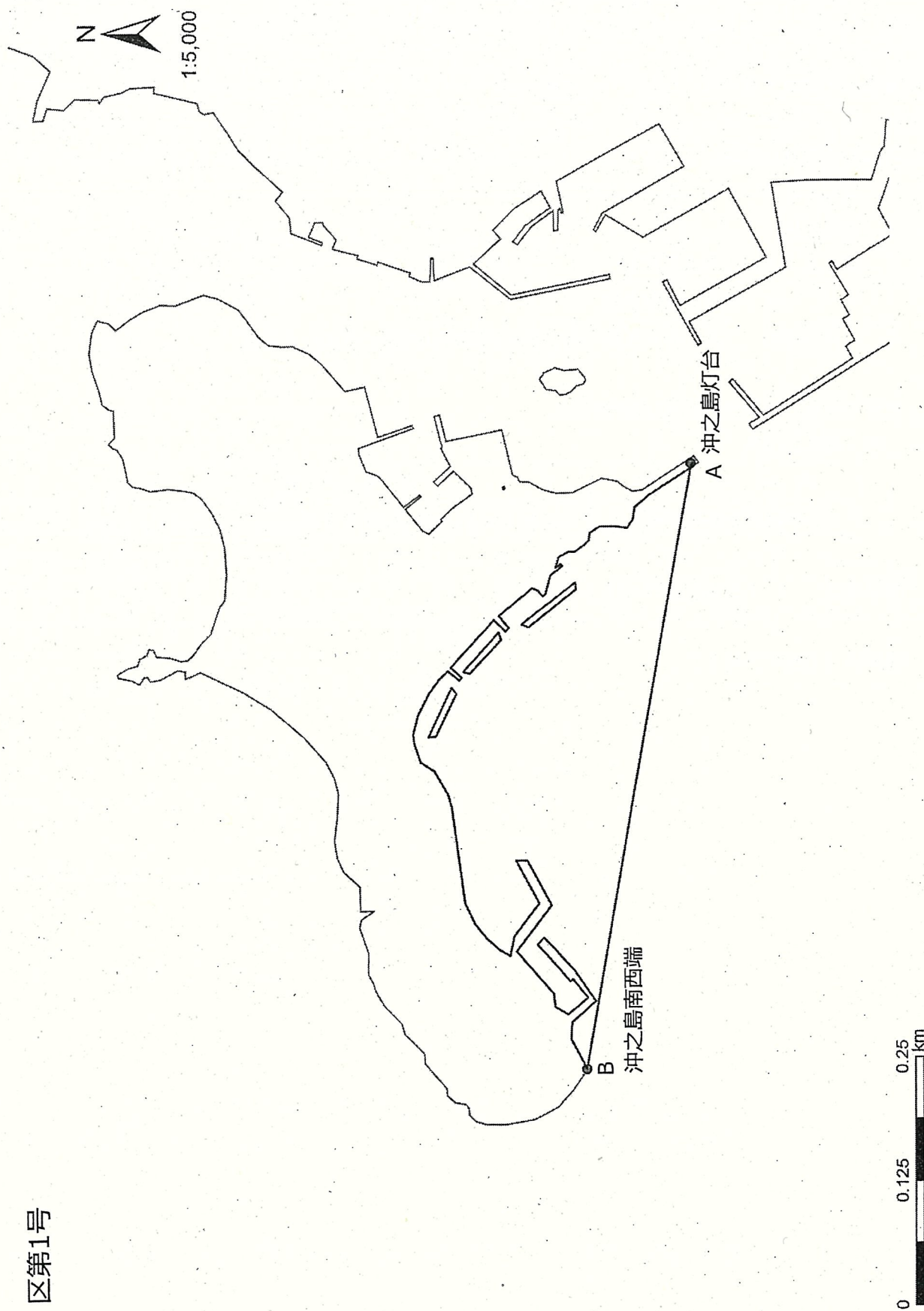
2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 小豆郡土庄町小江

4 漁場図(別紙のとおり)



漁 場 計 画

計画番号 区第2号 (かき) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

ア 漁場の位置 小豆郡土庄町伊喜末地先

イ 点の位置

基 点 A 室崎南端

B 土庄港入口灯浮標

C 皇踏山高頂

点 イ BからC見通し線と最大高潮時海岸線との交差点
(北緯34度29分48秒、東経134度10分11秒の点)

ウ 漁場の区域 AB、Bイの2直線と最大高潮時海岸線に囲まれた区域

2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 小豆郡土庄町伊喜末

4 漁場図 (別紙のとおり)

区第2号

N
1:20,000

A
室崎南端

皇踏山高頂

B
土庄港入口灯浮標

0 0.5 1 km

漁 場 計 画

計画番号 区第1号 (かき) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

ア 漁場の位置 小豆郡土庄町北浦小島地先

イ 点の位置

基 点 A 屋形崎北端

B 小島北端

C 小海漁港2号防波堤突端

点 イ AからB見通し線上AからBへ600メートルのところ
(北緯34度31分55秒、東経134度13分43秒の点)

ロ AからB見通し線上イからBへ300メートルのところ
(北緯34度32分0秒、東経134度13分53秒の点)

ハ AからB見通し線と直角にイから南へ引いた線とAからC見通し線との交差点
(北緯34度31分54秒、東経134度13分57秒の点)

ニ AからB見通し線と平行にハから東へ300メートルのところ
(北緯34度31分50秒、東経134度13分46秒の点)

ウ 漁場の区域 イロ、ロニ、ニハ、ハイの4直線に囲まれた区域

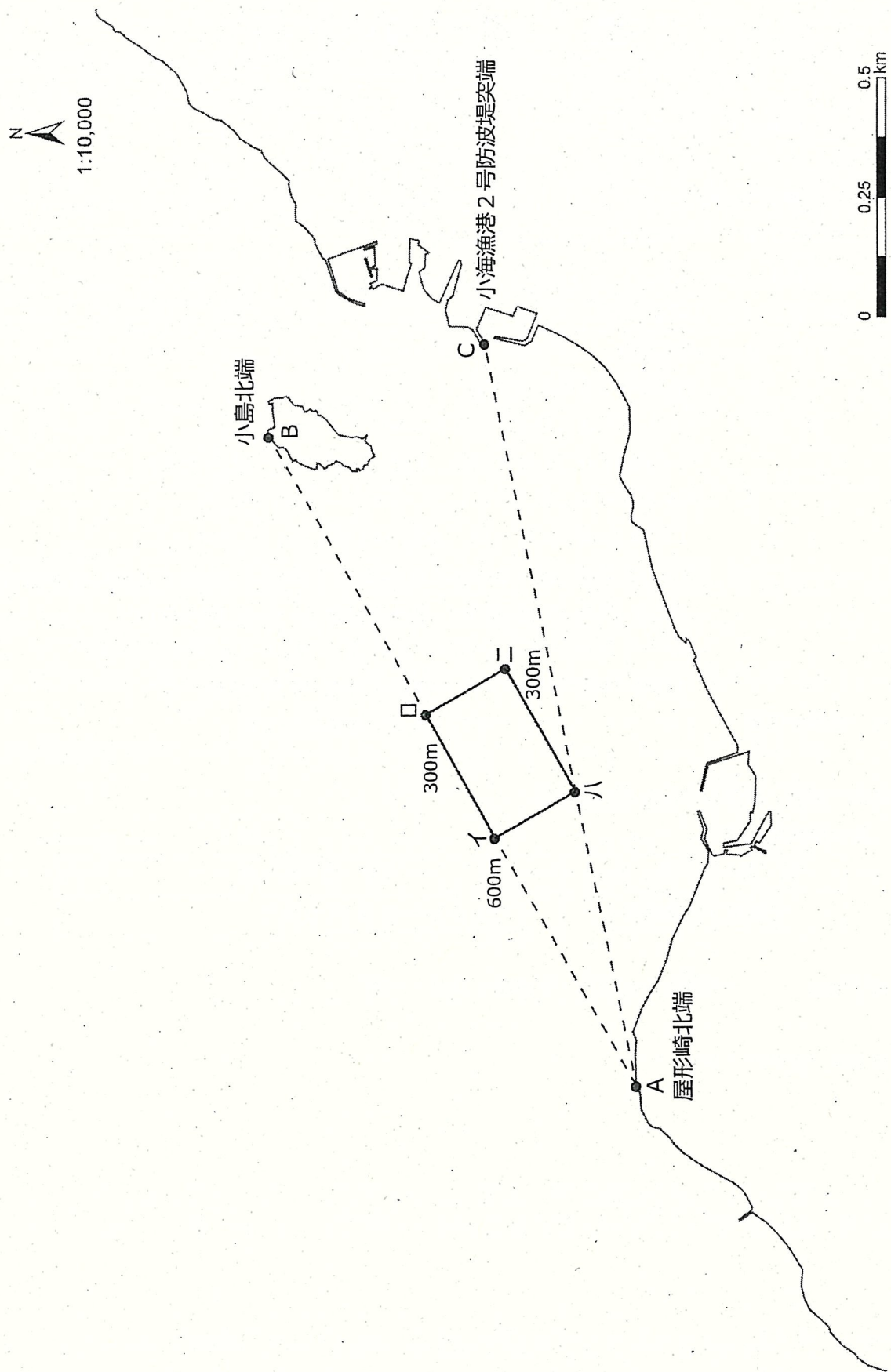
2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 小豆郡土庄町馬越・屋形崎・見目・小海

4 漁場図 (別紙のとおり)



漁 場 計 画

計画番号 区第2号 (かき) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

ア 漁場の位置 小豆郡土庄町北浦元目地先

イ 点の位置

基 点 A 早崎北端

B 屋形崎北端

C 元目漁港1号防波堤突端

D 岡山県瀬戸内市前島女松山高頂

点 イ AからB見通し線とCからD見通し線との交差点
(北緯34度31分25秒、東経134度12分2秒の点)

ロ AからB見通し線上イからBへ450メートルのところ
(北緯34度31分29秒、東経134度12分19秒の点)

ハ DからC見通し線上イからCへ200メートルのところ
(北緯34度31分23秒、東経134度12分22秒の点)

ニ AからB見通し線と直角にロから南へ200メートルのところ
(北緯34度31分25秒、東経134度12分2秒の点)

ウ 漁場の区域 イロ、ロニ、ニハ、ハイの4直線に囲まれた区域

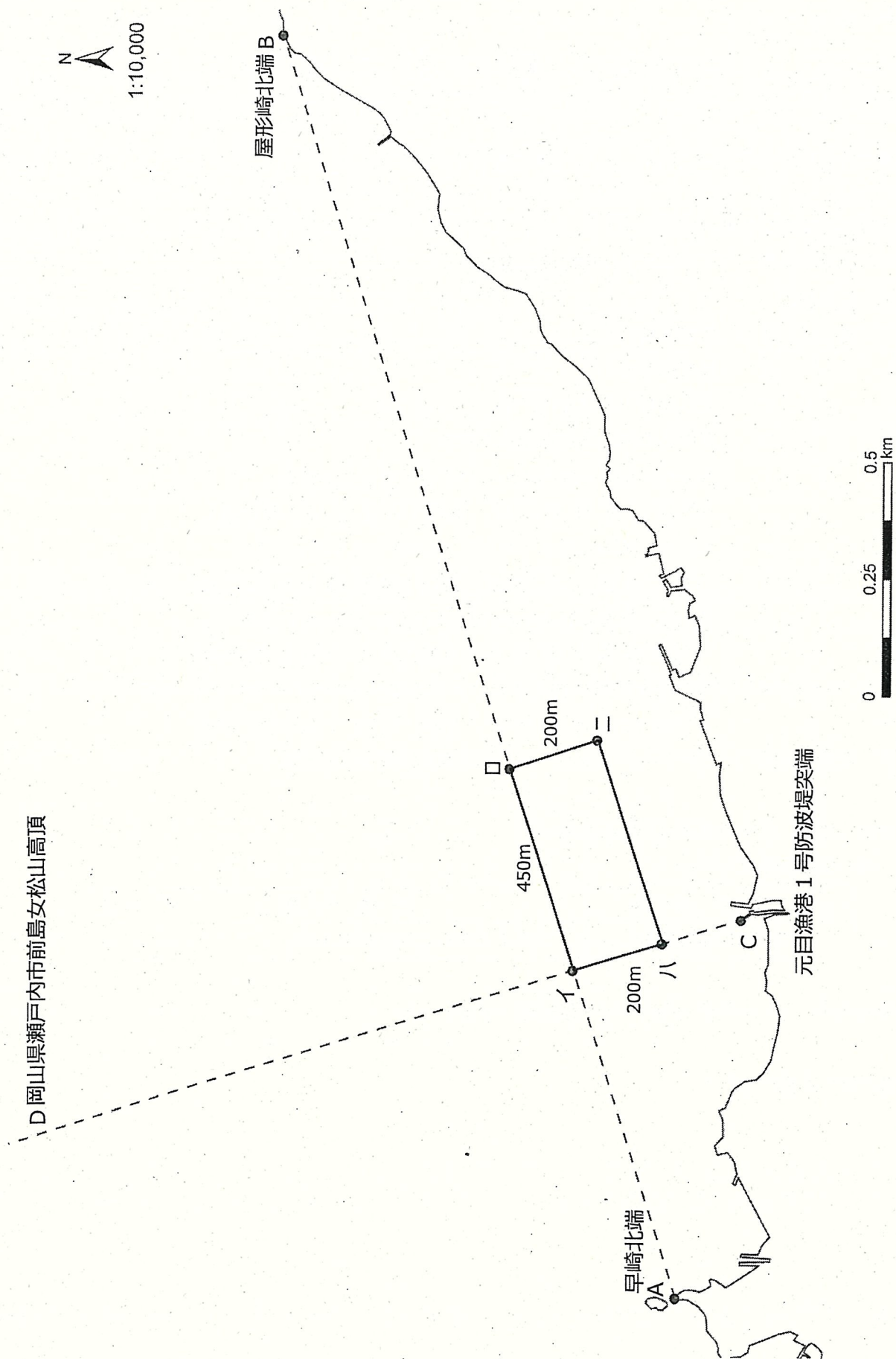
2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 小豆郡土庄町馬越・屋形崎・見目・小海

4 漁場図 (別紙のとおり)



漁 場 計 画

計画番号 区第1号 (かき) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

ア 漁場の位置 小豆郡小豆島町田浦地先

イ 点の位置

基 点 A 田浦漁港第三護岸北側から護岸沿い南東へ10メートルのところ

B 田浦中ノ鼻

ウ 漁場の区域 AからB見通し線と最大高潮時海岸線に囲まれた区域

2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 小豆郡小豆島町苗羽、堀越、田浦、西村

4 漁場図(別紙のとおり)



漁 場 計 画

計画番号 区第2号 (のり) (区第55号の拡張)

1 漁場の位置及び区域

ア 漁場の位置 小豆郡小豆島町田浦南地先

イ 点の位置

基 点 A 沖ノハナゲ灯浮標

B 中鼻

C なごら鼻の大石

D 大角鼻

E さぬき市大鼻

F さぬき市馬ヶ鼻灯台

G 小豆島町花寿波島

H 小豆島町蒲野山山頂 (99メートル)

点 イ AからF見通し線とHからC見通し線との交差点
(北緯34度26分30秒、東経134度16分19秒の点)

ロ BからE見通し線とHからC見通し線との交差点
(北緯34度26分26秒、東経134度16分56秒の点)

ハ BからE見通し線とDからG見通し線との交差点

ニ AからF見通し線とDからG見通し線との交差点

ホ BからE見通し線上ハからEへ290メートルのところ
(北緯34度25分51秒、東経134度16分51秒の点)

ヘ BからF見通し線上ニからFへ100メートルのところ
(北緯34度25分58秒、東経134度16分11秒の点)

ウ 漁場の区域 イロ、ロホ、ホヘ、ヘイの4直線に囲まれた区域

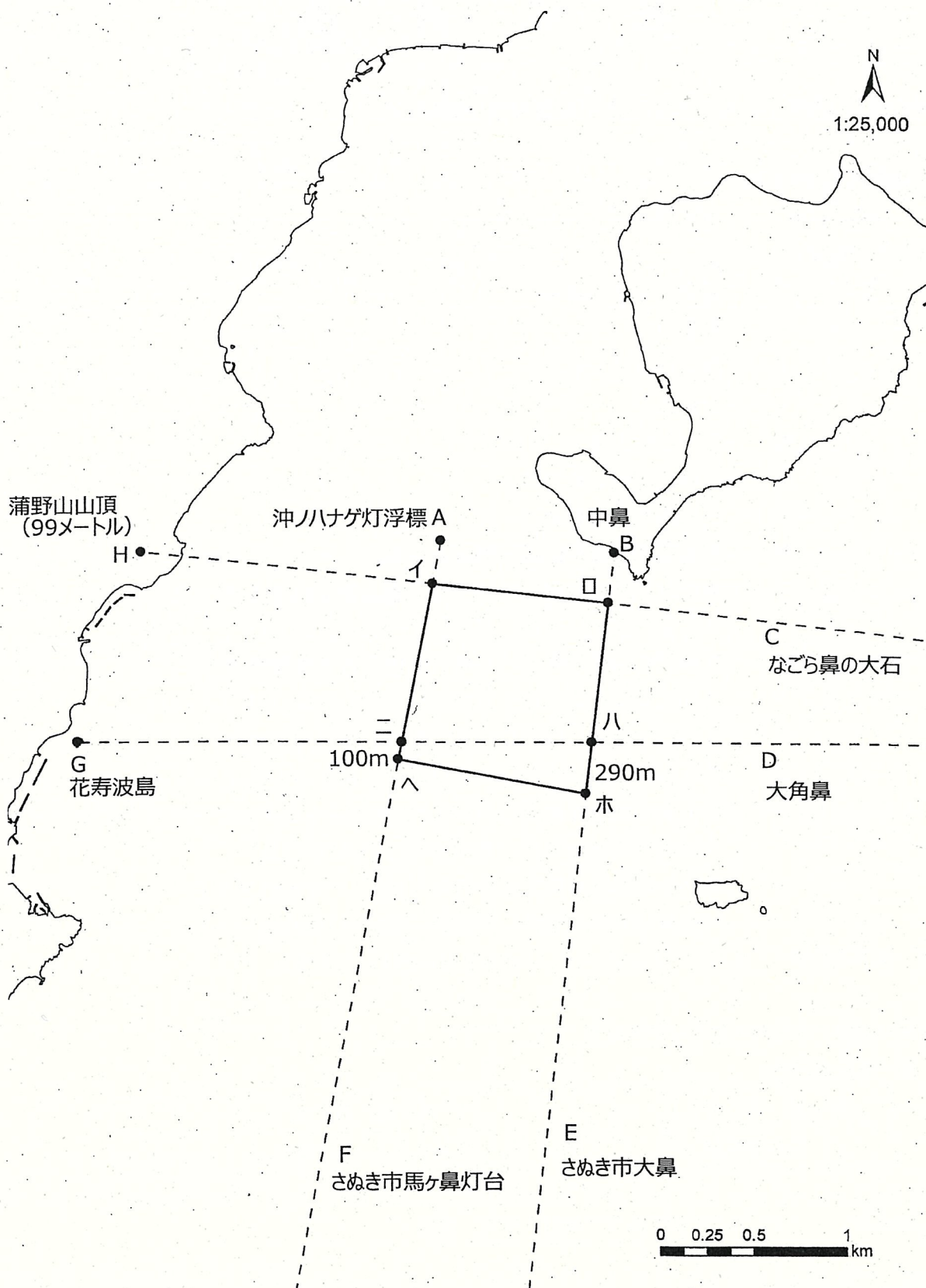
2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
藻類養殖業	10月1日から翌年3月31日まで

3 関係地区 小豆郡小豆島町苗羽、堀越、田浦、西村

4 漁場図 (別紙のとおり)



漁 場 計 画

計画番号 区第1号 (かき) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

ア 漁場の位置 小豆郡小豆島町三都地先

イ 点の位置

基 点 A 長者鼻西端

B 崩鼻西端

ウ 漁場の区域 AからB見通し線と最大高潮時海岸線に囲まれた区域

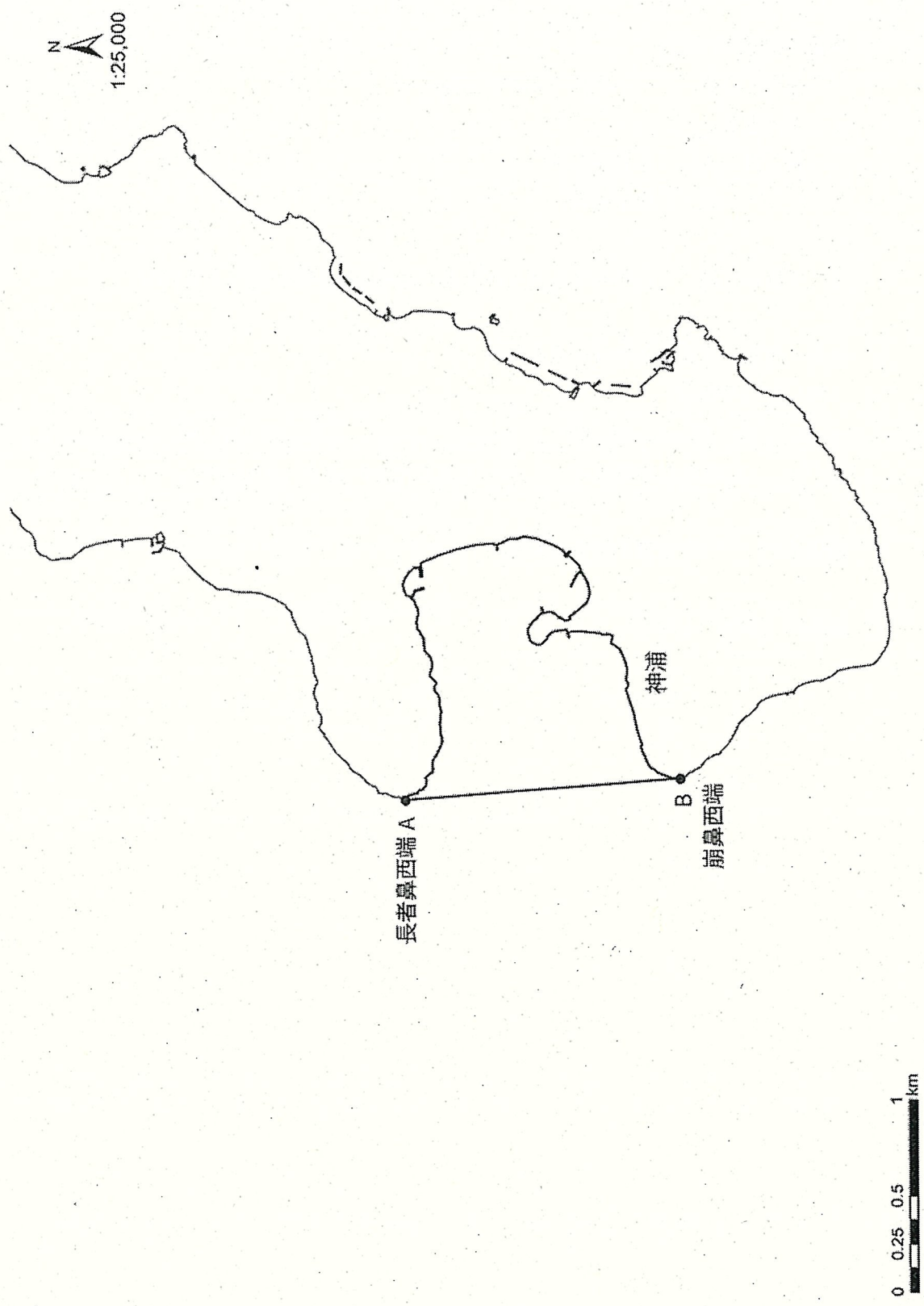
2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 小豆郡小豆島町神浦

4 漁場図 (別紙のとおり)



漁 場 計 画

計画番号 区第2号 (かき) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

ア 漁場の位置 小豆郡小豆島町吉野地先

イ 点の位置

基 点 A 長者鼻東の高頂

B 吉野高頂

C 旧二生村、三都村池田湾側境界

(北緯 34 度 27 分 20.041 秒、東経 134 度 14 分 15.767 秒の点)

D 飛崎南端

E 富岡八幡宮の森高頂

F 大余島南端

G 土庄町黒崎南端

点 イ AからF見通し線と最大高潮時海岸線との交差点

ロ AからC見通し線と最大高潮時海岸線との交差点

ハ BからG見通し線と最大高潮時海岸線との交差点

ニ イからE見通し線上イからEへ50メートルのところ

(北緯 34 度 26 分 34 秒、東経 134 度 13 分 41 秒の点)

ホ イからE見通し線上イからEへ140メートルのところ

(北緯 34 度 26 分 37 秒、東経 134 度 13 分 39 秒の点)

ヘ ロからE見通し線上ロからEへ100メートルのところ

(北緯 34 度 26 分 39 秒、東経 134 度 13 分 57 秒の点)

ト ハからD見通し線上ハからDへ50メートルのところ

(北緯 34 度 26 分 49 秒、東経 134 度 14 分 7 秒の点)

チ ハからD見通し線上ハからDへ140メートルのところ

(北緯 34 度 26 分 51 秒、東経 134 度 14 分 5 秒の点)

ウ 漁場の区域 ニへ、へト、トチ、チホ、ホニの5直線に囲まれた区域

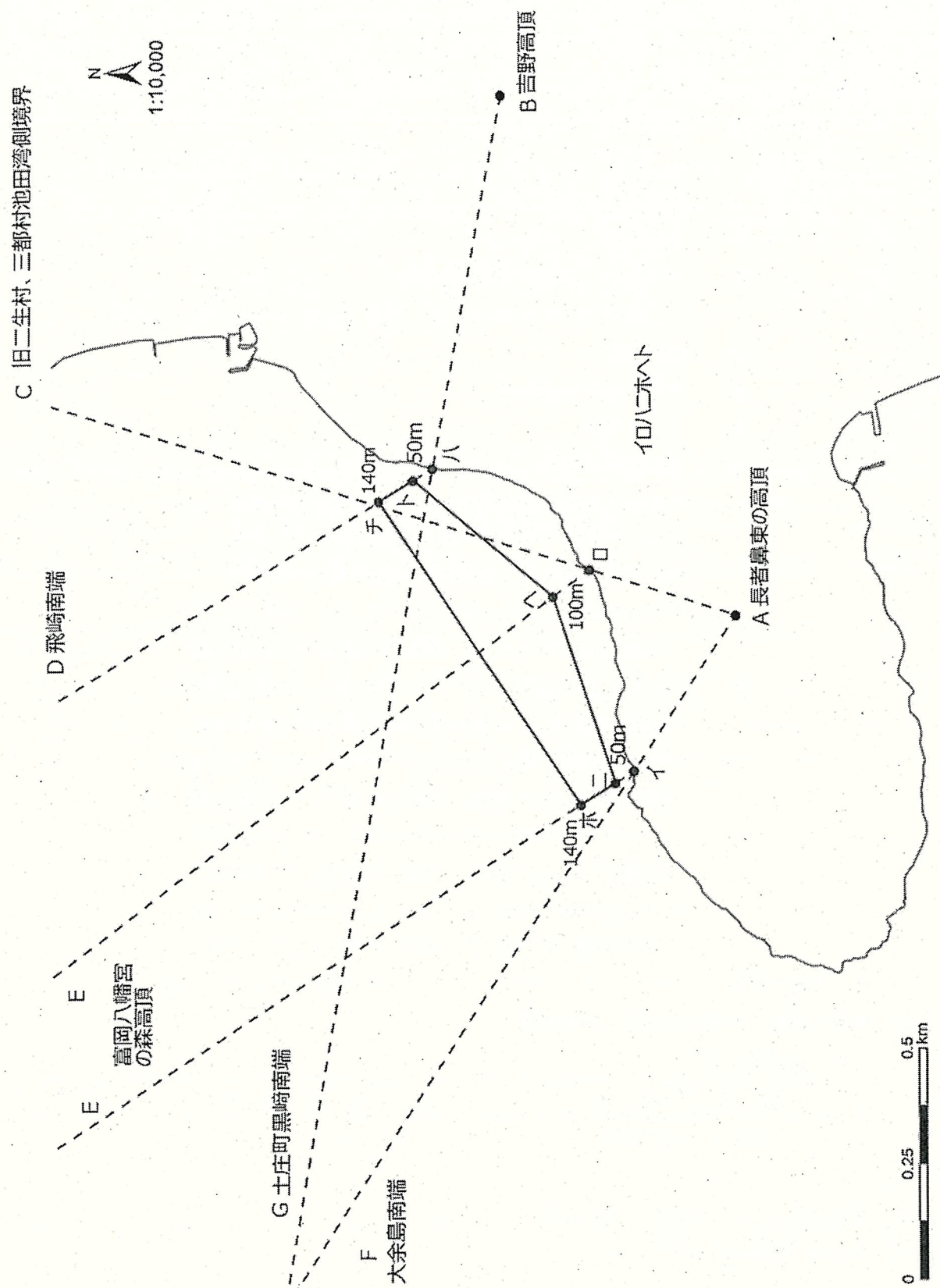
2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 小豆郡小豆島町吉野

4 漁場図 (別紙のとおり)



漁 場 計 画

計画番号 区第3号 (かき) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

ア 漁場の位置 小豆郡小豆島町室生地先

イ 点の位置

基点A 小豆島ふるさと村護岸西側屈曲部

(北緯 34 度 28 分 9.86 秒、東経 134 度 13 分 58.541 秒の点)

B 観音崎西端

C 沖の鼻

D 旧二生村、三都村池田湾側境界

(北緯 34 度 27 分 20.041 秒、東経 134 度 14 分 15.767 秒の点)

点 イ AからB見通し線上Aから 100 メートルのところ

(北緯 34 度 28 分 7 秒、東経 134 度 14 分 0 秒の点)

ロ CからD見通し線上Cから 150 メートルのところ

(北緯 34 度 28 分 4 秒、東経 134 度 13 分 48 秒の点)

ウ 漁場の区域 Aイ、イロ、ロCの3直線と最大高潮時海岸線に囲まれた区域

2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 小豆郡小豆島町室生

4 漁場図 (別紙のとおり)



小豆島町

小豆島ふるさと村
護岸西側屈曲部

沖の鼻 C

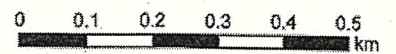
150m

A 100m

イ

B
観音崎西端

旧二生村、三都村 D
池田湾側境界



漁 場 計 画

計画番号 区第4号 (かき) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

ア 漁場の位置 小豆郡小豆島町飛崎西地先

イ 点の位置

基 点 A 観音崎南端

B 沖の鼻南端

C 大麻山高頂

D 東蒲生南防波堤基部

E 土庄町弁天島北端

F 土庄町大余島南端

G 高松市庵治町兜島北端

H 高松市庵治町高島南東端

点 イ AからE見通し線とDからG見通し線との交差点
(北緯34度28分18秒、東経134度12分21秒の点)

ロ AからE見通し線とCからH見通し線との交差点
(北緯34度28分11秒、東経134度12分44秒の点)

ハ BからF見通し線とCからH見通し線との交差点
(北緯34度28分5秒、東経134度12分42秒の点)

ニ AからE見通し線と直角にイから南へ引いた線とBからF見通し線との交差点(北緯34度28分4秒、東経134度12分16秒の点)

ウ 漁場の区域 イロ、ロハ、ハニ、ニイの4直線に囲まれた区域

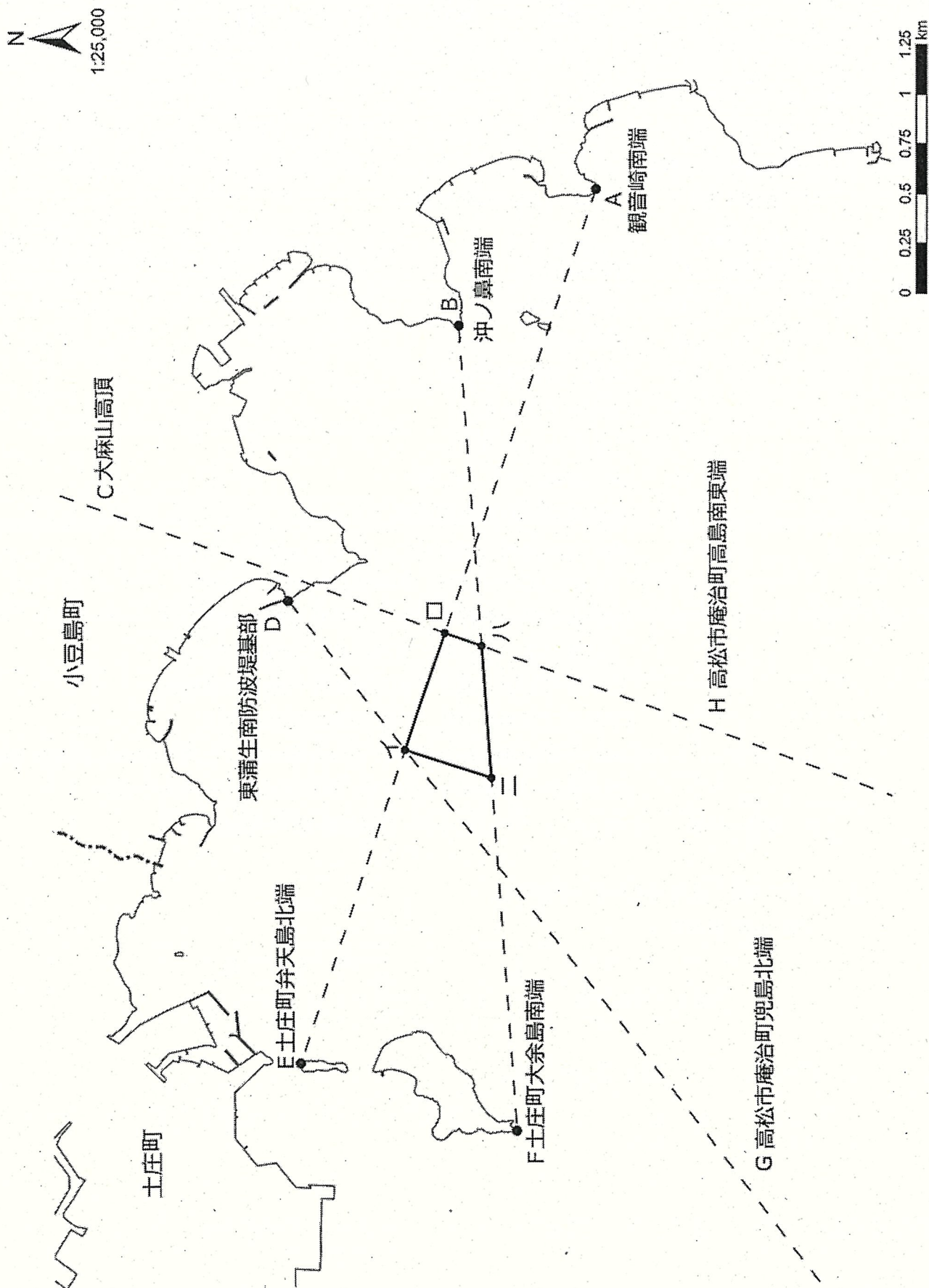
2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 小豆郡小豆島町蒲生

4 漁場図(別紙のとおり)



漁 場 計 画

計画番号 区第1号 (かき・あさり・あかがい) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

ア 漁場の位置 坂出市瀬居町北浦地先

イ 点の位置

基 点 A トビの巣鼻西端

B 北浦大石

C 坂出LNG岸壁北東角

D コスモ石油(株)10号岸壁北東角

点 イ AからC見通し線上Aから100メートルのところ
(北緯34度21分36秒、東経133度50分54秒の点)

ロ BからD見通し線上Bから100メートルのところ
(北緯34度21分27秒、東経133度50分48秒の点)

ウ 漁場の区域 Aイ、イロ、ロBの3直線と最大高潮時海岸線に囲まれた区域

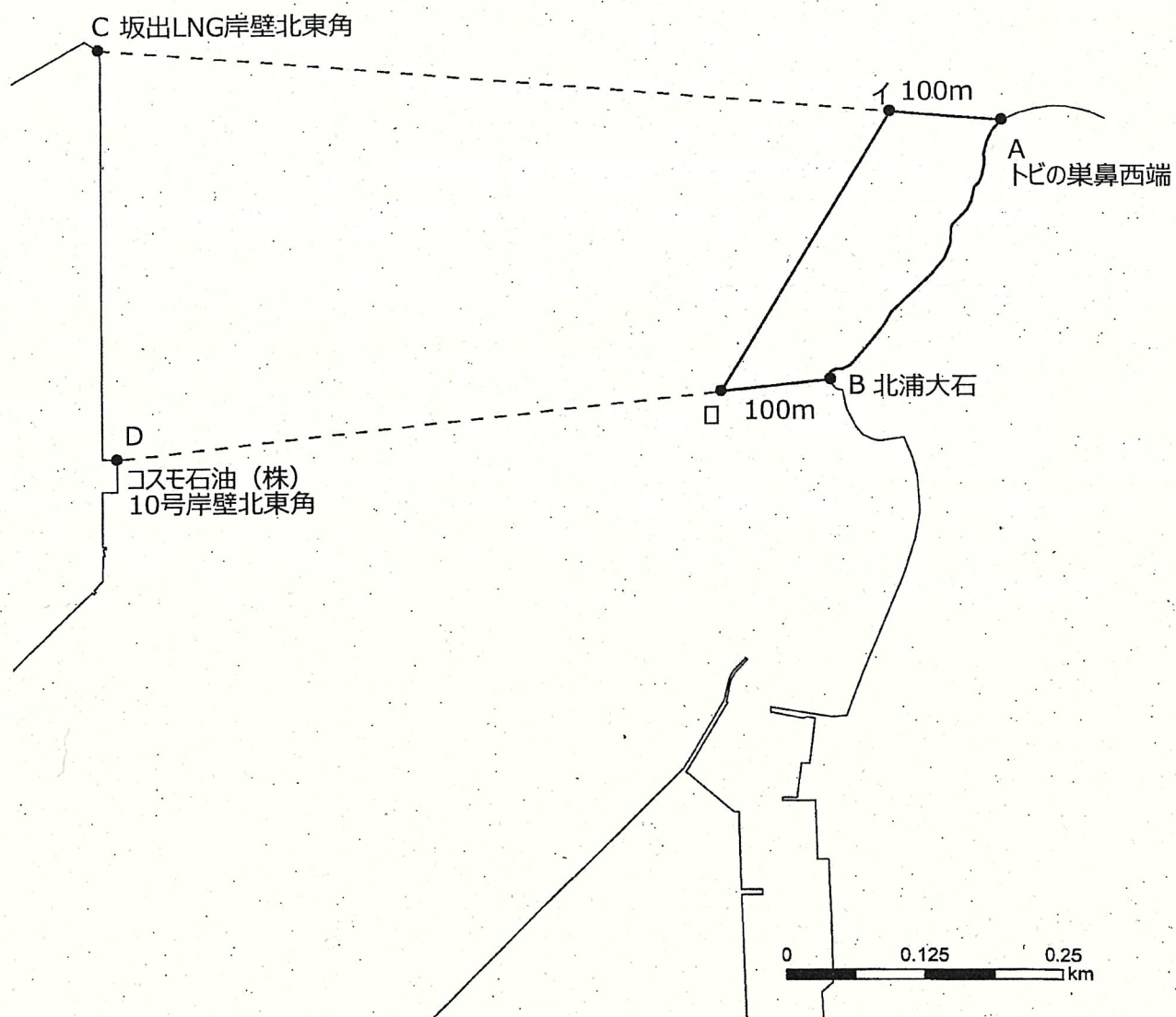
2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 坂出市瀬居町・沙弥島・与島町・岩黒・櫃石

4 漁場図(別紙のとおり)



漁 場 計 画

計画番号 区第2号 (かき・あさり・あかがい) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

ア 漁場の位置 坂出市瀬居町竹浦地先

イ 点の位置

基 点 A 中鼻

B 馬返し鼻

C 竹浦1号防波堤中央角

点 イ AからB見通し線上Aから100メートルのところ

(北緯34度21分29秒、東経133度51分32秒の点)

ウ 漁場の区域 Aイ、イCの2直線と最大高潮時海岸線に囲まれた区域

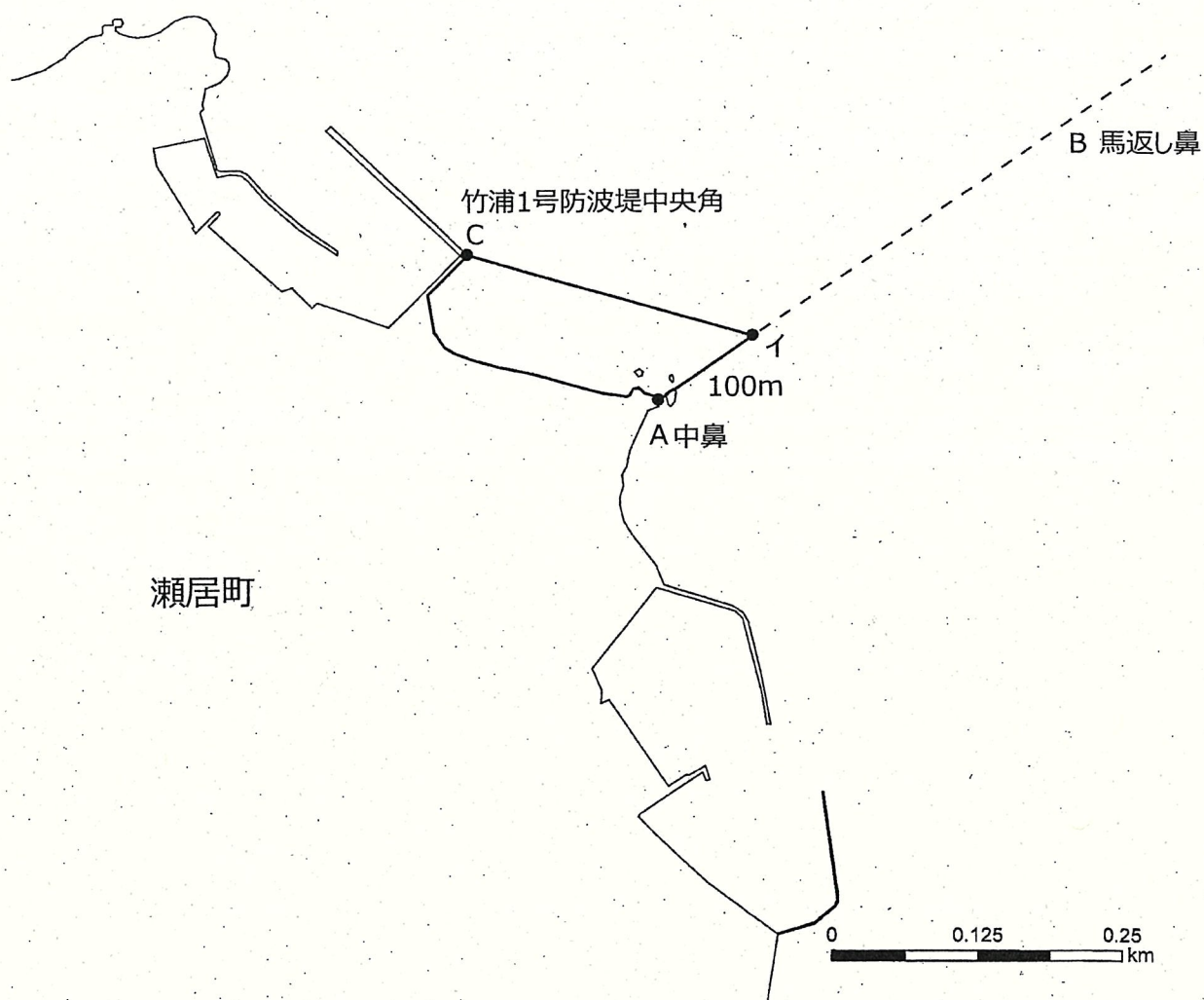
2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 坂出市瀬居町・沙弥島・与島町・岩黒・櫃石

4 漁場図(別紙のとおり)



漁 場 計 画

計画番号 区第3号・(かき・あさり・あかがい) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

ア 漁場の位置 坂出市瀬居町東浦漁港本浦地先

イ 点の位置

基 点 A 本浦中部防波堤東端

B 本浦南部防波堤突端

ウ 漁場の区域 直線ABと最大高潮時海岸線に囲まれた区域

2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 坂出市瀬居町・沙弥島・与島町・岩黒・櫃石

4 漁場図(別紙のとおり)

N
1:5,000

瀬居町

A 本浦中部防波堤東端

B 本浦南部防波堤突端

0 0.125 0.25 km

漁 場 計 画

計画番号 区第4号 (かき・あさり・あかがい) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

ア 漁場の位置 坂出市沙弥島東地先

イ 点の位置

基 点 A 沙弥島北端

B 沙弥島天狗岩

C 番ノ州埋立地北西護岸西角

D 丸亀市本島町亀山鼻

点 イ BからC見通し線上Bから100メートルのところ

ロ BからD見通し線とAからイ見通し線との交差点

(北緯34度21分8秒、東経133度49分20秒の点)

ウ 漁場の区域 Aロ、ロBの2直線と最大高潮時海岸線に囲まれた区域

2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 坂出市瀬居町・沙弥島・与島町・岩黒・櫃石

4 漁場図 (別紙のとおり)



D 丸亀市本島町亀山鼻

沙弥島北端 A

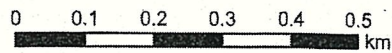
C 番ノ州埋立地
北西護岸西角

100m

B

沙弥島天狗岩

番の州埋立地



漁 場 計 画

計画番号 区第5号 (かき・あさり・あかがい) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

ア 漁場の位置 坂出市小与島地先

イ 点の位置

基 点 A 小与島南岸壁南西角

B 鍋島東端

C 浦城防波堤中央角（基部から防波堤沿い南へ90メートルのところ）

D 丸亀市本島町亀山鼻

点 イ Aから海岸沿い東へ190メートルのところ

（北緯34度23分21秒、東経133度49分48秒の点）

ロ イからB見通し線上イから100メートルのところ

（北緯34度23分19秒、東経133度49分45秒の点）

ハ AからC見通し線上Aから50メートルのところ

（北緯34度23分22秒、東経133度49分40秒の点）

ウ 漁場の区域 Aハ、ハロ、ロイの3直線と最大高潮時海岸線に囲まれた区域

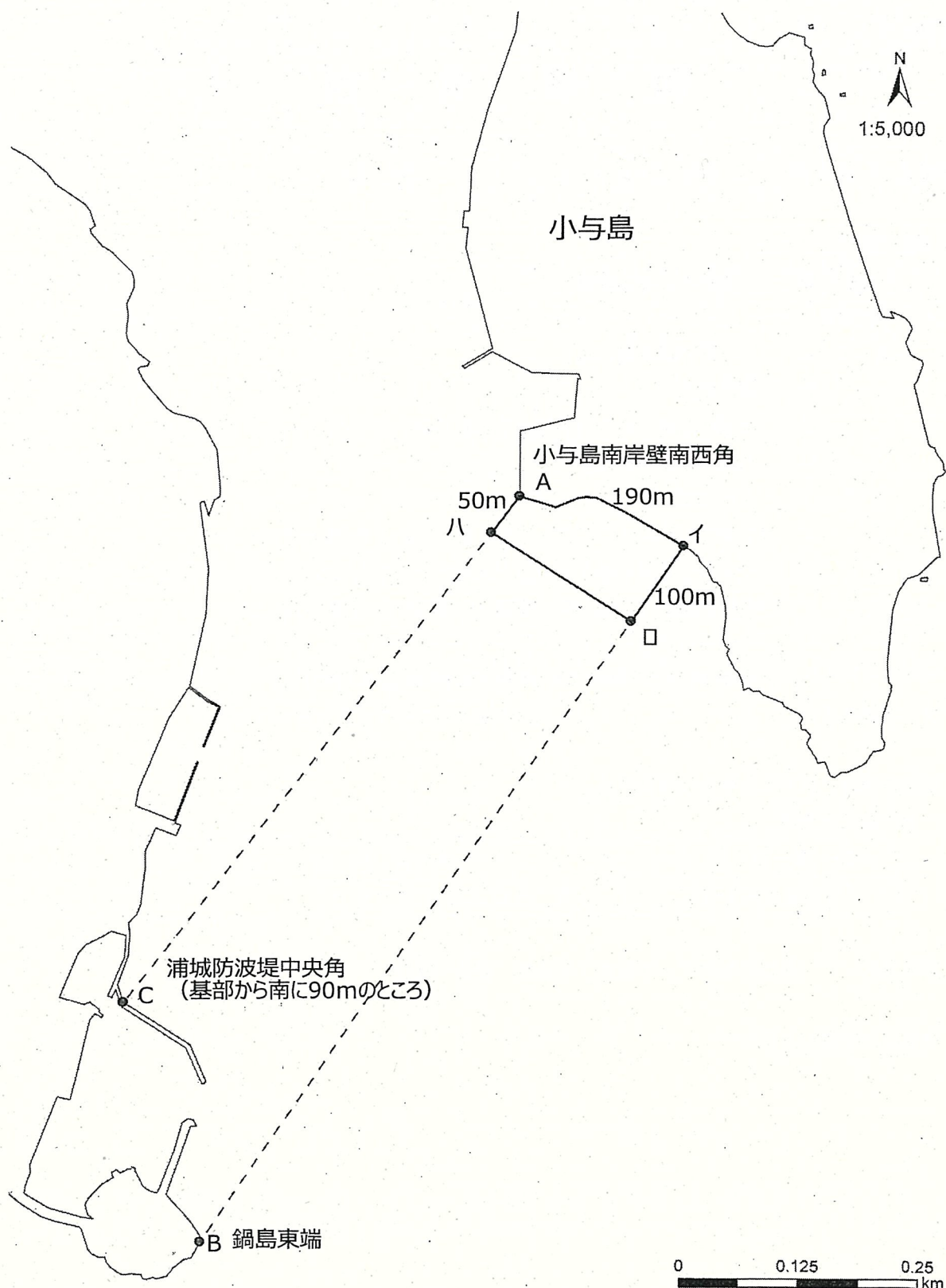
2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 坂出市瀬居町・沙弥島・与島町・岩黒・櫃石

4 漁場図（別紙のとおり）



漁 場 計 画

計画番号 区第6号 (かき・あさり・あかがい) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

ア 漁場の位置 坂出市岩黒地先

イ 点の位置

基 点 A 松が鼻

B しろだけ

C 歩渡島東端

D 歩渡島西側水門

点 イ Aから海岸沿い西へ60メートルのところ

(北緯34度24分31秒、東経133度48分44秒の点)

ロ イからC見通し線上イから50メートルのところ

(北緯34度24分33秒、東経133度48分44秒の点)

ハ Bから海岸沿い東へ90メートルのところ

(北緯34度24分30秒、東経133度48分35秒の点)

ニ ハからD見通し線上ハから50メートルのところ

(北緯34度24分32秒、東経133度48分34秒の点)

ウ 漁場の区域 イロ、ロニ、ニハの3直線と最大高潮時海岸線に囲まれた区域

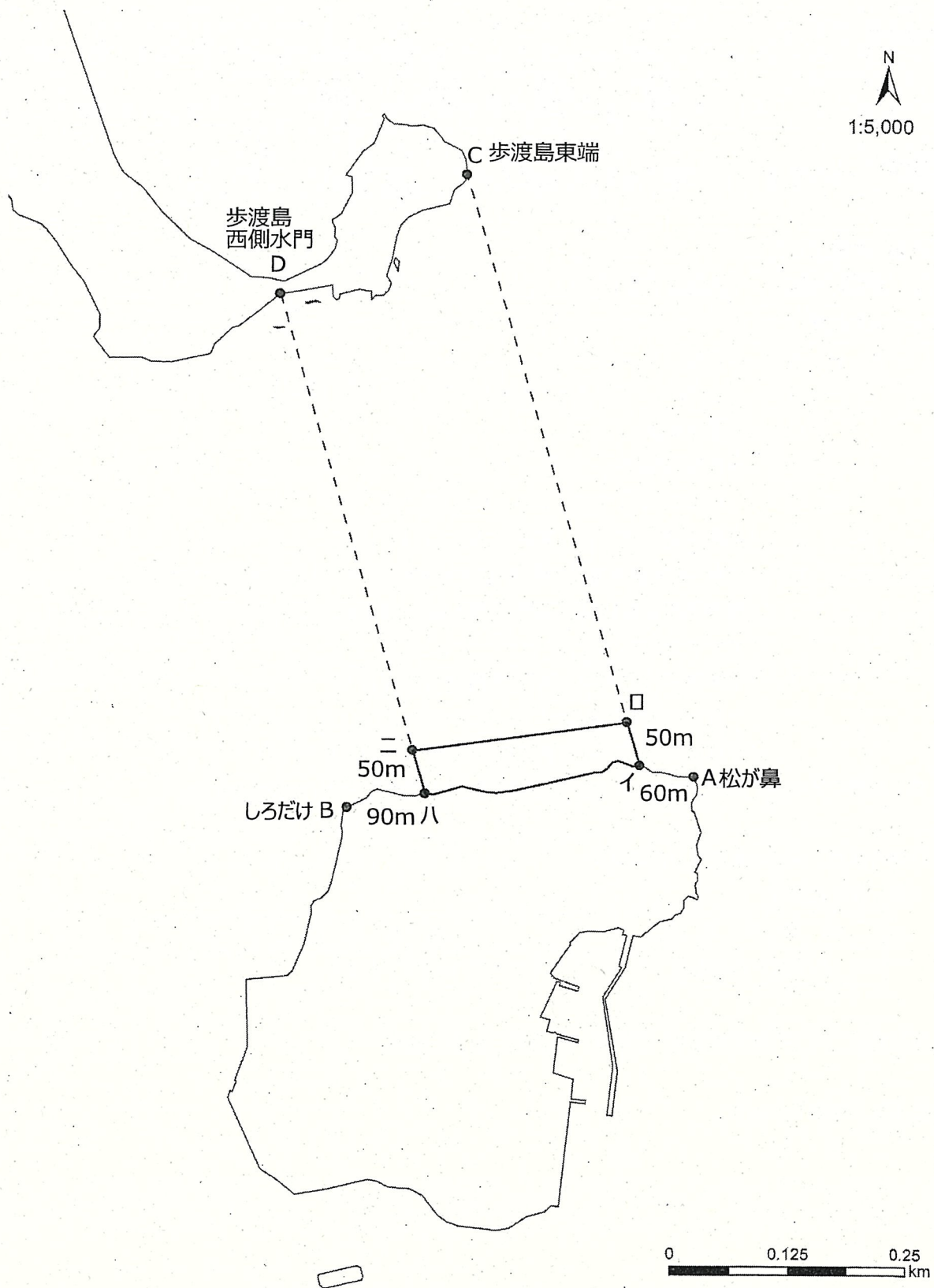
2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 坂出市瀬居町・沙弥島・与島町・岩黒・櫃石

4 漁場図 (別紙のとおり)



漁 場 計 画

計画番号 区第7号 (かき・あさり・あかがい) (新 規)

1 漁場の位置及び区域

ア 漁場の位置 坂出市櫃石島南東地先

イ 点の位置

基 点 A 歩渡島北岸壁北端

B 櫃石4号防波堤突端

C 室木島北端

点 イ AからB見通し線上Bから100メートルのところ
(北緯34度24分58秒、東経133度48分30秒の点)

ロ Cからイ見通し延長線と最大高潮時海岸線との交差点
(北緯34度24分58秒、東経133度48分20秒の点)

ウ 漁場の区域 Aイ、イロの2直線と最大高潮時海岸線に囲まれた区域

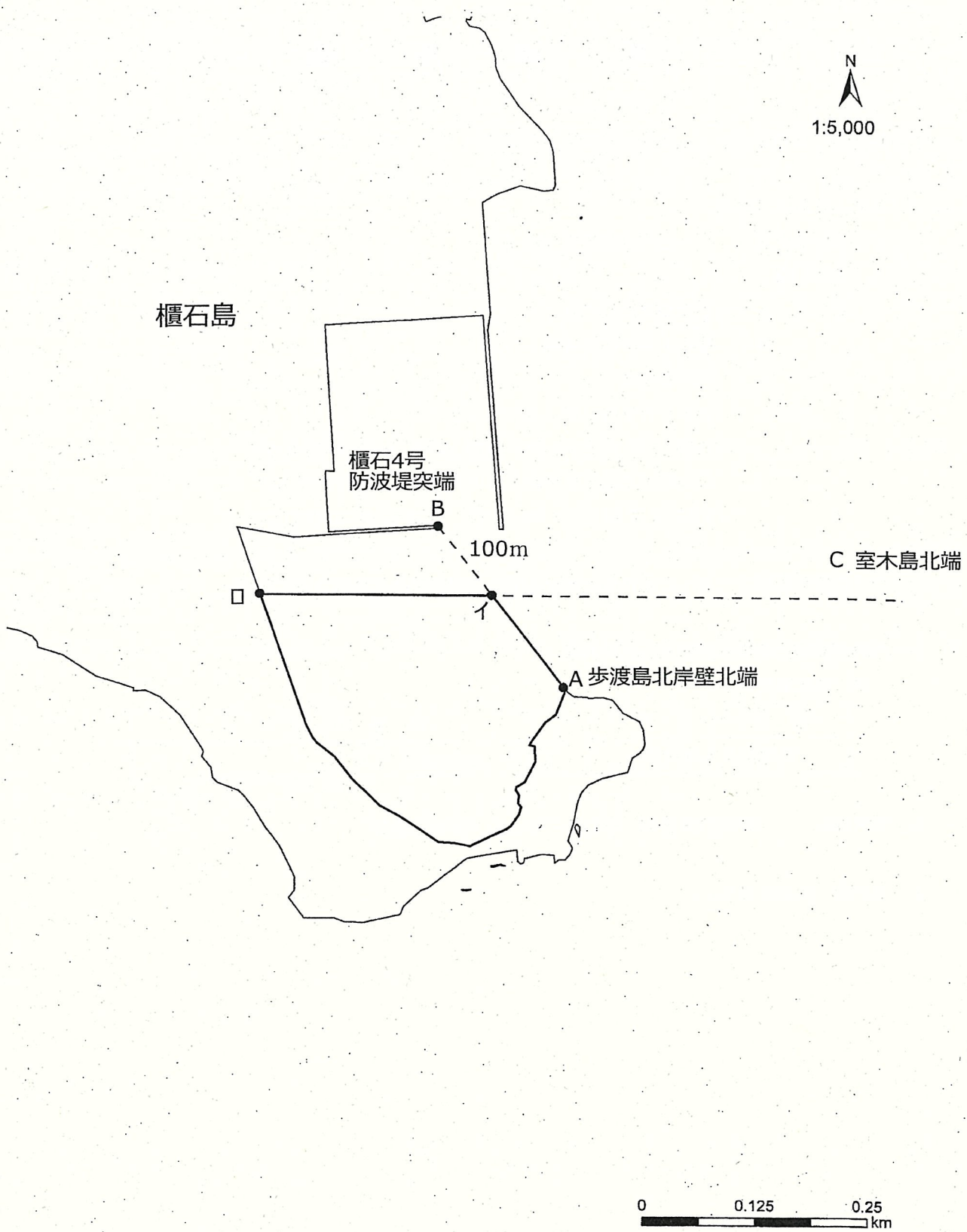
2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

3 関係地区 坂出市瀬居町・沙弥島・与島町・岩黒・櫃石

4 漁場図(別紙のとおり)



漁 場 計 画

計画番号 区第 1 号 (のり)

「区第112号の縮小」

1 漁場の位置及び区域

漁場の位置 丸亀市中津地先

点の位置

- 基 点 A 下真島北端
 B 金倉川砂防堤突端
 C 丸亀市、多度津町境界
 D 多度津町亀笠島北端
 E 広島町波節岩灯標
 F 広島西端
 G 広島町江ノ浦広島中学校建物中央
 H 多度津町臨海土地（堀江5丁目）終末処理場北側護岸東端
- 点 イ AからD見通し線とBからG見通し線との交差点
 ロ BからG見通し線上イからBへ300メートルのところ
 （北緯34度17分49秒、東経133度45分41秒の点）
 ハ BからF見通し線上Bから600メートルのところ
 （北緯34度17分33秒、東経133度45分45秒の点）
 ニ CからE見通し線とハからH見通し線との交差点
 （北緯34度17分27秒、東経133度45分32秒の点）
 ホ AからD見通し線とCからE見通し線との交差点
 ヘ CからE見通し線上ホからEへ300メートルのところ
 （北緯34度17分53秒、東経133度45分10秒の点）
 ト BからG見通し線上イからGへ300メートルのところ
 （北緯34度18分6秒、東経133度45分29秒の点）

漁場の区域 ロハ、ハニ、ニヘ、ヘト、トロの5直線に囲まれた区域

2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
藻 類 養 殖 業	10月11日から翌年4月10日まで

3 関係地区 丸亀市（中讃西部漁業協同組合の地区に限る。）

4 漁場図（別紙のとおり）



1:25,000

G 広島町江ノ浦広島中学校建物中央

E 波節岩灯標

F
広島西端

下真島北端

A

300m

300m

300m

ホ

600m

B 金倉川砂防堤突端

多度津町
亀笠島北端

D

H 終末処理場
北側護岸東端

C 丸亀市、多度津町境界

0 0.150.3 0.6 0.9 1.2
km

漁 場 計 画

計画番号 区第 2 号 (かき) (新規)

1 漁場の位置及び区域

漁場の位置 丸亀市中津地先

点の位置

- 基 点 A 金倉川砂防堤突端
 B 丸亀市、多度津町境界
 C 広島町波節岩灯標
 D 広島西端
 E 多度津町臨海土地（堀江5丁目）終末処理場北側護岸東端
- 点 イ AからD見通し線上Aから600メートルのところ
 （北緯34度17分33秒、東経133度45分45秒の点）
 ロ AからD見通し線上Aから100メートルのところ
 （北緯34度17分22秒、東経133度45分58秒の点）
 ハ BからC見通し線上Bから400メートルのところ
 （北緯34度17分14秒、東経133度45分42秒の点）
 ニ BからC見通し線とイからE見通し線との交差点
 （北緯34度17分27秒、東経133度45分32秒の点）

漁場の区域 イロ、ロハ、ハニ、ニイの4直線に囲まれた区域

2 漁業の種類、漁業の名称及び漁業時期

第一種区画漁業

漁 業 の 名 称	漁 業 時 期
貝類垂下式養殖業	1月1日から12月31日まで

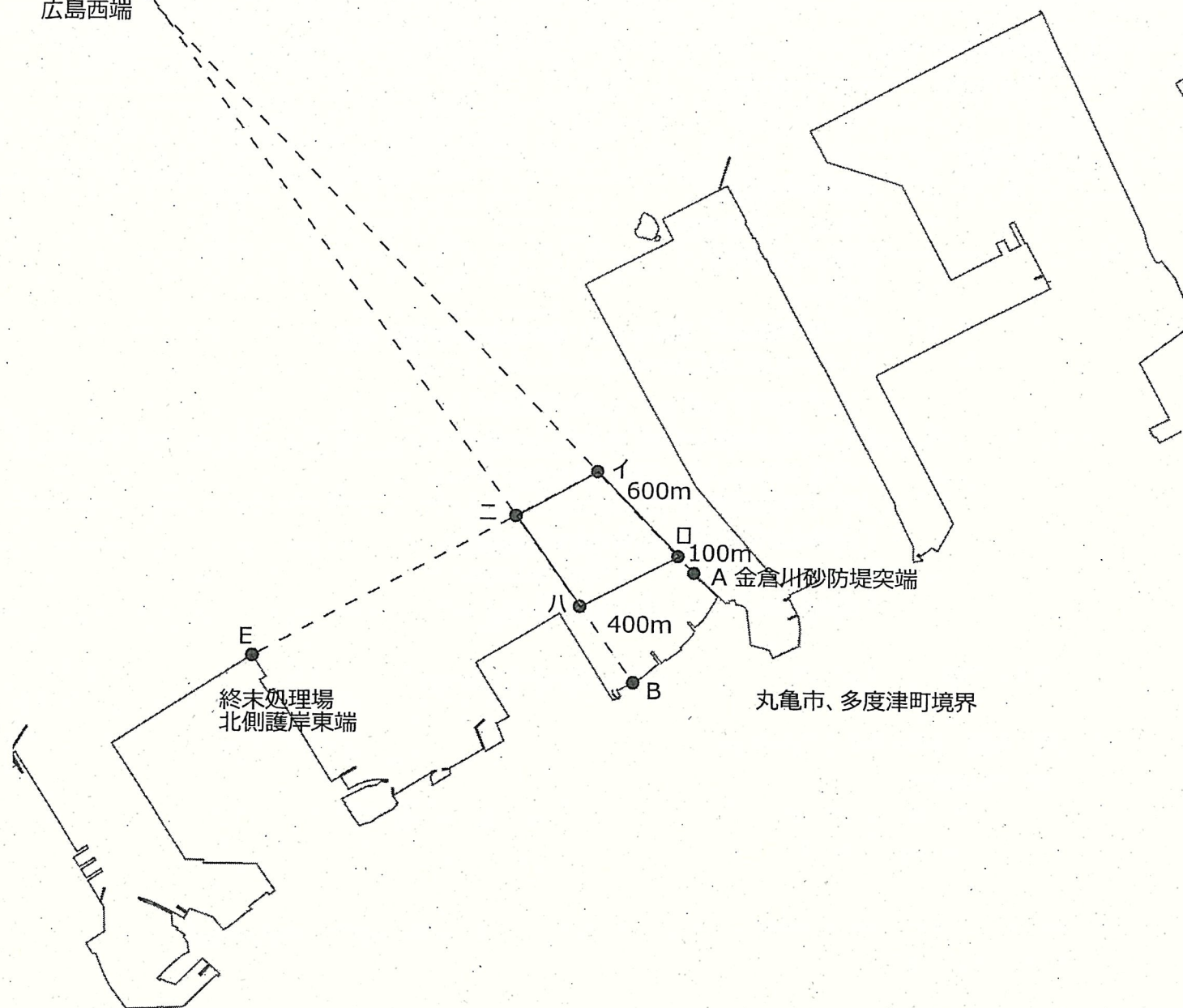
3 関係地区 丸亀市（中讃西部漁業協同組合の地区に限る。）、仲多度郡多度津町（中讃西部漁業協同組合の地区に限る。）



1:25,000

C 波節岩灯標

D
広島西端



0 0.150.3 0.6 0.9 1.2 km

漁協名	漁協毎の 計画番号	漁業の名称	対象種	現行免許 番号	内容	漁場の位置	関係地区	漁業時期	漁場面積 (千㎡)	行使計画					備考
										経営 体数	施設	事業規模	生産量	生産額(千円)	
鴨庄	-	藻類養殖業	のり その他藻類	区17	放棄	さぬき市鴨庄 長浜地先	さぬき市鴨庄	10/1～翌年 3/31	554	-	-	-	-	-	計画区2 に統合
鴨庄	区2	藻類養殖業	あおのり のり その他藻類	区18	区域拡張 対象種(のり) 追加	さぬき市鴨庄 長浜地先	さぬき市鴨庄	あおのり・そ の他藻類 10/1～翌年 7/31 のり 10/1～翌年 3/31	1,014	5	浮流式(のり) 1.6m×21m× 80枚×6セット 1.6m×21m× 40枚×20セット 浮流式(あおの り) 1.6m×21m× 40枚×30セット 1.6m×21m× 20枚×1セット	のり 26セット あおのり 31セット	黒バラ干し のり 5,120kg 乾海苔 2,560kg 青バラ干し のり 6,100kg	黒バラ干し のり 25,600 乾海苔 38,400 青バラ干し のり 48,800	単独
鴨庄	区3	藻類養殖業	わかめ あおのり のり その他藻類	区19	漁期延長 対象種(あお のり)追加	さぬき市鴨庄 白方地先	さぬき市鴨庄	わかめ・そ の他藻類 11/1～翌年 4/30 のり 10/1～翌年 3/31 あおのり 10/1～翌年 7/31	489	5	浮流式(わか め) 50m×40m×4 揃 浮流式(のり) 1.6m×21m× 40枚×5セット 浮流式(あおの り) 1.6m×21m× 40枚×5セット	わかめ 4揃 のり 5セット あおのり 5セット	塩蔵わかめ 4ト 黒バラ干し のり 800kg 乾海苔 4,000kg 青バラ干し のり 1,000kg	塩蔵わかめ 2,800 黒バラ干し のり 4,000 乾海苔 6,000 青バラ干し のり 8,000	単独
鴨庄	区4	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり	-	新規	さぬき市鴨庄 穴子地先	さぬき市鴨庄	1/1～12/31	41	5	延縄式 (シングル・ト) 50m	30本	60千個～ 120千個	6,000～ 12,000	単独
鴨庄	区5	魚類小刺式 養殖業(くら まぐろ養殖業 を除く)	ぶり類 まだい その他魚類	区419	区域縮小 漁期延長	さぬき市鴨庄 長浜沖地先	さぬき市鴨庄	3/15～ 翌年2月末日	313	5	はまち 12.5m×12.5m ×6m×14台 かんばち 12.5m×12.5m ×6m×6台 まだい 12.5m×12.5m ×6m×4台	はまち 14台 かんばち 6台 まだい 4台	はまち 446ト かんばち 139ト まだい 18ト	はまち 535,200 かんばち 222,400 まだい 14,400	単独

土庄中央	区1	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり	-	新規	小豆郡土庄 町小郡地先	小豆郡土庄 町大郡	1/1～12/31	97	3	延縄式 (シングルシート) 100m	30本	かき 90千個 あさり 256kg	かき 13,500 あさり 512	単独	
土庄中央	区2	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり	-	新規	小豆郡土庄 町大郡中瀬 沖	小豆郡土庄 町大郡	1/1～12/31	118	3	延縄式 (シングルシート) 100m	30本	かき 90千個 あさり 256kg	かき 13,500 あさり 512	単独	
土庄中央	区3	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり	-	新規	小豆郡土庄 町豊島家浦 地先	小豆郡土庄 町豊島家浦	1/1～12/31	5	1	延縄式 (シングルシート) 50m	1本	かき 2千個 あさり 256kg	かき 200 あさり 512	単独	
四海	区1	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡土庄 町小江地先	小豆郡土庄 町小江	1/1～12/31	81	1	延縄式 (シングルシート) 50m	40本	50千個	5,000	単独	
四海	区2	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡土庄 町伊喜米地 先	小豆郡土庄 町伊喜米	1/1～12/31	594	2	延縄式 (シングルシート) 50m	200本	500千個	50,000	単独	
北浦	区1	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡土庄 町北浦小島 地先	小豆郡土庄 町馬越・鷹形 崎・見目・小 海	1/1～12/31	59	1	延縄式 (シングルシート) 70m	30本	144千個	216	単独	
北浦	区2	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡土庄 町北浦元目 地先	小豆郡土庄 町馬越・鷹形 崎・見目・小 海	1/1～12/31	90	1	延縄式 (シングルシート) 70m	60本	288千個	423	単独	
内海	区1	藻類養殖業	のり	区55	区域拡張	小豆郡小豆 島町田浦南 地先	小豆郡小豆 島町苗羽・堀 越・田浦、西 村	10/1～翌年 3/31	1,031	4	浮流式 5尺(約1.5m)× 11間(約20m)× 2,036柵	2,036柵	9,162千枚	137,430	単独	
内海	区2	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡小豆 島町田浦地 先	小豆郡小豆 島町苗羽・堀 越・田浦、西 村	1/1～12/31	178	1	延縄式 (シングルシート) 100m	9本	240千個	480	単独	
池田	区1	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡小豆 島町三都地 先	小豆郡小豆 島町神浦	1/1～12/31	1,288	1	延縄式 (シングルシート) 50m	12本	38.4千個	7,680	単独	
池田	区2	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡小豆 島町吉野地 先	小豆郡小豆 島町吉野	1/1～12/31	119	1	延縄式 (シングルシート) 50m	6本	19.2千個	3,840	単独	
池田	区3	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡小豆 島町養生地 先	小豆郡小豆 島町養生	1/1～12/31	40	1	延縄式 (シングルシート) 50m	3本	9.6千個	1,920	単独	

池田	区4	貝類垂下式 養殖業	かき	-	新規	小豆郡小豆 島町飛崎西 地先	小豆郡小豆 島町蒲生	1/1~12/31	198	1	延縄式 (シンガルシート) 50m	12本	38.4千個	7,680	単独	
与島	区1	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり・ あかがい	-	新規	坂出市瀬居 町・北浦地先	坂出市瀬居 町・沙弥島・ 与島町・岩 黒・櫃石	1/1~12/31	29	1	垂下式 50m	2本	14.4千個	144	単独	
与島	区2	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり・ あかがい	-	新規	坂出市瀬居 町・竹浦地先	坂出市瀬居 町・沙弥島・ 与島町・岩 黒・櫃石	1/1~12/31	20	1	垂下式 50m	2本	14.4千個	144	単独	
与島	区3	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり・ あかがい	-	新規	坂出市瀬居 町・東浦港 本浦地先	坂出市瀬居 町・沙弥島・ 与島町・岩 黒・櫃石	1/1~12/31	16	1	垂下式 50m	2本	14.4千個	144	単独	
与島	区4	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり・ あかがい	-	新規	坂出市沙弥 島東地先	坂出市瀬居 町・沙弥島・ 与島町・岩 黒・櫃石	1/1~12/31	41	1	垂下式 50m	2本	14.4千個	144	単独	
与島	区5	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり・ あかがい	-	新規	坂出市小与 島地先	坂出市瀬居 町・沙弥島・ 与島町・岩 黒・櫃石	1/1~12/31	15	1	垂下式 50m	2本	14.4千個	144	単独	
与島	区6	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり・ あかがい	-	新規	坂出市岩黒 地先	坂出市瀬居 町・沙弥島・ 与島町・岩 黒・櫃石	1/1~12/31	12	1	垂下式 50m	2本	14.4千個	144	単独	
与島	区7	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり・ あかがい	-	新規	坂出市櫃石 島南東地先	坂出市瀬居 町・沙弥島・ 与島町・岩 黒・櫃石	1/1~12/31	66	1	垂下式 50m	2本	14.4千個	144	単独	
中讃西部	区1	藻類養殖業	のり	区112	区域縮小	丸亀市中津 地先	丸亀市(中讃 西部漁業協 同組合の地 区に限る。)	10/11~翌年 4/10	574	1	浮流式 5尺3寸(約 1.6m)×21m× 50m 50m×5セット	250棚	575千枚	10,350	単独	
中讃西部	区2	貝類垂下式 養殖業	かき・あさり	-	新規	丸亀市中津 地先	丸亀市(中讃 西部漁業協 同組合の地 区に限る。) 、 仲多度郡多 度津町(中讃 西部漁業協 同組合の地 区に限る。)	1/1~12/31	258	かき 2 あさり 10	延縄式(かき) (シンガルシート) 55m 60本 筏式(かき) 2台 延縄式(あさり) 150m 100本	延縄式(かき) (シンガルシート) 60本 筏式(かき) 2台 延縄式(あさり) 100本	かき(殻付き) 0.48ト かき(むき身) 0.64ト あさり 10ト	かき(殻付き) 1,200 かき(むき身) 960 あさり 15,000	単独	藻類養殖業 区112の縮小 部分
合計													1,183,523			

事務手続きスケジュール

(1) 海区漁場計画の変更

R7. 8. 25 : 海区漁業調整委員会 (事前協議)

R7. 8. 28~9. 28 : 利害関係人の意見聴取 (県 HP で公表、資料の閲覧)

関係機関への協議・調整

R7. 9. 30 : 意見聴取・検討結果の公表 (県 HP)

R7. 11 月下旬 : 海区漁業調整委員会 (諮問)

R7. 12 月中旬 : 公聴会、海区漁業調整委員会 ⇒ 知事へ答申

公示 (県 HP※)、通知

※免許予定日 (R8. 4. 1)、

免許申請期間の設定 (R8. 2 月中に 1 か月程度を予定)

(2) 漁業の免許及び漁業権行使規則の認可

R8. 2 月中 : 免許申請、漁業権行使規則の認可申請

R8. 3 月中旬 : 海区漁業調整委員会へ漁業の免許について諮問

⇒ 知事へ答申

R8. 4. 1 : 免許状交付・行使規則認可、公示 (県 HP)、通知

イダコ資源管理の取組み状況について

R7. 8. 25 資料2
香川海区漁業調整委員会

・ 現状

- ✓ イイダコは底曳網漁業で漁獲されるほか、釣りの好ターゲット
- ✓ 平成14年には200トンあった漁獲量は近年、1/100（約2トン）まで減少。
- ✓ 減少の原因は不明だが、漁獲圧・捕食圧の高まり、餌生物の減少など？

(トン)



Year	Catch (Tons)
H14	200
H16	180
H18	160
H20	140
H22	120
H24	100
H26	80
H28	60
H30	40
R2	20
R4	10
R6	2

H14 H16 H18 H20 H22 H24 H26 H28 H30 R2 R4 R6
県内6漁協におけるイイダコ漁獲量の推移

・ 対応と今後の課題

項目 実施者

取組みの概要

今後の課題

実態把握

県

- ・イイダコ漁獲（採捕）量データ収集
→漁獲成績報告、その他釣果報告



生物調査

県

- ・イイダコの成長等のサンプリング調査
(サイズ、生殖腺重量)



放流

県、
漁業者

- ・産卵床放流技術開発
- ・種苗生産技術開発（完全養殖技術）



漁獲圧低減

漁業者
遊漁者

- ・底曳網におけるリリース
- ・遊漁者の釣り期間、時間の制限



- ・漁獲成績報告における項目（イイダコ）の追加
- ・釣果報告数の向上（マリナー協力のもと、フレッジャーボートの釣果情報を収集。）

- ・長期的なデータの蓄積、資源状況の把握

- ・産卵床育成（放流）に取り組む地区の拡大

- ・底曳網におけるリリース期間の拡大
- ・釣り期間、時間の制限の公的規制化

小型機船底びき網漁業 漁獲成績報告書 (令和 年 月分)

氏 名		<氏名>		許可番号		<許可番号>			
日付	操業区域	操業回数	魚種別漁獲量						
			マダイ	ヒラメ	ゲタ	マダコ	イイダコ	小エビ	その他
1日									
2日									
3日									
4日									
5日									
6日									
7日									
8日									
9日									
10日									
11日									
12日									
13日									
14日									
15日									
16日									
17日									
18日									
19日									
20日									
21日									
22日									
23日									
24日									
25日									
26日									
27日									
28日									
29日									
30日									
31日									
出荷単位(チェックしてください)			☐ Kg ☐ 箱数 ☐ 本数	☐ Kg ☐ 箱数 ☐ 本数	☐ Kg ☐ 箱数 ☐ 本数	☐ Kg ☐ 箱数 ☐ 本数	☐ Kg ☐ 箱数 ☐ 本数	☐ Kg ☐ 箱数 ☐ 本数	☐ Kg ☐ 箱数 ☐ 本数

※上記の魚種以外にも、TAC管理候補魚種(ブリ、サワラ、マルアジ、カタクチイワシ、ウルメイワシ、マダイ、ヒラメ、トラフグ)が漁獲された場合には、「その他」欄に当該魚種名と漁獲量を記載してください。

主な出荷先

出漁しなかった場合、その理由

☐ 他種漁業に出漁したため

(漁業種類:)

☐ 狙いの魚種が獲れなくなったため

☐ 資源保護のため

☐ 船、その他漁労設備の都合のため

☐ その他具体的な理由()

資源管理の取組状況
(＜漁協名＞)

☐ 私は、下記の資源管理の取組みを遵守しています。

【記載例】

1. 休漁日の設定

○ 周年: 週休2日制(火、土)

2. 操業時間の設定(出入港時刻の設定)

○ 15時以降、6時以内

○ 3時以降、15時以内

3. 漁具の制限

○ 15節より大きい目合

○ 14節より大きい目合(8～9月)

4. 漁獲サイズの制限

○ ヒラメ: 28cm以上、マコガレイ: 16cm以上、マダイ: 14cm以上、

マダコ: 300g以上、ガザミ: 15cm以上、ゲタ: 20cm以上 etc



イイダコ釣果に関するアンケート



とりまとめマリーナ名: _____

香川県水産課資源管理グループ

☎087-832-3477

FAX 087-806-0200

✉ suisan@pref.kagawa.lg.jp

イイダコ資源把握のため、回答にご協力ください！

No.	月日	船名/船長名	主な釣り場 (○をつけてください)	乗船者数	イイダコ釣果数 (1 隻あたり合計)
1		/	高松・中讃・その他		
2		/	高松・中讃・その他		
3		/	高松・中讃・その他		
4		/	高松・中讃・その他		
5		/	高松・中讃・その他		
6		/	高松・中讃・その他		
7		/	高松・中讃・その他		
8		/	高松・中讃・その他		
9		/	高松・中讃・その他		
10		/	高松・中讃・その他		
11		/	高松・中讃・その他		
12		/	高松・中讃・その他		
13		/	高松・中讃・その他		
14		/	高松・中讃・その他		
15		/	高松・中讃・その他		
16		/	高松・中讃・その他		
17		/	高松・中讃・その他		
18		/	高松・中讃・その他		

香川県のイイダコ資源対策について

1 実態把握の状況

(1) 漁獲量データの収集-県内漁協の 取扱量(右図)

調査6漁協のイイダコ取扱量をみると、令和6年が2.1トンであり、前年(令和5年1.7トン)より増加した。

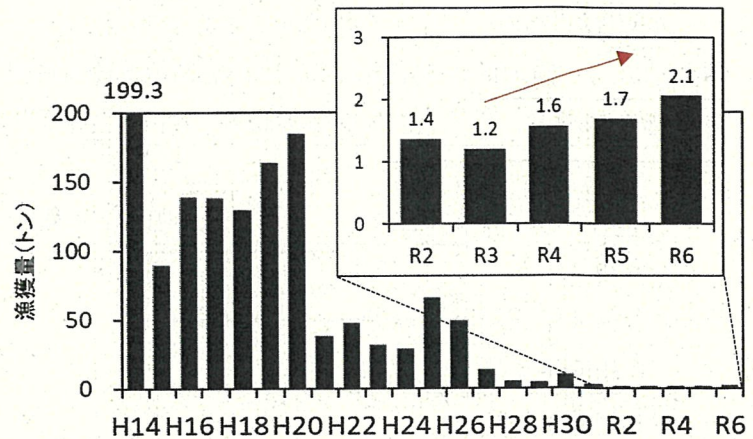


図 県内6漁協市場におけるイイダコ取扱量

(2) イイダコの成長等(水産試験場調査結果)

イイダコのサイズや成長は、年によって大きく変動するが、共通の傾向として、4月ごろから産卵によって体重が減少、8月から小さなイイダコが加入し9月から4月に成長するものと考えられる。

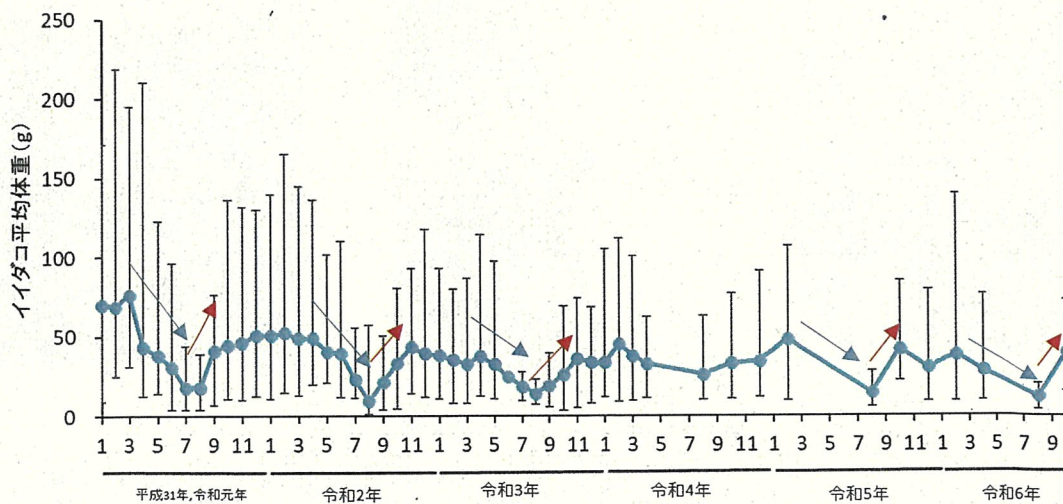


図 イイダコの平均体重(中讃地区サンプルの平均値、最大値及び最小値)

2 資源保護への取組に対する支援等

(1) 自主的な資源管理の取組等の推進

関係地区におけるイイダコの再放流の取組については、以下のとおり。

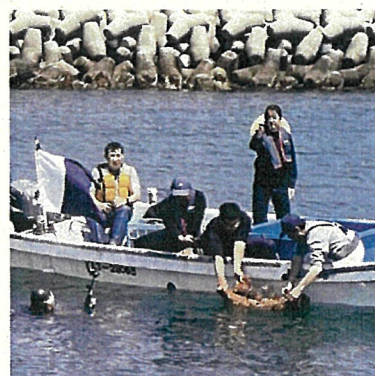
地区	内容	開始時期
東讃地区	・ 8月から12月15日までイイダコ再放流 ・ 4月1日から7月31日まで雌のイイダコ再放流 (※R7年度から)	令和3年度～ (令和7年度～)
小豆地区	8月から9月までイイダコ再放流	令和5年度～
高松地区	8月から9月までイイダコ再放流	令和5年度～
中讃地区	8月から9月までイイダコ再放流	令和4年度～

(2) イイダコ産卵床及び稚イイダコ放流の取組み

- 中讃地区底曳網協議会と連携し、底曳網漁業者が漁獲したイイダコを水産試験場において一定期間飼育したのち、イイダコ産卵床として放流した。
- また、中讃地区底曳網協議会、庵治漁業協同組合底曳部会の漁業者がそれぞれ自ら地元の港で水槽を設置し、イイダコ飼育に取り組み、イイダコ産卵床を放流した。

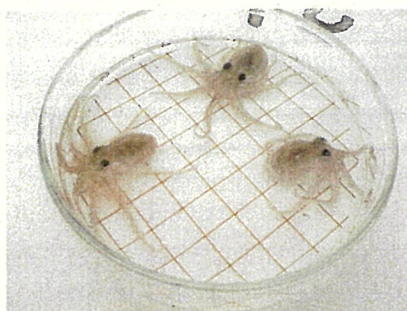
年月	個数		
	香川県	中讃地区底曳網協議会	庵治漁業協同組合底曳部会
令和3年5月	400	—	—
令和4年5月	400	—	—
令和5年5月	730	—	—
令和6年5月	750	50	30
令和7年5月	330	104	43

- なお、令和7年、庵治漁業協同組合底曳部会の産卵床放流では、生まれたイイダコの棲みかとなるよう、ヤシ殻ネットにカキ殻を入れた基質を合わせて放流した。



- 令和4年度から稚イイダコの飼育試験を実施。放流実績は以下のとおり。

年月	放流場所	放流数（括弧書きは完全養殖による）
令和4年7月	庵治町沖	668（-）
令和5年7月	庵治町沖	1,000（-）
令和6年7月	宇多津町沖	2,000（42）
令和7年7月	宇多津町沖	2,509（281）



イイダコ釣りにおける資源保護のための取組

イイダコ釣りの期間・時間の限定

- 県は、令和5年度に2回、県内でイイダコを対象とする遊漁船業者、各地区底曳き網協議会の代表を集め、意見交換会を実施。意見交換会の意見をふまえ、令和5年度から、イイダコ釣りができる期間・時間を「9月1日～10月15日の午前中」とし、釣り人に協力を要請した。
- 令和6年度は、6月に意見交換会を開催し、令和5年度の結果を報告するとともに、令和6年度の取組について意見交換を行った。参加者からは、令和5年はほとんどの釣り人の協力が得られたが、一部で漁場に留まり釣りを続けるものがある等の意見があったことから、啓発用チラシに納竿後、釣り場を離れることを促す文言を追加した。



意見交換会の様子 (R6.6.18)



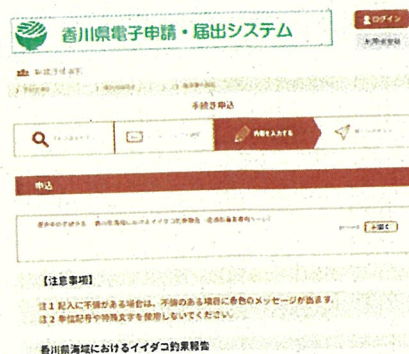
洋上指導の様子



配布したチラシ

② 釣果情報の収集

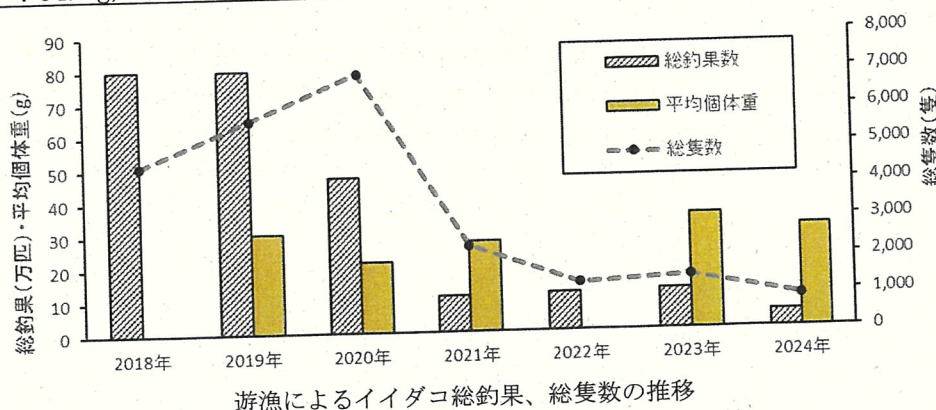
- イイダコの釣果情報について、令和5年度から、「香川県電子申請システム」を活用し、これまでデータが限定的であった遊漁船業者以外の個人の釣り人を含めたデータを収集。
- 令和6年度は、合計36件（プレジャー7件、遊漁船業者29件）の報告があり、プレジャーでは9/2～10/15で一人あたり1日に0～15匹、遊漁船業者では9/2～10/13で一人あたり1日に7～47匹の釣果であった。



イイダコ釣果報告ページ

③ 遊漁によるイイダコ採捕量等の推定

- 釣果情報及び指導船による現場調査の結果から、令和6年の遊漁による釣果等は総隻数875隻、釣果数5.0万尾（1.5トン）と推定された。また、令和6年の平均個体重は、31.0gで前年（令和5年：34.9g）から減少した。



3 今後の取組予定

- 適切な資源管理に向けたデータの蓄積

イイダコに関する基礎データが蓄積されつつあるが、年ごとの変動が大きいことから、長期的な観点からイイダコの生態を把握するため、サンプリング調査、釣果に関する調査を継続して実施する。

- 漁業者による自主的な資源管理の取組の推進

イイダコの資源管理の取組について、統一的な取組の推進を目指すために、各地区の漁業者会議を活用して、適切な助言等に努める。

- イイダコ釣りにおけるイイダコ資源保護のための取組

遊漁者関係者及び漁業者、行政が参集する場を設け、遊漁におけるイイダコ資源保護に関する理解醸成、取組内容、進め方に関する議論・検討を行う。

- イイダコ産卵床放流（令和7年度：イイダコ資源回復事業）

イイダコ産卵床の効率的な生産方法の開発と、漁業者と連携した放流を継続して行う。また、イイダコ産卵床の放流を推進するため、漁業者が実践可能な手法について検討と普及を行う。

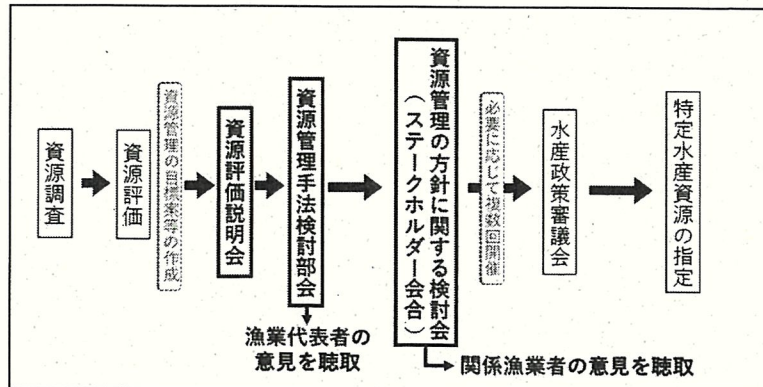
- 関係情報を遊漁者等へ周知

- ・ 県HP及び広報誌「THE かがわ」への掲載（8月掲載）
- ・ 県漁業指導船による洋上での指導（8～10月に実施）

第1回資源管理方針に関する検討会（トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群）
の概要について

1. 漁獲可能量による管理を行おうとする魚種の検討状況

- 新たな漁業法において資源管理は漁獲可能量による管理を行うことを基本とすることが規定され、これに基づき漁獲量が多く、最大持続生産量（MSY）ベースの資源評価が実施されている35の水産資源の漁獲可能量による管理について検討が進められている。



● 本県関係対象種の検討状況

	資源評価結果	検討部会	SH 会合	水産政策審議会	TAC 管理
ヒラメ瀬戸内海系群	R3. 12 月 公表	R4. 2 月 開催	未定	未定	未定
マダイ瀬戸内海中・西部系群	R3. 12 月 公表	R4. 4 月 開催	未定	未定	未定
カタクチイワシ瀬戸内海系群	R4. 9 月 公表	R4. 11 月 開催	第1回：R5. 5 月 第2回：R5. 12 月 第3回：R6. 5 月	R6. 9 月	R7. 1 月～ (ステップ1)
イカナゴ瀬戸内海東部	R4. 12 月 公表	R5. 5 月 開催	未定	未定	未定
マダイ瀬戸内海東部系群	R4. 12 月 公表	R5. 6 月 開催	未定	未定	未定
サワラ瀬戸内海系群	R4. 12 月 公表	R5. 6 月 開催	未定	未定	未定
トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群	R4. 12 月 公表	R5. 7 月 開催	<u>R7. 7 月 開催</u>	未定	未定
ブリ	R4. 1 月 公表	R4. 7 月 開催	第1回：R5. 10 月 第2回：R6. 3 月	R7. 2 月	R7. 4 月～ (ステップ1)

● (参考) R7 管理年度における本県の漁獲可能量による管理魚種・漁獲可能量

特定水産資源	知事管理漁獲可能量
くろまぐろ（小型魚）	1.0 トン
くろまぐろ（大型魚）	2.0 トン
まあじ	現行水準
まいわし太平洋系群	現行水準
まさば及びごまさば太平洋系群	現行水準
かたくちいわし瀬戸内海系群	48,000 トンの内数
ぶり	101,000 トンの内数

2. トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群 資源管理の方針に関する検討会（SH 会合）の概要

（1）日時・場所

令和 7 年 7 月 29 日（水）福岡県福岡市博多区

（2）香川県出席者

本島漁業協同組合組合長 小見山秀基 氏、与島漁業協同組合組合員 久保知司 氏、
香川県水産課 1 名

（3）内容

<議題>

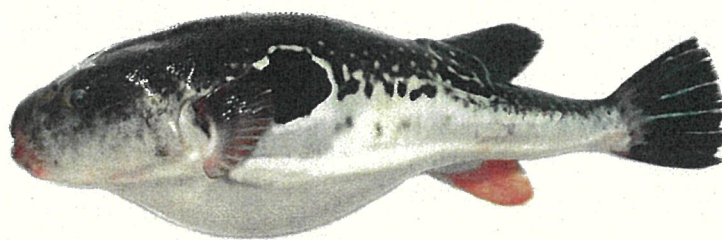
- ・ 資源評価結果、漁獲シナリオについて・・・【別添_資料①】（水研機構）
- ・ 資源管理手法検討部会で整理された意見や論点と対応方向について・・・【別添_資料②】（水産庁）
- ・ 今後の予定について・・・【別添_資料③】（水産庁）

<出席者からの主な意見と水産庁による議論の取りまとめ結果>

出席者からの主な意見	水産庁とりまとめ
神戸チャートではもう少しでグリーンゾーンになる。ここで TAC を入れる理由が分からない。（山口県_漁業関係者、岡山県_行政）	次回の SH 会合にむけて、TAC 管理を導入する理由について分かりやすく説明。
加入が悪いからということだと思うが、いくら親魚を増やしても加入が増えないのではないかと、別に要因があるのではないかと。（長崎県_行政） 親魚量が増えて、加入量が減っているメカニズムが分からなければ TAC の議論にならないのでは。広く加入の評価をしてほしい。（山口県_行政）	加入個体の由来について、調査を検討する（中長期的に）。 漁場ごとの C P U E の推移が分かる資料を提示。
組合所属の遊漁船業者は漁業者と同じ考えだと思うが、所属していない遊漁船やプレジャーについて、調査してから議論すべきだと思う。また、海の環境を元に戻す考えが必要。（香川県_漁業関係者）	遊漁の管理について、実態把握について検討を進める（中期的に）。
資源管理が必要なのは理解するが、現状で移行すると、厳しい TAC になり、実際、共済では厳しい。議論が進むよう支援策を考えてほしい。（福岡県_漁業関係者）	支援策について、漁獲シナリオの検討状況に応じて検討する（中期的に）。
関門海峡でひっかけ釣りによりトラフグが獲られている。山口は委員会指示によりひっかけ釣りは禁止になっているが、福岡ではなっていない。止めてほしい。（山口県_漁業関係者）	再生産を阻害する海域の資源管理の在り方について（具体的には関門海峡など）関係者間の協議を進める（中期的に）。
漁獲シナリオ案について、調整係数を 0.05 刻みではできないのか。（長崎県_行政）	漁獲圧 β について、0.05 刻みで提示する（達成確立 50% の付近で）



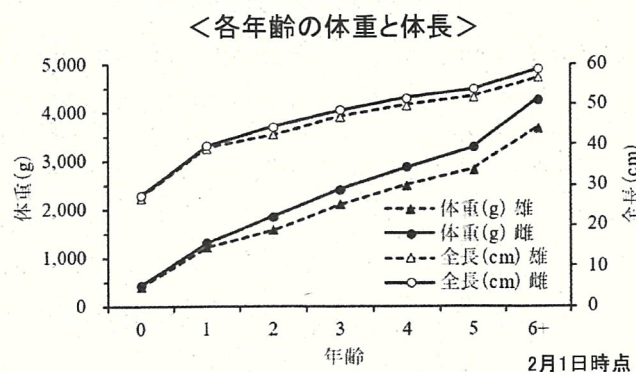
令和6年度 トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群の 資源評価結果について



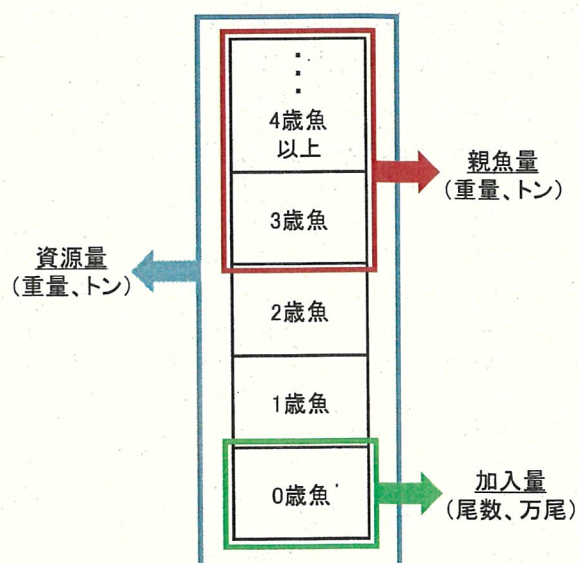
令和7年7月29日
水産研究・教育機構 水産資源研究所

トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群について ②

- 寿命は10年以上、産卵時期は4月周辺
- 0歳魚(体長10~20cm程度)から漁獲対象となる
- 資源評価では、3歳魚以上を親とみなしている
- 資源評価は、4月~翌年3月の漁期年に基いて実施
(例)2002年漁期→2002年4月~2003年3月
- 1977年以降、人工種苗放流を実施



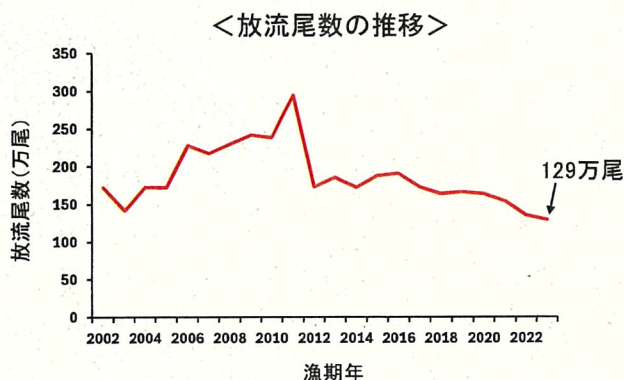
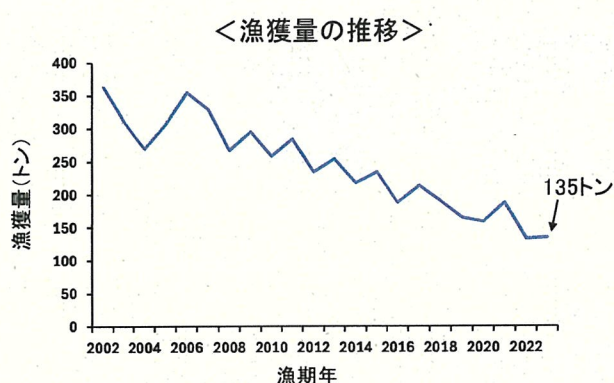
＜ある漁期年の資源量・親魚量・加入量＞



漁獲量と放流尾数

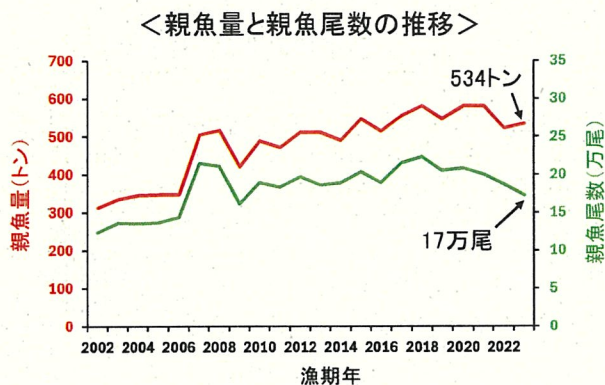
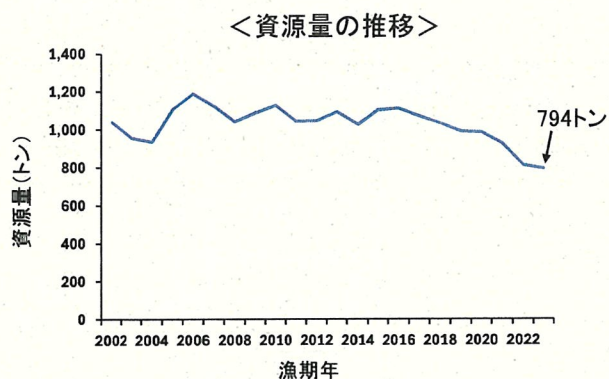
- 漁獲量は、2002年漁期※以降、減少傾向にあり、2023年漁期の漁獲量は135トン
- 放流尾数は、2002年漁期以降、増加傾向にあったが、2012年漁期以降は減少傾向にあり、2023年漁期の放流尾数は129万尾(速報値)

※ 漁期年: 4月～翌年3月



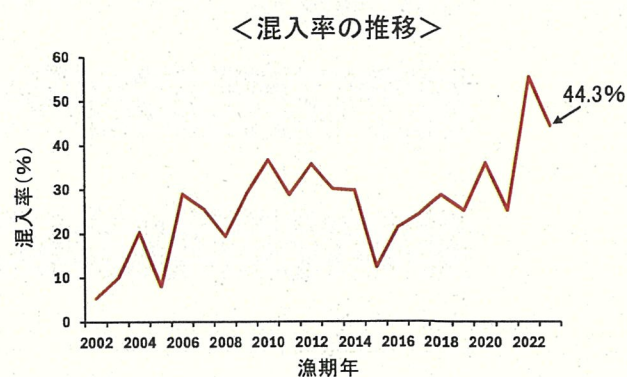
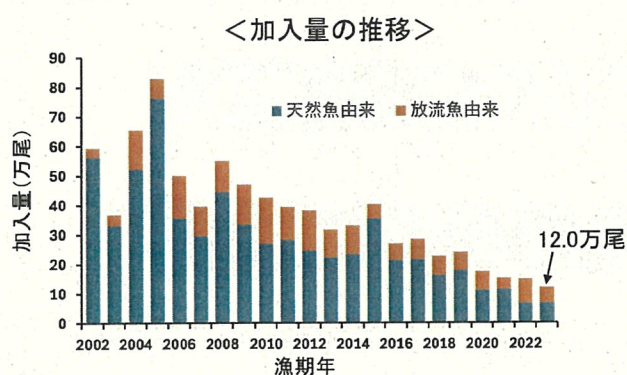
推定結果 ①: 資源量と親魚量

- 資源量は近年、減少傾向
- 2023年漁期の資源量は794トンであり、同年漁期の漁獲量(135トン)の約6倍
- 親魚量(3歳魚以上の重量)は2002年漁期以降、増加傾向にあるが、2022・2023年漁期はやや低い水準となり、2023年漁期の親魚量は534トン
- 親魚尾数(3歳魚以上の尾数)も2002年漁期以降、増加傾向にあったが、2019年漁期以降は減少傾向にあり、2023年漁期の親魚尾数は17万尾



推定結果 ②: 加入量と混入率

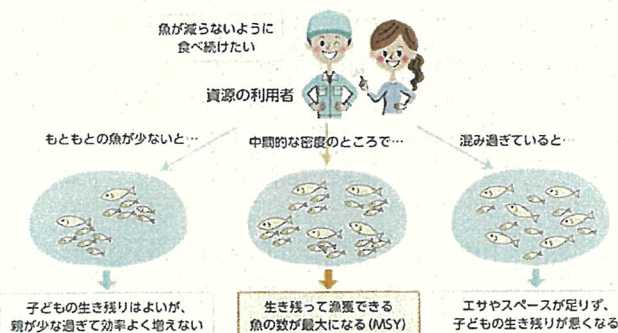
- 加入量は、毎年、産み出された魚のうち、漁獲対象となるまで生き残った子供(0歳魚)の数であり、天然魚由来の加入量と放流魚由来の加入量に分けられる
- 天然魚由来と放流後由来を合わせた加入量は、2000年代後半以降、減少傾向にあり、2023年漁期の加入量は12.0万尾
- 加入量に占める放流魚由来の個体の割合を「混入率」と呼ぶ
- 混入率は5.3%~55.3%で推移しており、2023年漁期の混入率は44.3%(速報値)



最大持続生産量(MSY)と、MSYを実現する親魚量など ①

- 水産資源は、自然の増加量(回復量)と同じ量だけ毎年漁獲すれば、持続的に利用可能
- ただし、親魚量が少なすぎても多すぎても回復量は少ない
- そのため、適度な親魚量を獲り残すことにより回復量を最大にし、その回復量を漁獲すれば、最大の漁獲量(最大持続生産量、MSY)を得ることが可能
- また、適度な親魚量を獲り残すためには、漁獲圧※を適切な強さに保つ必要
- 適度な親魚量を「MSYを実現する親魚量もしくは目標管理基準値」、適切な漁獲圧を「MSYを実現する漁獲圧」と呼ぶ

※漁獲の強さのことであり、イメージとしては、資源量のどのくらいの割合を漁獲するのかを表したもの



(FRA ニュース
Vol. 56より引用)

最大持続生産量(MSY)と、MSYを実現する親魚量など ②

- トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群の「MSY」は191トン※1であり、これは2023年漁期の漁獲量(135トン)の約1.4倍
- 「MSYを実現する親魚量(目標管理基準値案)」は577トンであり※1、2、これは2023年漁期の親魚量(534トン)の約1.1倍
- 「MSYを実現する漁獲圧」のイメージとしては、資源量の約18%を漁獲する漁獲の強さであり、これは2023年漁期の漁獲圧(資源量の17%を漁獲する漁獲の強さ)とほぼ同等

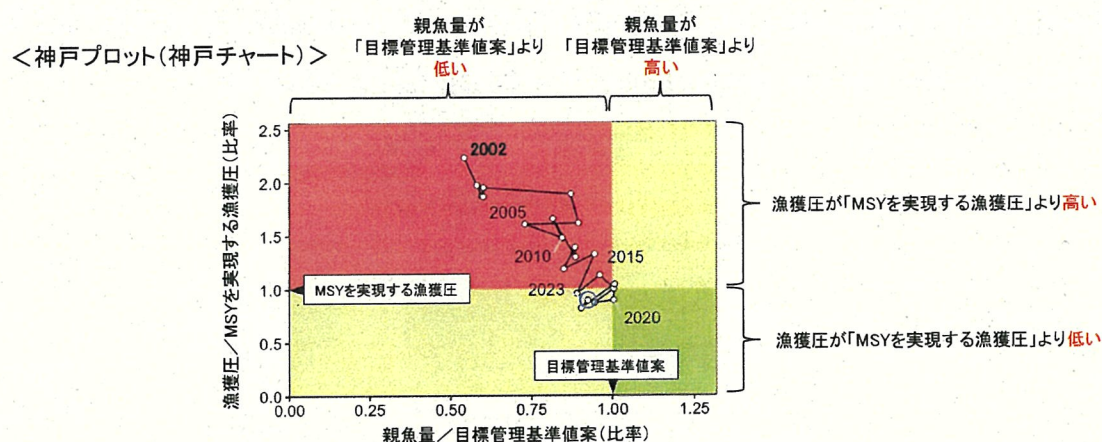
※1 正確には、「MSY」や「MSYを実現する親魚量」の代替値であり、漁獲量を最大にする観点に加えて、資源を保護する観点も考慮して算出している

※2 漁獲を行わない場合の親魚量(初期親魚量)である1,923トンの3割に相当する親魚量であり、一般的に、「MSYを実現する親魚量」は、初期親魚量の2~4割程度と考えられている

MSY (最大持続生産量)	MSYを実現する親魚量 (目標管理基準値案)	MSYを実現する漁獲圧
191トン	577トン	資源量の18%を漁獲する 漁獲の強さに相当
2023年漁期の漁獲量	2023年漁期の親魚量	2023年漁期の漁獲圧
135トン	534トン	資源量の17%を漁獲する 漁獲の強さ

資源の状況

- 各年の親魚量と漁獲圧が、それぞれ「MSYを実現する親魚量(目標管理基準値案)」や「MSYを実現する漁獲圧」よりも高いのか低いのかで、各年の資源の状況を判断
- 過去から現在に至るまでの資源の状況の推移を示した図が神戸プロット(神戸チャート)と呼ばれる図
- 親魚量は、2002年漁期以降、増加傾向にあるが、2022年漁期と2023年漁期は「目標管理基準値案」を下回っている
- 漁獲圧は、2002年漁期以降、減少傾向にあり、近年は概ね「MSYを実現する漁獲圧」を下回っている



将来予測 ①: 種苗放流を行わない場合の親魚量の推移

- 将来予測とは、今後、資源管理を続けた場合に、親魚量や漁獲量などが、どのように推移していくかを予測したものであり、種苗放流を行う場合（2018～2022年漁期と同水準の放流規模）と行わない場合について計算
- 資源管理のやり方として、将来の漁獲圧を「MSYを実現する漁獲圧」の0.4～1.0倍の強さに保った場合※の予測結果を示す
- また、参考情報として、現状の漁獲圧（近年の実際の漁獲圧）を今後も継続した場合の予測結果も示す
- これらの将来予測の結果を基に、どのような管理を行うかを検討

※ 親魚量が過去最低の親魚量（限界管理基準値案、329トン）を下回った場合には、漁獲圧を直線的に削減する

＜種苗放流を行わない場合の平均親魚量(トン)の推移＞

β	2024	2025	2035年漁期までに一度でも限界管理基準値案（329トン）を下回る確率										2035年漁期に目標管理基準値案（577トン）を上回る確率	
			2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035		
1.0	452	410	358	339	292	257	271	289	297	327	349	359	100%	1%
0.9			367	356	313	275	287	304	313	346	371	384	100%	6%
0.8			377	373	336	297	306	323	334	369	398	414	100%	11%
0.7			387	392	360	323	331	348	360	397	430	449	83%	21%
0.5			408	432	414	384	397	418	433	474	515	541	26%	42%
0.4			419	454	444	419	436	463	481	526	571	602	7%	56%
現状の漁獲圧			365	349	306	265	267	277	283	312	338	353	100%	2%

表の結果は毎年更新されます

- 将来の漁獲圧を、「MSYを実現する漁獲圧」の何倍の強さに保つのかを示したもの
- 現状の漁獲圧は、「MSYを実現する漁獲圧」の0.92倍の強さに相当

- 将来の漁獲圧が、「MSYを実現する漁獲圧」の0.4倍の強さを下回った場合、2035年漁期に親魚量が目標管理基準値案を上回る確率は50%を上回る

将来予測 ③: 種苗放流を行う場合の親魚量の推移

＜種苗放流を行う場合の平均親魚量(トン)の推移＞

β	2024	2025	2035年漁期までに一度でも限界管理基準値案（329トン）を下回る確率										2035年漁期に目標管理基準値案（577トン）を上回る確率	
			2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035		
1.0	452	410	358	339	332	327	351	374	387	419	445	460	82%	17%
0.9			367	356	354	353	379	405	420	455	485	502	32%	27%
0.8			377	373	379	382	413	443	461	499	533	553	1%	43%
0.7			387	392	406	415	451	486	508	550	587	611	0%	61%
0.5			408	432	465	489	540	587	618	671	719	751	0%	81%
0.4			419	454	498	532	591	646	684	744	799	837	0%	96%
現状の漁獲圧			365	349	346	345	371	396	410	444	474	491	43%	24%

表の結果は毎年更新されます

- 将来の漁獲圧を、「MSYを実現する漁獲圧」の何倍の強さに保つのかを示したもの
- 現状の漁獲圧は、「MSYを実現する漁獲圧」の0.92倍の強さに相当

- 将来の漁獲圧が、「MSYを実現する漁獲圧」の0.7倍の強さを下回った場合、2035年漁期に親魚量が目標管理基準値案を上回る確率は50%を上回る

資源管理手法検討部会で 整理された意見や論点と対応の方向

令和7年7月29日(火)

第1回資源管理方針に関する検討会
～トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群～

水産庁

2. 資源管理手法検討部会で整理された意見や論点(1/2)

(1) 漁獲等報告の収集について

- ① デジタル化の進展等により、現場に過度な負担がかからないような漁獲報告体制の構築が必要。
- ② 漁協、市場出荷については把握が可能だが、市場外流通や遊漁の数量を把握する方法を検討すべき。

(2) 資源評価について

- ① 資源評価に用いたデータと、資源評価プロセスについて、わかりやすく丁寧に説明すべき。
- ② 経済的価値を踏まえた暫定的な管理目標を設定した場合の将来予測シナリオも示すべき。
- ③ 海洋環境の変化に伴う漁場形成の変化を考慮すべき。
- ④ 従来の分布域外の地域（関東及び東北）での漁獲の急増について、漁獲状況を把握し、系群構造の変化等の説明が必要。

(3) 資源管理について

- ① 漁業者間で不公平とならないように平等な資源管理体制を構築する必要がある。
- ② 遊漁を含めた資源管理体制について検討すべき。
- ③ 漁業経営だけでなく加工・流通業等周辺産業にも考慮した柔軟な管理方法、漁獲シナリオを検討してほしい。
- ④ 混獲種の数量管理を適切に運用するための具体的な方策を提示してほしい。
- ⑤ 漁獲努力量による管理や栽培漁業を含めた包括的な管理体制を検討すべき。
- ⑥ 仮に環境変化等の要因により厳しい漁獲規制が一定期間継続した場合に、周辺産業を含め、経営を継続できるような支援制度を整備すべき。

2. 資源管理手法検討部会で整理された意見や論点(2/2)

(4)ステークホルダー会合で特に説明すべき重要事項について

- ① ステークホルダー会合での説明や資料は漁業関係者に理解が得られるようにわかりやすくして欲しい。
- ② 資源評価の精度、データセット、外国との交流、種苗放流の効果、遊漁への考慮等について説明して欲しい。
- ③ 水産庁補助事業で設定したKPIについて、漁獲量が削減された場合の取扱を説明して欲しい。
- ④ TAC導入についてはスケジュールありきではなく、漁業者が納得できるよう複数回開催の上で慎重に進めるべき。

3. 意見や論点に関する対応の方向

(1) 漁獲等報告の収集について

- ①デジタル化の進展等により、現場に過度な負担がかからないような漁獲報告体制の構築が必要。
- ②漁協、市場出荷については把握が可能だが、市場外流通や遊漁の数量を把握する方法を検討すべき。

- 
- TAC導入後は、漁業法に基づき報告義務がかかるため、本系群における市場外流通を含む全てのトラフグの水揚げについて報告が求められることとなります。
 - TAC報告体制及び情報収集体制の整備は、ステップ1において、関係府県と協力しながら進めます。
 - また、こうした体制の整備に当たっては、デジタル技術を活用したTAC報告の労力を軽減する取組も進めていきます(参考1参照)。
 - なお、現在、資源評価で利用している海面漁業生産統計は、水揚機関調査、漁業経営体調査及び一括調査等を組み合わせて重複が無いように合算して作成しています(参考2参照)。自由漁業による漁獲や市場外出荷等についても、これら調査方法によりカバーされています。

(次ページに続く)

3. 意見や論点に関する対応の方向

(1) 漁獲等報告の収集について

- 遊漁による採捕については、令和3年度に報告システムを構築し(参考3参照)、関係団体、都道府県庁等を通じて協力を依頼しています。

(遊漁採捕量報告: <https://www.jfa.maff.go.jp/j/enoki/yugyo/index.html>)

- なお、令和6年4月に施行された改正遊漁船業法の下、地域の水産業との調和のとれた遊漁船業の振興に向けて、都道府県知事が地域の遊漁船業者、遊漁船業団体、漁業者等を構成員とした協議会を組織できる制度が創設されました。この取組を活用して遊漁の資源管理に対する協力体制やルール作りに関する事項等の協議を行うことができます。(参考4参照)

3. 意見や論点に関する対応の方向

(2) 資源評価について

③ 海洋環境の変化に伴う漁場形成の変化を考慮すべき。

- 
- 漁場形成の変化については、本系群の分布域（本州日本海、瀬戸内海、東シナ海）内における変化であれば、基本的に資源量などの資源評価結果に反映（考慮）されています。
 - 一方、分布域外（東北太平洋岸や伊勢・三河湾など）への移動については、標識放流調査や遺伝子に関する研究などの結果から、分布域内における移動よりも、かなり制限されていると考えられます。
 - そのため、現在の本系群の資源評価については、基本的に、海洋環境の変化などに伴う漁場形成の変化を考慮した資源評価（現在の海洋環境の下での漁場形成を反映した資源評価）となっています。

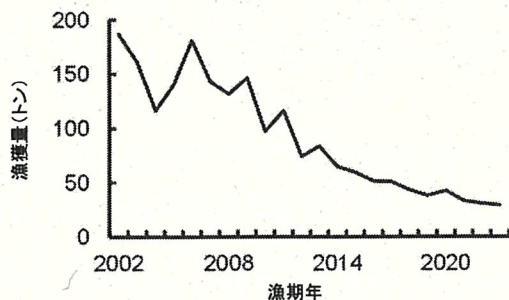
(次ページに続く)

3. 意見や論点に関する対応の方向

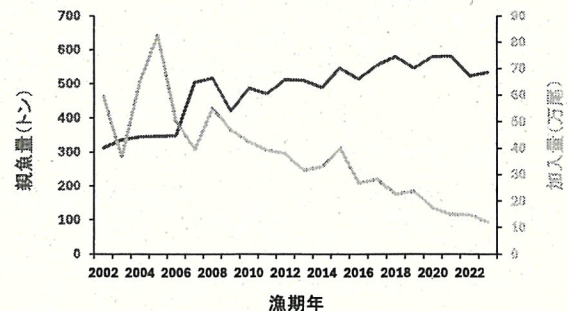
(2) 資源評価について

- 一方、分布域内の漁場形成の変化としては、例えば、産卵期の瀬戸内海においては、漁獲量の減少が続いていることから、漁場が形成されにくくなっている（産卵のために瀬戸内海に戻ってくる親魚が減少している）と考えられます。
- この要因については明らかになっていませんが、1つの可能性としては、高水温が影響している可能性が示唆されています。
- つまり、冬季における関門海峡付近の水温が高くなりすぎることにより、日本海や東シナ海から、関門海峡を通して産卵のために瀬戸内海へ戻る親魚が減少している可能性が示唆されています。
- なお、このように産卵のために瀬戸内海へ戻る親魚が減少していることが、本系群の特徴の一つである、親魚量はそれほど減っていないのに対し、加入量は大きく減少している一因となっている可能性も示唆されています。
- つまり、例えば親魚がいても、産卵しない親魚が増えることによって、産み出される子供の数が減っている可能性が示唆されています。

＜瀬戸内海における漁獲量の推移＞



＜親魚量と加入量の推移＞



3. 意見や論点に関する対応の方向

(3) 資源管理について

②遊漁を含めた資源管理体制について検討すべき。

- 資源管理の観点からは、魚を採捕するという点では、漁業も遊漁も変わらないことから、資源管理の高度化に関しては、遊漁についても漁業と一貫性のある管理を目指していくこととしています。
- 遊漁による採捕の影響を把握することはその第一歩です。遊漁による採捕については、令和3年度に報告システムを構築し、関係団体、都道府県庁等を通じて協力を依頼しています。
- 加えて、遊漁船を利用した遊漁による採捕数量の推定手法を構築したところであり、当該手法を用いて府県において、登録されている遊漁船業者に対してヒアリングするなどしてその数量を算出していくことは今後の資源評価上も有効です。

(次ページに続く)

3. 意見や論点に関する対応の方向

(3) 資源管理について



- 令和6年4月に施行された改正遊漁船業法の下、地域の水産業との調和のとれた遊漁船業の振興に向けて、都道府県知事が地域の遊漁船業者、遊漁船業団体、漁業者等を構成員とした協議会を組織できる制度が創設されました。この取組を活用して遊漁の資源管理に対する協力体制やルール作りに関する事項等の協議を行うことができます。
- 遊漁船業を営む方のうち漁協の組合員は約70%を占めており、本日お集りの皆様方の漁協にも遊漁船部会があるなど遊漁船業者の方が身近にいると思います。遊漁船業者に対しては、国としても都道府県や漁協系統団体と連携して理解と協力が得られるよう取り組んでまいります。皆様方におかれても、遊漁船業者の方々と資源管理の必要性や遊漁採捕量把握の重要性などについて意見交換・情報共有していただきますようお願いいたします。

3. 意見や論点に関する対応の方向

(3) 資源管理について

③ 漁業経営だけでなく加工・流通業等周辺産業にも考慮した柔軟な管理方法、漁獲シナリオを検討してほしい。



- 他資源では、ステークホルダー会合において資源を維持しつつ安定供給を実現する漁獲シナリオを検討することとなっています。
- この資源についても同様の提案があれば検討してまいります。

④ 混獲種の数量管理を適切に運用するための具体的な方策を提示してほしい。



- 他資源においては、留保枠の設定や管理区分間での融通など、年による漁場や来遊時期の変動を踏まえ、操業停止とならないような管理の工夫を取り入れてきました。
- このような工夫の適用を基本に、ステークホルダー会合の議論に応じてまいります。

3. 意見や論点に関する対応の方向

(3) 資源管理について

⑤ 漁獲努力量による管理や栽培漁業を含めた包括的な管理体制を検討すべき。

- 
- 漁業法は、漁獲可能量による管理を基本としつつ、稚魚の成育その他の水産資源の再生産が阻害されることを防止するために必要な場合には、漁業時期又は漁具の制限その他の漁獲可能量による管理以外の手法による管理を合わせて行うものと定めています。
 - 栽培関係については、三位一体の改革により平成18年度に都道府県へ税源移譲され、以降栽培漁業は都道府県が主体的に行うこととされています。種苗放流数の拡大も含めた継続にあたっては、放流効果の試算とともに、経済合理性の観点からの検討が必要となります。加えて、親魚の獲り控え等により加入量を増やすことで本資源の回復に取り組むことも重要です。

3. 今後のスケジュール(案)

- 令和8年3月末までに開催予定の次回ステークホルダー会合では、最新の資源評価結果を説明したのち、資源管理の目標の案と漁獲シナリオの案について議論する。
- その他、TAC管理の実施に向けた課題について、本日の会合を踏まえ必要に応じ議論する。

新たな資源管理の検討プロセス

①	資源評価結果の公表	令和4(2022)年12月23日に公表
②	資源管理手法検討部会	- 令和5(2023)年7月に開催 - 参考人等からの意見や論点を整理
③	ステークホルダー会合 (資源管理方針に関する検討会)	②で整理された意見や論点を踏まえ、具体的な管理について議論し、管理の方向性をとりまとめ
④	資源管理基本方針の策定	③でとりまとめられた内容を基に、資源管理基本方針案を作成 - パブリックコメントを実施した後、水産政策審議会資源管理分科会への諮問・答申を経て決定
⑤	管理の開始	

本日は第1回会合

(様式 1 : 参考人による事前意見書)

資源管理手法検討部会に係る参考人による事前意見書

1. 対象となる水産資源

トラフグ (日本海・東シナ海・瀬戸内海系群)

2. 参考人

氏 名	嶋野 勝路
所属又は職業等	香川県漁業協同組合連合会 代表理事会長

3. 御意見等

注：この記載内容については、部会に提示され、公表資料に記載されることとなりますので、御承知おきいただきますようお願いします。

(1) 全体に関する御意見 (本資源全般に係る御意見があれば、御記載ください。)

- ・ 漁獲可能量管理を導入するに当たっては、現場の漁業者の理解を得て進められたい。
- ・ 現状の評価結果では漁獲量を大幅に抑える必要があり、休漁や放流の補償等検討する必要がある。
- ・ 本県では主に混獲によって漁獲され、漁獲制限がかかる場合は操業に支障がでる。
- ・ また、混獲によって漁獲される魚種には数量管理にはなじまないと考える。

(2) 各論に関する御意見 (各項目に関係する御意見があれば、御記載ください。)

① 検討の対象となる水産資源の漁獲報告の収集体制の確認

- ・ 他県の漁業者が本県知事による許可に基づき本県海域で操業する場合、電子的な報告体制の整備状況によっては、県間で報告義務の履行に差が生じる恐れがあると考ええる。

② 資源評価結果に基づく資源管理目標の導入に当たって考慮すべき事項

- ・ 加入量の推定方法、資源量及び親魚量の関係性、再生産関係式や資源評価の妥当性、放流の効果や必要性について明記する必要があると考える。

③ 検討すべき漁獲シナリオの選択肢、漁獲シナリオを採択する際の注意事項

- ・ これまでの資源の動向や環境要因も踏まえた上で、漁獲シナリオを採択する必要がある。
- ・ 漁業者の自主的取組 (禁漁期の設定、漁獲サイズの制限) を考慮した漁獲シナリオも検討する必要があると考える。
- ・ 複数の漁獲シナリオを図示した上で、漁業者に説明すべきである。

④ 数量管理を導入・実施する上での課題及びそれら課題への対応方向

- ・ 瀬戸内海では入会が多く、共通の資源を利用するに当たって、隣県との管理方法の差異は問題となると考える。
- ・ 数量管理が導入された場合は大幅に漁獲量が削減されることから、数量管理の導入にあたっては、同時に経済的支援も検討していただきたい。

⑤ 数量管理以外の資源管理措置の内容（体長制限、禁漁期間等）

現在、休漁日や休漁期間の設定、小型魚の保護等に漁業者が自主的に取り組んでおり、自主的な取組の効果を示す必要があると考える。、従来に加えて新たな資源管理措置に取り組むことは経営面の観点からも困難であるとする。

⑥ 予め意見を聞くべき地域、漁業種類、関係者等の検討

トラフグを多く漁獲する込網漁業、底びき網漁業に従事する漁業者の意見を重点的に聴く必要があるとする。

⑦ ステークホルダー会合で特に説明すべき重要事項

- ・ 混獲魚種の取扱い、漁獲可能量管理を導入することのメリット、経営面での支援策を提示する必要があるとする。
- ・ どの程度の漁業者の理解を得て検討を進めるのか、具体的な対応の基準についても説明する必要があるとする。

⑧ 管理対象とする範囲（大臣管理区分、都道府県とその漁業種類）

本県においては混獲で漁獲される魚種であり、数量管理にはなじまない。

(3) その他（御質問等があれば、御記載ください。）

- ・ 資源管理の用語やそれぞれの用語の関連性の説明について、漁業者に対して、丁寧に行っていただきたい。漁業者の理解が得られるまで、複数回、ステークホルダー会合を実施していただきたい。
- ・ 漁獲可能量管理の導入については、遊漁の取扱いが定まらない限り、漁業者側だけで検討を進めることはできないとする。

2. 関係地域の現状について ～まとめ～

- 秋田県から鹿児島県にかけての日本海・東シナ海沿岸、豊後水道および瀬戸内海、有明海などの内海、内湾域に生息する。
- はえ縄、釣り、定置網、小型底びき網、沖合底びき網、など多種多様な漁法で漁獲される。また、県ごとの主要な漁法も異なる。

《分布図》



《参考：漁獲シェア表》

	3 か年平均					5 か年平均		
	H25-H27	H26-H28	H27-H29	H28-H30	H29-R1	H25-H29	H26-H30	H27-R1
大臣管理分合計	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
知事管理分合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
秋田県	2.8%	2.7%	2.5%	2.8%	2.7%	2.7%	2.8%	2.7%
山形県	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	0.0%	0.2%
新潟県	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
富山県	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
石川県	2.9%	2.7%	2.4%	2.5%	2.2%	2.6%	2.6%	2.4%
福井県	2.9%	2.5%	2.6%	2.8%	3.2%	2.8%	2.7%	2.9%
京都府	1.0%	1.2%	1.3%	1.2%	1.0%	1.1%	1.1%	1.2%
大阪府	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
兵庫県	0.8%	0.9%	0.9%	1.0%	1.3%	0.9%	0.9%	1.2%
和歌山県	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
鳥取県	0.8%	0.8%	0.7%	0.7%	0.9%	0.7%	0.7%	0.8%
島根県	1.5%	1.6%	1.9%	2.0%	2.0%	1.7%	1.8%	1.9%
岡山県	0.9%	1.1%	1.2%	1.2%	1.1%	1.0%	1.1%	1.1%
広島県	1.0%	1.1%	0.8%	0.6%	0.8%	0.9%	0.8%	0.9%
山口県	23.1%	23.0%	26.5%	28.4%	28.2%	24.5%	25.9%	27.1%
徳島県	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%	0.1%	0.0%	0.1%	0.1%
香川県	4.3%	3.9%	3.4%	2.5%	2.1%	3.8%	3.2%	2.8%
愛媛県	6.3%	6.5%	6.2%	6.7%	6.7%	6.3%	6.6%	6.6%
福岡県	31.7%	32.7%	30.2%	27.6%	27.7%	30.8%	30.4%	28.7%
佐賀県	2.3%	1.6%	1.5%	1.5%	1.6%	1.9%	1.6%	1.5%
長崎県	7.6%	7.4%	8.2%	8.8%	7.7%	8.1%	8.0%	7.8%
熊本県	3.0%	3.4%	3.7%	3.8%	4.2%	3.4%	3.6%	4.0%
大分県	5.7%	5.9%	5.2%	5.2%	5.5%	5.7%	5.4%	5.4%
宮崎県	1.0%	0.7%	0.5%	0.5%	0.6%	0.8%	0.6%	0.6%
鹿児島県	0.3%	0.3%	0.3%	0.3%	0.2%	0.3%	0.3%	0.3%

※黄色マーカーは全体上位80%に含まれる値

※ 水産庁が現時点ですべてのデータに基づいて暫定的に計算したものであり、今後のデータ入手や、計算の見直しによってシェアが変更となる可能性があります。

2. 関係地域の現状について ～香川県～

トラフグを漁獲する漁業の特徴

- 多くが込網漁業にて漁獲されるが、小型底びき網漁業でも漁獲される。
- 込網漁業にて主に春に漁獲されるが、狙って漁獲されているわけではなく、あくまで混獲である。

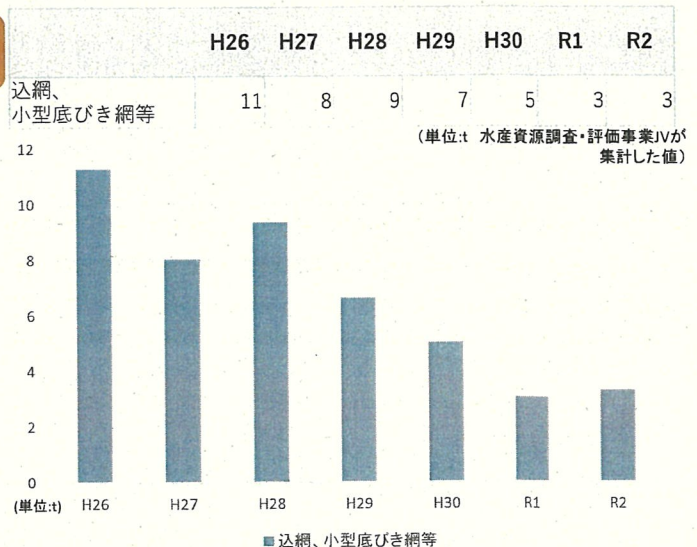
全体に占めるシェア

3 か年平均				
H26-H28	H27-H29	H28-H30	H29-R1	H30-R2
4.3%	3.9%	3.4%	2.5%	2.1%

5 か年平均		
H26-H30	H27-H31	H28-R2
3.8%	3.2%	2.8%

※黄色マーカーは全体上位80%に含まれる値

漁業種類別 漁獲実績



数量管理以外の資源管理措置の内容

- 資源管理計画により、漁具の制限、休漁期間の設定を実施。

令和7年度全漁調連要望書 要望項目及び要望先

要望項目	R6 比較	農林水産省				外務省	国土交通省	
		衆参 委員 長	農林水産 大臣	農林水産 大臣	水産庁		保安庁 海上	海事局
I 海区漁業調整委員会制度について								
1 海区漁業調整委員会制度の堅持	●	○	○	○				
2 海区漁業調整委員会の財政基盤の確保	●	○	○	○				
3 新たな漁業関係法令の改正について	●	○	○	○				
4 海区漁業調整委員及び事務局職員の資質向上について	△	○	○	○				
II 沿岸漁場の秩序維持について								
1 違法操業の取締強化等								
①取締り体制の連携強化	●	○	○	○			○	
②漁業監督吏員の資質向上	●	○	○	○				
③密漁パトロール、密漁防止看板の設置等への支援	●	○	○	○				
2 「密漁もの」の流通防止								
①「密漁もの」を排除する意識の指導・啓発活動の強化	●	○	○	○				
②違法漁獲物の流通に対する監視体制の強化	●	○	○	○				
③水産流通適正化法の制度の周知及び現場負担を軽減するための措置の実施	●	○	○	○				
④シラスウナギ流通の透明化の推進	●	○	○	○				
III 太平洋クロマグロの資源管理について								
1 クロマグロ資源の適正利用								
①資源管理評価結果に基づく漁獲枠の増枠の実現	△	○	○	○				
②漁獲枠配分の公平な配分と留保枠の有効活用	△	○	○	○				
③沿岸くろまぐろ漁業等のあり方について	△	○	○	○				
2 定置網等における管理手法の確立及び支援措置								
①漁業種類ごとの特性に配慮した資源管理	●	○	○	○				
②混獲回避及び適切な数量管理	△	○	○	○				
③混獲回避、減収に対する支援制度	●	○	○	○				
④漁獲状況を把握するシステム構築	●	○	○	○				
3 遊漁者等の操業自粛措置	●	○	○	○				
IV 沿岸資源の適正な利用について								
1 沿岸漁業と沖合漁業の調整								
①沿岸漁業と沖合漁業の共存共栄	●	○	○	○				
②沖合漁業に対する指導調整	●	○	○	○				
③カツオ・スルメイカにおける漁業調整	●	○	○	○				
④海洋環境の変化への対応	●	○	○	○				
⑤沖合漁業の漁船の大型化への対応	●	○	○	○				
2 マサバ太平洋系群の適正利用								
①大中小型まき網漁業、ロシア漁船による漁獲の指導管理	●	○	○	○				
②海洋環境変化を加味した目標管理基準値の設定	●	○	○	○				
③漁業者等の関係者に十分配慮した資源管理措置の実施	●	○	○	○				
3 カツオ資源の適正利用	△	○	○	○				
4 公海におけるサンマ、マサバ等の水産資源の適正利用	△	○	○	○				
5 沖合漁業の操業秩序の確立								
①VMS情報の多様な活用	△	○	○	○				
②VMSを有効に活用した取締強化	△	○	○	○				
③AISの利用普及	●	○	○	○				○
6 海上大規模開発事業の関係者説明	△	○	○	○				

R6比較[○:新規、△:内容変更、●:継続]

令和7年度全漁調連要望書 要望項目及び要望先

要 望 項 目	R6 比較	衆・参 委員 農林水産 大臣	農林水産省 農林水産 大臣	水産庁	外務省	国土交通省	
						保安庁 海上	海事局
V 漁業法改正後の制度運用について							
1 改正漁業法施行後の事務の円滑化							
①事務の円滑化	●	○	○	○			
②申請、報告システムの構築	●	○	○	○			
2 新たな資源管理措置等							
①自主的な資源管理の評価	△	○	○	○			
②TAC対象魚種追加の慎重な議論	△	○	○	○			
③漁業経営に配慮した漁獲管理	●	○	○	○			
④地域産業の成長対策の具体化	●	○	○	○			
⑤正確な漁獲量を把握する仕組み	●	○	○	○			
⑥定置網等の特性に応じた数量管理技術開発	●	○	○	○			
VI 外国漁船問題等について							
1 竹島の領有権確立と排他的経済水域の境界画定	△	○	○	○	○		
2 漁業協定等の見直し・暫定水域等の操業秩序確立と資源管理							
①日台漁業取決め適用水域の一部縮小と協議対象水域の拡張抑制	●	○	○	○	○		
②日台漁業取決め適用水域内の安全操業確保と台湾漁船のPI保険加入義務化	●	○	○	○	○		
③韓国漁船の操業規制と日韓暫定水域の操業秩序確立	●	○	○	○	○		
④中国漁船の日中暫定水域やEEZ内の操業秩序確立とサンゴ網対策	●	○	○	○	○		
⑤対ロシア漁業の操業機会の確保	△	○	○	○	○		
⑥EEZ内におけるロシア大型トロール船による漁具被害の防止	△	○	○	○	○		
3 外国漁船の取締強化と漁業者の安全の確保							
①領海及びEEZ内における外国漁船に対する徹底した取締りの実施	●	○	○	○		○	
②外国公船や外国漁船の位置動向の監視と漁船や関係機関に対する情報提供	●	○	○	○		○	
③外国漁船等の避泊による地元漁業や環境に対する影響の防止	●	○	○	○		○	
④北朝鮮のミサイル発射に係る安全確保	●	○	○	○	○		
4 投棄漁具等による被害の救済	●	○	○	○			
VII 海洋性レジャーとの調整等について							
1 遊漁と漁業の調整							
①遊漁マナーや漁業の基本的考え方に係る積極的な広報等の実施	●	○	○	○			
②スピアフッシングに対する規制強化	△	○	○	○			
③遊漁者の資源利用の実態把握	●	○	○	○			
④遊漁者に資源管理を行わせる体制整備	●	○	○	○			
2 プレジャーボート等の運航に係る安全性の確保と漁業被害の防止							
①プレジャーボート利用者に対する賠償責任保険加入義務化	●	○	○	○			○
②利用者の組織化によるマナーの周知徹底	●	○	○	○			○
3 ミニボートによる危険行為の防止							
①安全航行のための制度改正と反射板等装置の必置	●	○	○	○			○
②安全講習の義務化と円滑な救難活動のための所有者把握	●	○	○	○			○
③ミニボートの保険加入義務化とゴムボートの保険対象化	●	○	○	○			○

R6比較[○:新規、△:内容変更、●:継続]

P. 20○

P. 21○

P. 31○

令和7年度全国海区漁業調整委員会連合会 要望活動結果(国からの回答)

I 海区漁業調整委員会制度について

R7年度提案趣旨													
海区漁業調整委員会は、漁業の民主化を図る一翼として、漁業者・漁業従事者委員を主体として、漁業権の免許、沿岸漁業の調整や資源管理に至るまで、幅広く歴史的にその役割を担うとともに、その十分な運用により、漁業制度の円滑な運営を確保してまいりました。 改正漁業法施行後も、水産資源の持続的な利用を確保するとともに、水面の総合的な利用を図り、もって漁業生産力を発展させる目的達成のために、海区漁業調整委員会に求められる役割はさらに重要性を増すところとなっています。引き続き国、都道府県、漁協等と連携し、漁業調整機構として海区漁業調整委員会に求められる役割を、十分に果たしていかなければなりません。 また、海区漁業調整委員会が高度化・多様化する諸問題に対して、確実に対処していくためには、多くの議論が必要であり、安定した財政基盤の裏づけが必須です。 つきましては、海区漁業調整委員会制度に関する事項について、次のとおり要望いたします。													
R7年度提案	回答、状況等												
1 1 海区漁業調整委員会制度の堅持 海区漁業調整委員会制度を堅持するとともに、委員会は漁業者及び漁業従事者が主体となって漁業調整等を行う組織である位置づけを堅持すること。 継続	【水産庁】 1 海区漁業調整委員会は、漁業法に基づき、漁業権の免許や都道府県漁業調整規則の策定に際しての権限が与えられているなど、海区内の漁業に関する事項について広範にわたって処理する重要な機関である。 継続 2 <u>令和2年に施行された漁業法等においても、新たな資源管理の推進や漁場の有効活用を図っていく中で、海区漁業調整委員会の役割はさらに重要性を増すものと認識しており、海区漁業調整委員会がこのような役割を的確に果たしていけるよう、<u>漁業者及び漁業従事者を主体とした組織であるとの基本的な性格を維持している。</u></u> 内容変更												
2 2 海区漁業調整委員会の財政基盤の確保 漁業法改正に伴い、資源管理や漁業許可、漁業権に関する知事からの諮問等、海区漁業調整委員会の役割が増加していることを踏まえ、今後も漁業調整機構として適切な運営が確保されるよう、更なる予算措置により安定した財政基盤が確保されるよう措置すること。 継続	【水産庁】 漁業調整委員会等交付金については、国の厳しい財政事情の中においても一定の予算を確保しているところであり、引き続き、海区漁業調整委員会の<u>運営</u>に極力支障を生じることのないよう、予算確保に努めてまいりたい。 継続 【参考】漁業調整委員会等交付金 予算推移 <table> <tr> <td>令和2年度</td><td>181,302千円</td></tr> <tr> <td>令和3年度</td><td>181,302千円</td></tr> <tr> <td>令和4年度</td><td>181,302千円</td></tr> <tr> <td>令和5年度</td><td>176,302千円</td></tr> <tr> <td>令和6年度</td><td>176,302千円</td></tr> <tr> <td><u>令和7年度</u></td><td><u>171,302千円</u></td></tr> </table>	令和2年度	181,302千円	令和3年度	181,302千円	令和4年度	181,302千円	令和5年度	176,302千円	令和6年度	176,302千円	<u>令和7年度</u>	<u>171,302千円</u>
令和2年度	181,302千円												
令和3年度	181,302千円												
令和4年度	181,302千円												
令和5年度	176,302千円												
令和6年度	176,302千円												
<u>令和7年度</u>	<u>171,302千円</u>												
3 3 新たな漁業関係法令の改正について 海区漁業調整委員会の役割を十分果たし、地域漁業の発展に寄与するため、国は海区漁業調整委員や地方自治体、漁業関係者に対し、必要な情報の提供を行うとともに適切な指導・助言を行うこと。 継続	【水産庁】 1 海区漁業調整委員会制度を適切に運用していくためには、海区漁業調整委員会や都道府県、水産関係団体、漁業者等関係者の理解と協力が不可欠であることから、今後とも必要な意見交換等を適切に実施してまいりたい。 継続 2 また、海区漁業調整委員会の全国組織である貴会において、各海区の実態について調査するなどして必要な情報共有を行うことで、より円滑な制度運用が図られると考えることから、引き続き、貴会と連携を図ってまいりたい。 継続												

R7年度提案	回答、状況等
4 4 海区漁業調整委員及び事務局職員の資質向上について 海区漁業調整委員会は、強力な権限・機能を有しており、諮問機関、建議機関であるばかりでなく、自ら裁定、指示、認定などを行う決定機関である。漁業調整や資源管理をはじめとして広範な事案について公平公正な審議を行うためには、海区漁業調整委員の専門的、技術的知識が必要であることから、委員の資質向上を図る研修機会を設けること。 また、事務局職員も頻繁に異動することから、法定の諮問事項に対する委員会の役割等について、具体的に整理した解説書を作成し各事務局に配布すること。 内容変更	【水産庁】 1 海区漁業調整委員会における公平公正な審議を行うためには、<u>委員会の権限と役割について御理解いただくことも重要な要素の一つであることから、貴会とも連携し、様々な機会をとらえて委員にご説明してまいりたい。</u> 2 <u>また、委員会の事務作業や手続きを担う事務局職員の資質向上も必要と考えていることから、例年、海区漁業調整委員会事務局職員研修会及び都道府県漁業調整担当者会議の中で、海区漁業調整委員会の役割と権限について資料を配布の上説明し、理解醸成を図っているところであり、まずはこの場を活用いただきたい。</u> 3 <u>また、解説書の作成については、貴会において作成し、関係者と共有するなど、貴会の更なる活動活性化の観点から工夫していただきたい。</u> 内容変更 新規 新規

Ⅱ 沿岸漁場の秩序維持について

R7年度提案趣旨

密漁は、水産資源に悪影響を及ぼし、健全な漁業経営を阻害するばかりでなく、漁業者が真摯に取り組む種苗放流や資源管理に対する意欲をも減退させ、水産基本法の基本理念の一つである「持続的な利用を確保するための水産資源の適切な保存、管理及び増殖等の推進」の根幹を揺るがす問題となっています。

改正漁業法及び水産流通適正化法により罰則が大幅に強化されましたが、依然として密漁は巧妙化しており検挙が難しくなっていることから、一層の取締りの強化や罰則の厳格な適用などの対応が必要とされています。

一方で、取締りの強化にもかかわらず密漁が後を絶たないことから、生産者と流通団体が更なる連携を図り、市場等から密漁品を積極的に排除するようなより高い意識を持つことと、「密漁もの」の流通に対する監視体制を強化することが必要です。

つきましては、沿岸漁場の漁業秩序を維持し、水産資源に悪影響を及ぼしている密漁を防止するため、次の措置を講じられるよう要望いたします。

R7年度提案	回答、状況等
1 1 違法操業の取締強化等 ①組織化及び広域化する密漁全般に対処するため、定期的な連絡会議の開催や都道府県との情報交換などにより、海上保安庁及び水産庁を核とした取締り体制の一層の強化を図り、警察庁とも引き続き協力・連携体制を維持しつつ、実効性のある組織横断的な取締りを実施すること。 継続 ②漁業監督吏員の資質向上のための訓練・研修等を拡充すること。 継続 1 ③漁業者が実施する密漁パトロールに伴う費用や、密漁防止看板の設置等啓発にかかる費用等に対し、総合的な支援策を図ること。 継続	【水産庁】 1 水産庁としては、海上保安庁と連携した漁業取締りを行うため、定期的に連絡会議を開催しているところである。 継続 2 現場レベルにおいては、各海域を管轄する水産庁漁業取締本部支部（漁業調整事務所）と管区海上保安本部が地方ブロック会議を開催し、重点海域での連携取締、情報の相互提供等を行い、各海域で違法操業の取締りに対応しているところ。特に潜水器密漁が複数県を跨ぎ多発している地域の支部では、地方ブロック会議とは別に、関係管区海上保安本部のほか関係県の取締担当者による潜水器密漁対策会議を開催するなど、連携を図っているところである。 継続 3 今後とも、警察庁も含めた関係取締機関との協力・連携を密にして違法操業の実効ある取締りを実施してまいりたい。 継続 4 また、昨年11月に「令和6年度漁業監督公務員研修会」をWEB会議を併用して開催し、法務省、警察庁、海上保安庁、水産庁の講義等による取締能力の向上及び連携強化に努めたところであり、今年度においても漁業監督吏員の資質向上のため、同様に開催を予定している。 継続 5 沿岸域での密漁対策については、都道府県、海上保安庁、警察及び水産庁等の関係機関が、関係漁業者等と連携して実施することが効果的であると認識している。 継続 6 密漁対策の支援としては、都道府県への交付金により、密漁対策に資する密漁防止看板や監視カメラ等の必要な資機材の導入のほか、監視活動の支援を行っているところである。 継続 7 また、漁協、都道府県、警察及び海上保安庁等の関係者が密接に連携し、情報の共有、取締りの強化、漁業者による監視、パトロール等の取組を推進するとともに、水産物流通の適正化、一般市民への啓発を合せて行うことにより、総合的な密漁対策を推進してまいりたい。 継続 【海上保安庁】 海上保安庁では、各管区海上保安本部・海上保安部署において、警察等の関係機関、自治体、地元漁協等と緊密に連携・協力しつつ、悪質な密漁事犯の摘発に重点を置き、厳正な監視・取締りを行っております。 今後も組織化、広域化する密漁事犯に対し、関係機関との連携強化に努め、対応してまいります。 継続

2	2「密漁もの」の流通防止 ①市場関係者や小売店などの流通業界に対し、「密漁もの」を主体的に排除するよう指導・啓発活動を強化すること。 継続 ②違法漁獲物の流通に対する監視体制を強化すること。 継続 ③水産流通適正化法について、漁業者及び流通関係者へ制度をわかりやすく周知するとともに、電子システムの導入支援により、現場の負担を軽減するための措置を講じること。 継続 ④シラスウナギについては県域を越えて広く流通されていることから、水産流通適正化法の適用開始に向けて、国主導による流通の透明化を推進すること。 継続	【水産庁】 1 沿岸域における近年の組織的かつ悪質な密漁の発生状況を踏まえ、令和2年12月に施行された漁業法改正において、当該密漁の対象となっているナマコ、アワビ、シラスウナギを特定水産動植物に指定し、違法に採捕した者や違法と知って流通させた場合の罰則を新設し、拘禁刑3年、罰金3,000万円とするなど、罰則を大幅に強化したところである。 継続 2 なお、都道府県への交付金により、 ① 悪質化広域化する密漁を防止するため、関係者による協議会や密漁監視のための指導講習会の開催 ② メディアの活用や看板設置等による普及啓発 ③ 監視活動に必要な暗視カメラやドローン等の資機材の導入費等の密漁監視施設の整備 を支援することができることとなっているので、御活用願いたい。 継続 3 水産流通適正化法に基づき、特定第一種水産動植物に指定されているアワビ、ナマコの取扱事業者のうち、事業区域が複数県に及ぶ広域事業者については、国の職員が同法の遵守状況を確認し、違反の疑義がある場合には随時県とも連携しつつ立入検査を行っているところ。 継続 4 また、<u>令和6年6月に成立した漁業法及び水産流通適正化法の一部を改正する法律において、太平洋クロマグロの大型魚(30kg以上)について、TAC報告事項に採捕した個体の数の追加等の措置を講じるとともに、漁業者、流通事業者に対して、個体の重量等の情報伝達や取引記録の作成・保存等の義務付けの措置を講じることとしたところ。令和8年4月の施行に向けて、運用通知等の整備とともに、説明会の開催等きめ細やかに関係事業者等への周知を行っているところである。</u> 内容変更 5 水産流通適正化法に基づく電子システムへの支援については、漁獲番号等を迅速かつ正確・簡便に伝達することを可能とするための伝達システムを国で構築・運用しているところである。<u>また、太平洋クロマグロに関する情報伝達等にも利用できるよう改修等を行っているところである。</u> 内容変更 6 シラスウナギについては、令和7年12月から水産流通適正化法が適用されることに向け、同法による<u>漁獲番号の伝達、取引記録の作成・保存等の義務が円滑に履行されるよう、利便性が高いトレーサビリティシステムの開発を支援しているところ。</u> 内容変更 7 今後とも、流通業界も含め関係者が密接に連携し、情報共有、合同取締り等の漁業取締りの強化、漁業者による監視、パトロール等の密漁対策への支援等を行うことで、総合的な密漁対策を推進してまいりたい。 継続 【参考】密漁対策のための罰則強化の概要(令和2年12月1日施行) (新設)特定水産動植物の採捕禁止違反の罪、密漁品流通の罪 拘禁刑3年／罰金3,000万円 無許可漁業等の罪 拘禁刑3年／罰金200万 ⇒ 拘禁刑3年／罰金300万円 漁業権侵害の罪 罰金20万円 ⇒ 罰金100万円
---	---	--

Ⅲ 太平洋クロマグロの資源管理について

R7年度提案趣旨

太平洋クロマグロについては、国際会議の取り決めに基づいて、厳格な漁獲可能量管理が行われています。
これまでの資源管理の取組が定着し資源の回復が見られている中、漁業者は、クロマグロの資源管理の重要性を理解して漁獲管理を実践しているものの、沿岸域への来遊量が増加し、突発的な漁獲が生じたり、これまで来遊がまれであった海域で漁獲されるなど、さまざまな課題等が発生し、混乱が生じています。クロマグロの年間漁獲量及び金額が、全体の数パーセントとごく僅かしかいない定置網や延縄漁業等において漁獲抑制のため、網起しの回数を減らすなどの休漁や放流作業等の実施、場合によっては操業を中止せざるを得ない状況となっており、漁業者の経営の悪化、産地魚市場への水揚げ減少、これに伴う地域水産加工業者への原魚供給の減少など、関連産業を含む地域経済への影響も懸念されています。

また、遊漁者については、大型魚採捕の報告を徹底、迅速化し、実態を適確に把握した上で、国全体の資源管理に影響が及ばないよう強く指導していく必要があります。

つきましては、漁業者が将来にわたりクロマグロ資源を持続的に利用し、漁業経営の維持・安定が図られるよう、次の事項について要望いたします。

R7年度提案	回答、状況等
1① 1 クロマグロ資源の適正利用 ① 資源評価結果に基づく漁獲枠の増枠の実現 ア 日本の漁獲枠の増枠 太平洋クロマグロの資源は順調に回復していることから、中西部太平洋まぐろ類委員会(WCPFC)等国際会議で、<u>引き続き、議論をリードし、国際的なルールに則った漁獲枠拡大に取り組むこと。</u> イ 資源評価結果を反映した増枠の実現 最新の情報を漁獲枠へ迅速に反映させるため、資源評価を毎年実施し、国際委員会において、直近のデータに基づく資源評価結果を反映した漁獲枠の<u>更なる</u>増枠を次期管理期間で実現するとともに、漁獲枠未利用分の繰越上限を堅持すること。 内容変更 継続	【水産庁】 1 <u>資源管理の取組の結果、クロマグロの資源は回復傾向にあり、昨年の中西部太平洋まぐろ類委員会(WCPFC)年次会合において、小型魚10%、大型魚50%を基本とする増枠等が決定され、日本の漁獲上限も、2025年から、小型魚4,407トン(400トン増)、大型魚8,421(2,807トン増)に増枠された。また、未使用漁獲枠の繰越については、原則5%以内であるところ、昨年の年次会合では、17%に拡大する特例措置を期限なく適用できることが合意された。</u> 新規 2 <u>昨年合意されたWCPFC保存管理措置は2026年に見直しを行う旨規定されているが、次回の漁獲上限の見直しは、現在議論中の新たな管理方式に基づき行われる見込みであるところ、同管理方式の議論を着実に進めていく必要がある。引き続き、漁業関係者の皆様による資源管理の取組を後押ししつつ、国際社会における議論を積極的に主導してまいりたい。</u> 新規 3 <u>なお、次回の資源評価は2027年を予定しているが、資源評価については、国際的な科学機関であるISC(北太平洋まぐろ類国際科学小委員会)に関係国・地域の研究者が集まり、相当な時間と労力を費やして実施されるものであり、また、1年間では資源評価に係るデータの更新が限定的なものとなることから、1年ごとの資源評価は現実的ではない。</u> 継続

1② ②漁獲枠の公平な配分と留保枠の有効活用 ア 沿岸漁業に配慮した配分 国内の漁獲枠配分に当たっては、魚種の選択性が低く、零細な漁業者が多い沿岸漁業の操業特性に配慮した配分とし、規制の方法については、沿岸漁業者が過大な犠牲を強いられることにならないよう慎重に対応し、知事管理区分への配分枠を増やすこと。 継続 イ 来遊量や漁獲状況を反映した公平な見直し 資源量の増加とともに沿岸域への来遊量が増えている近年の来遊状況の変化にも配慮し、また、今以上に大臣許可漁業と沿岸漁業の操業特性や漁獲管理の難易度等に配慮し、<u>負担の公平性という観点から、漁業種類や地域間で不公平が生じることがないように見直すこと。</u> <u>また、配分方法について協議するための検討会を設け、協議の場に各都道府県の沿岸漁業の代表者が参加できるようにすること。</u> 内容変更 ウ 定置網の突発的な入網への対応 定置網漁業の不規則な漁獲特性に配慮し、突発的な入網や混獲による積み上がりへ柔軟に対応できるよう、留保枠の有効活用や全国枠の確保などの仕組みを確立すること。 継続 エ 枠の融通と留保枠の有効活用 国の留保枠については、これまでと同様、沿岸漁業に配慮した柔軟な配分をお願いする。加えて、国の留保枠が最大限活用できる仕組みの確立や都道府県の漁獲枠を裁量で管理できるよう検討すること。<u>また、管理年度当初に盛漁期となる地域があることから、留保からの上乗せ配分については、当初枠に反映させるなど、可能な限り早期の配分を実施すること。</u> 国内全体で漁獲枠を遵守するため、国において漁獲枠の配分の考え方を見直す際には過去の漁獲実績だけで算定するのではなく、漁獲制限による漁業経営への影響の大きさ、負担の度合い、資源に与える影響の度合いも考慮し、都道府県間の漁獲量の融通について不公平が生じることがないように管理期間の見直しも検討すること。 内容変更	【水産庁】 1 <u>くろまぐろの国内配分については、水産政策審議会の下に学識経験者や、沿岸漁業者の団体の代表を構成委員とする「くろまぐろ部会」を設置し、そこでとりまとめた「配分の考え方」に基づき行っている。</u> 内容変更 2 <u>昨年の増枠を踏まえた国内配分についても、くろまぐろ部会で丁寧に議論した上で令和7管理年度以降の「配分の考え方」を決定し、漁業種類ごとの近年の漁獲実績をベースとしつつ、特に大型魚については、放流等の負担の大きい沿岸漁業に配慮した配分を行ったところである。</u> 内容変更 3 <u>さらに、国の留保枠からの配分については、「配分の考え方」に基づき、小型魚・大型魚ともに全量を沿岸漁業に配分している。</u> 内容変更
---	---

1③ ③沿岸くろまぐろ漁業等のあり方について ア 広域漁業調整委員会の承認制による沿岸くろまぐろ漁業について、承認制に係る事務取扱要領で認める都道府県や広域漁業調整委員会をまたぐ承認(廃止見合新規)のあり方や承認の条件、運用の仕方等について見直すとともに、資源の回復による漁獲枠の増大に見合った新規承認を実現し、これを維持すること。 内容変更 イ 大臣届出漁業である「沿岸くろまぐろはえ縄漁業」者のうち、明らかに他県の管轄に属する海域で操業するものについては、船籍県の管理が及ばないため、知事許可や海区漁業調整委員会指示に基づき操業するものを除き、遊漁と同様に国によって管理すること。 継続	【水産庁】 1 沿岸くろまぐろ漁業については指示の期間を2年間とし、2年毎に指示内容を検討した上で新たな指示を発出している。また、令和7管理年度においては、都道府県が漁獲可能量の遵守に支障を及ぼさない範囲で、新規承認を日本全体で5,000を超えない数まで認めることとし、結果として約2,800の新規承認があったところである。 内容変更 2 大臣管理区分は、かつお・まぐろ漁業の大臣許可を有する者が対象となっている。ご要望にある沿岸くろまぐろはえ縄漁業者によるクロマグロの漁獲は少ないと承知しており、まずは各県で管理手法の検討をしていただく必要があると考えるが、知事による管理上支障があるような操業をする沿岸くろまぐろはえ縄漁業者がいるのであれば、その管理手法については個別にご相談いただきたい。 継続
2① 2 定置網等における管理手法の確立及び支援措置 ①漁業種類ごとの特性に配慮した資源管理 ア 定置網等 定置網における漁獲制限の具体的調整案をはじめ漁業種類ごとの特性に配慮した具体的な管理手法を示すこと。 規制の方法については、沿岸漁業者が過大な犠牲を強いられることにならないよう慎重に対応すること。 継続 イ 大中小型まき網漁業 産卵量を安定して確保するために、大中小型まき網漁業による産卵期や産卵場における操業を制限するなどの対策を強化すること。 継続 ウ 大臣許可漁業 資源管理の推進に当たっては、沿岸漁業者が将来の漁業経営に不安を抱かないよう、十分な説明を尽くすこと。 大臣許可漁業に対し、IQによる資源管理の遵守とともに、一部大臣許可漁業の地先海面への新規参入により、漁場利用の混乱等が発生していることを踏まえ、漁場利用などの地元ルールを尊重するよう強く指導すること。 継続	【水産庁】 1 昨年の増枠を踏まえた国内配分については、くろまぐろ部会で丁寧に議論した上で令和7管理年度以降の「配分の考え方」を決定し、漁業種類ごとの近年の漁獲実績をベースとしつつ、特に大型魚については、放流等の負担の大きい沿岸漁業に配慮した配分を行ったところ。 内容変更 2 また、季節や地域ごとの偏りが大きいくろまぐろの来遊に即して、都道府県間等での漁獲枠の融通を推進しているところである。 内容変更 3 産卵親魚の漁獲規制については、 ① ISC(北太平洋まぐろ類国際科学小委員会)では、親魚量と加入量の間には明確な関係が見られていないことから、産卵期の漁獲を特別に区別せずに資源評価及び将来予測を実施しており、これに基づくWCPFCの資源管理措置も産卵期の漁獲を区別していない。 ② そのため、科学的には親魚の漁獲を控える場合、産卵期かどうかは重要ではなく、小型魚の漁獲を規制する方が将来の親魚資源回復に大きく貢献するものとされているところである。 継続 削除 このことから、令和6管理年度の大中小型まき網漁業への小型魚の配分については、約300トン大型魚に振り替えることにより前年よりも更に削減し、WCPFCの基準年である2002年から2004年の平均漁獲実績の5分の1にまで減少させているところである。 削除 4 一方で、「くろまぐろ部会」のとりまとめでは、「多数の沿岸漁業者産卵期操業規制の必要性を訴えている現状を踏まえ、この問題への丁寧な説明に努めていくべきである。」とも示されており、資源管理の推進にあたっては今後とも資源評価に必要な調査を継続するとともに、沿岸漁業者のご理解が得られるよう、丁寧な説明を行ってまいりたい。 4 大臣許可漁業者との漁場競合について、沿岸漁業者とのトラブル回避のために必要な場合には業界団体を通じて周知するので、周知すべきルールがあれば、情報提供いただきたい。 継続

2②	②混獲回避及び適切な数量管理 ア 混獲回避及び再放流技術開発 定置網の特性に応じた資源管理型の選択性の高い漁具の開発、再放流の手法開発など実用的な技術を早急に確立し、技術普及が促進されるよう、導入支援を実施すること。 また、まぐろはえ縄や一本釣り漁業についても同様に漁具改良の支援を行うこと。 継続 イ いか釣り漁業等への影響評価と漁具被害低減技術開発 クロマグロ資源の回復によるイカ等の水産資源への影響評価を行うとともに、いか釣り漁業への被害を低減する実用的な技術開発を実施すること。 新規 ウ 適切な数量管理 数量管理を適切に実行するに当たり、放流した個体がへい死した場合、クロマグロの資源管理の取組について海上保安部と情報共有し理解を得ること。 沖合底びき網に死んだクロマグロが入網するような事例を根絶するため、監視体制を強化すること。 継続	【水産庁】 1 平成29年度から令和2年度まで「太平洋クロマグロ漁獲抑制対策支援事業」によって、定置網におけるクロマグロの漁獲抑制に取り組むための技術開発を実施したところである。 継続 2 また、平成29年度補正予算において、定置網漁業を対象とした混獲回避機器の導入や放流活動への支援を措置し、平成30年度補正予算からは漁船漁業にも対象範囲を拡大している。<u>令和6年度補正予算においても、機器等の導入及び改良に対する支援を実施しており、既にご活用いただいているところ。</u> 内容変更 3 <u>なお、イカを含む他資源への影響については、毎年度、水産研究・教育機構がクロマグロの胃内容物の調査を実施しているところであるが、「くろまぐろの資源量の増加によってスルメイカが減少した」との因果関係を示すデータはまだ得られていない。今後も胃内容物の調査を継続し、水産資源への影響の可能性について注意深く見定めてまいる。</u> 新規 4 <u>また、クロマグロによるいか釣り漁業の操業への影響を軽減する方法については、水産研究・教育機構が、水中灯の点滅による回避効果について調査を行っているところ。本調査の結果を踏まえ、水産庁として必要な対策を検討してまいりたい。</u> 新規 5 資源管理のための放流の取組については、海上保安部でもご理解いただいているとの認識だが、海上保安部との間で何か問題等がある場合は、随時ご相談いただきたい。 継続 6 また、沖合底びき網漁業にクロマグロの死骸が入網し、同時に入網したずわいがに等の漁獲物に被害が生じた例があることは承知しており、実態把握や原因究明のため、入網した際の情報を収集しているが、残念ながら、現時点では原因等は明らかになっていない。引き続き、関係漁業者に死亡個体は水揚げしTAC報告を行うよう指導を行うとともに、漁業者からの情報提供も得ながら、原因の調査を含め再発の防止に努めてまいりたい。 継続
2③	③混獲回避、減収に対する支援制度 ア クロマグロ混獲回避の取組支援 混獲回避用の機器等の導入支援や、放流活動への支援に係る事業を拡充し、支援条件の緩和及び導入できる機器の対象範囲の拡大を図ること。混獲回避が可能な漁法への転換に必要な技術習得支援など、経営安定対策のさらなる充実を図ること。 継続 イ 混獲回避型休漁支援 混獲回避のための休漁支援においては、十分な予算を確保するとともに、各地域の実情に応じた支援がなされるよう発動条件を緩和すること。 継続 ウ 漁業収入安定対策事業の拡大 資源管理の取組による減収に対応した直接補填などの支援制度を講じ、漁業者が安心して経営の継続ができるよう、支援措置を継続実施すること。 継続 エ 迅速な支払い 上記事業の助成金については、漁業者の資金繰りに支障を来さないよう、迅速な支払いを行うこと。 継続	【水産庁】 (アからエまでについて) 1 <u>クロマグロの放流等による混獲回避への取組に対し、令和6年度事業においては、混獲回避用の機器等のデータを提供する場合は支援上限額を400万円に引き上げる等、事業の拡充を行った。また、混獲回避のための休漁支援の予算を確保するとともに、小型魚から大型魚へ漁獲対象を転換する取り組みを支援する事業を開始するなど、支援策の更なる充実を図っているところである。</u> 内容変更 2 厳しい資源管理に取り組む漁業者の意見を踏まえつつ、引き続き必要な予算の確保に努めるとともに、必要な事項についての関係省庁との情報共有を図ってまいりたい。 継続

オ 産地魚市場や水産加工業者等への対策 産地魚市場や水産加工業者等については、水揚げ減少による経営悪化に対する支援制度が整備されていないため、地域経済への影響を考慮した対策を講じること。 継続	(オについて) 1 産地魚市場や水産加工業者等の中小企業者については、一時的に売上高や利益が減少した場合に、中小企業庁のセーフティーネット保証により資金繰りの支援を受けられることとされているため、積極的にご活用いただきたい。 継続 2 また、水産加工業に対しては、<u>地域の水産物を活用して生産・加工・流通業者が連携して行う原材料転換や新商品開発等の「売れるものづくり」に向けた取組</u>を支援している。 内容変更
カ いか釣り漁具被害対策 クロマグロの大量来遊により、イカの漁場形成が阻害されて漁獲が減少する操業被害や、いか釣り漁具が切られる漁具被害が生じているため、イカ水揚げ額の減少に対する補填や新たな漁具の購入への支援などの対策を講じること。 継続	(カについて) 1 クロマグロによるものと思われる操業被害・漁具被害が発生していることは承知している。 継続 2 操業被害による漁業収入の減少については、漁業共済及び積立ぷらすにより支援を行っているため活用いただきたい。 <u>なお、スルメイカについては、資源状態が管理目標を著しく下回っており、管理目標の実現に向けて他の資源よりも強い資源管理を実施することにより早急な回復を図る必要があることから、令和7年度より補償水準を特例的に引き上げる強度資源管理タイプの対象に追加したところである。</u> また、漁業共済の基準金額(5中3)が、近年の不漁の影響で低くなってしまいうお話も伺っているが、漁業共済で4年間の長期継続申込特約を付けると、この4年間の5中3の下限が前年の基準金額の90%となる仕組みがあるのでご活用いただきたい。 内容変更 3 また、クロマグロによる漁具被害対策に関する要望の声については認識しているが、 ① 一般的に、糸や針、おもりといった漁具は消耗品であり、支援に馴染まないこと ② 漁業共済・積立ぷらすの減収補填では、漁業収入を支援対象とすることで、漁業収入で賄われる操業経費もカバーしており、この操業経費の中には漁具も含まれていること などから、新たな支援を行うのは<u>慎重な検討が必要</u>と考えているところである。 継続
2④ ④漁獲状況を把握するシステム構築 漁獲報告について現場での事務負担の軽減を図るため、漁獲状況がリアルタイムで把握できるシステムを早急に構築すること。 継続	【水産庁】 1 クロマグロについては、<u>各漁業協同組合や都道府県の関係者の皆様に、迅速な漁獲報告にご協力をいただいているところである。</u> 2 一方で、<u>漁獲報告に関しては、事務負担の軽減が課題となっていることから、漁協及び産地市場から電子的に収集した水揚げ情報等の活用を検討する等、引き続き漁獲報告に係る事務負担の軽減に取り組んでまいりたい。</u> 内容変更

3 3 遊漁者等の操業自粛措置 ア 周知指導 広域漁業調整委員会指示に基づき遊漁者及び遊漁船業者への採捕規制の実行性を高めるため、資源管理制度について広く周知し、国が広域的かつ関係省庁の横断的な連携により監視活動を強化し、採捕自粛や停止を強く指導し、違反者への取締りを強化すること。 イ 採捕報告 遊漁者等からの迅速、確実かつ漏れのない採捕報告体制を確立するため、報告システムの構築と法体系を整理すること。 ウ 遊漁制度 クロマグロ遊漁はライセンス制とし、国が適切な管理を行うこと。	【水産庁】 (アについて) 1 クロマグロに関する資源管理措置の内容については、水産庁ホームページ、ポスターなどのほか、釣り関係団体や釣り関係メディアなどの協力を得ながら、あらゆる手段を用いて周知を図っている。 2 また、水産庁ホームページで最新の採捕量を随時更新し、大型魚の全国の採捕数量が5トン／月を超えるおそれがある場合は、当該月の末日まで採捕を禁止する旨を公示し、都道府県や釣り関係団体を通じて遊漁者への周知徹底を図っている。 3 さらに、取締りについては、これまでも都道府県や海上保安庁連携してマリナーでの実地指導等を実施しているところであり、違反が確認された場合には、農林水産大臣による裏付命令を発出しているところである(当該命令に従わなかった場合、1年以下の拘禁刑又は50万円以下の罰金等)。 引き続き、関係機関と連携しつつ、取締りの強化を図ってまいりたい。 (イについて) 4 遊漁で採捕したクロマグロの報告については、報告用WebサイトやLINEから採捕量等の報告を義務付けており、報告期限については、令和7年4月から、陸揚げ後3日以内から1日以内に短縮し、迅速な報告を求めている。 5 また、採捕報告を集計する際に報告内容に不審な点があった場合、報告者に連絡し、報告内容等の確認を行うとともに、疑義情報に接した際には、関係機関と連携して調査等を行っている。 (ウについて) 6 今後のクロマグロ遊漁管理については、令和6年3月に策定・公表した新たな資源管理ロードマップに基づき、現行の制度・運用について強化するとともに、令和8年4月から導入する予定の届出制による管理を推進し、管理の運用状況や定着の程度を踏まえつつ、漁業と同じレベルの本格的なTACによる数量管理への移行を推進していくこととしている。
--	--

IV 沿岸資源の適正な利用について

R7年度提案趣旨	
水産基本法の基本理念に掲げられた水産物の安定供給の確保と水産業の健全な発展のためには、資源の適切な管理と利用を行うことが不可欠であり、沿岸漁業者は栽培漁業や資源管理型漁業の推進に一丸となって取り組んでいます。 一方で、広域に回遊するブリ、クロマグロ、マサバ、スルメイカ等、沿岸漁業にとって重要な資源の多くが大中型まき網漁業等の沖合(大臣許可)漁業の漁獲対象でもあることから、両者間の漁場や資源の利用の競合をめぐる争いが恒常化しています。解決のための協議が持たれていますが、大量漁獲や違反操業の疑いなど沿岸漁業者の懸念が十分に払拭されない状況が続いています。さらに、北太平洋の公海でのサンマについては、<u>令和6年4月、北太平洋漁業委員会(NPFC)で、令和6年の措置として、公海におけるTACを15万トンから13.5万トンに削減する等の措置が合意されたもの</u>、この漁獲枠であっても近年の漁獲実績を上回る数量であり、引き続き外国漁船によって大量に漁獲され、我が国漁業への悪影響が懸念されます。 大中型まき網漁業等の漁獲対象がクロマグロの漁獲制限により、マダイやブリなど他の魚種に移ることになれば、沿岸の漁業資源に今以上の影響が生じるのではないかと不安も募っています。 つきましては、漁業者が長年にわたり守り育ててきた資源が、今後も持続的かつ公平に利用できるよう、次の事項について要望いたします。	
R7年度提案	回答、状況等
1① 1 沿岸漁業と沖合漁業の調整 ①沿岸漁業と沖合漁業の共存共栄 沿岸漁業と沖合漁業の共存共栄を目的とする関係者会議の積極的で継続的な開催及び大臣許可漁業に対する規制期間や区域の見直しによる実効性のある規制措置を検討すること。 継続	【水産庁】 1 水産資源の持続的利用に向けて、適切な資源管理のためには、その資源を利用している全ての漁業種類について、その漁業の特性に応じた資源管理措置を講ずることが大切であり、そのためには関係漁業者間の話し合いを通じて、資源の合理的な利用を図り、沿岸漁業と沖合漁業の共存共栄を図っていくことが重要であると考えている。 継続 2 水産庁としては、漁場や資源の利用を巡って生じる漁業調整問題については、地域の漁業実態や要望等を踏まえつつ、必要に応じて立会い、調整等を行うことで双方による協議が十分に行われるよう指導してきたところであり、一方的な大臣許可漁業に対する規制の強化は困難であるが、<u>海洋環境の変化が漁業に影響を及ぼし、この変化の対応に向けた取組が行われていることも踏まえつつ</u>、今後もこうした取組を継続してまいりたい。 内容変更
1② ②沖合漁業に対する指導調整 沖合漁業に対し、競合している沿岸漁業者が自主的に行っている資源管理措置への参画及び遵守を指導するとともに、沿岸漁業者にとって重要度が高い天然礁や人工礁の周辺海域における操業禁止(自粛)区域の拡大や禁漁期間の拡大など、沿岸漁業者の意向を踏まえた大臣許可の見直しを進め、調整が整ったものについては随時操業の条件として内容を盛り込むこと。 継続	【水産庁】 1 水産物の安定供給を確保するためには、資源の適切な利用・管理を基本として、沿岸漁業、沖合漁業ともにその共存共栄を図っていくことが重要である。 継続 2 また、漁場や資源の利用を巡って生じる漁業調整問題については、その内容に応じ、利害が相反する当事者が十分な話し合いを行うことにより操業ルールを定め、解決を図ることが重要である。 継続 3 一方的な沖合漁業に対しての規制強化は困難であるが、水産庁としては、<u>海洋環境の変化が漁業に影響を及ぼし、この変化の対応に向けた取組が行われていることも踏まえつつ</u>、引き続き、沿岸漁業と沖合漁業の共存共栄を図るべく当事者間における話し合いの斡旋、立会いを行い、漁業者間の協議が十分行われるよう対応してまいりたい。 内容変更

R7年度提案	回答、状況等
1③ ③カツオ、スルメイカにおける漁業調整 カツオやスルメイカでは、大中型まき網漁業等の沖合漁業と沿岸漁業との間で漁場競合等が生じているため、沿岸漁業の操業を維持できるよう資源利用並びに操業調整の取組みを進めること。また、沖合漁業によるスルメイカ漁獲管理については漁獲の集中により沿岸漁業の資源利用に悪影響を与えないように、TAC管理等の資源管理の強化に加えて、国主導により関係漁業者が安定的な漁獲のできるよう、操業調整を早急に行うこと。 継続	【水産庁】 1 水産物の安定供給を確保するためには、資源の適切な利用・管理を基本として、沿岸漁業、沖合漁業ともにその共存共栄を図っていくことが重要である。 継続 2 また、漁場や資源の利用を巡って生じる漁業調整問題については、その内容に応じ、利害が相反する当事者が十分な話し合いを行うことにより操業ルールを定め、解決を図ることが重要である。 継続 3 なお、大中型まき網漁業等の沖合漁業において漁獲対象魚種を一方的に制限するような規制を行うことは困難であるが、例えば、八戸沖のスルメイカの操業では、水産庁の立ち合いの下で大中型まき網漁業と沿岸いか釣り漁業との間で、毎年操業ルールを協議し安定的な操業に務めているといった事例もあり、<u>海洋環境の変化が漁業に影響を及ぼし、この変化の対応に向けた取組が行われていることも踏まえつつ</u>、要望等があればその他の魚種や地域についても沖合・沿岸の話し合いの場を設けてまいりたい。 内容変更
1④ ④海洋環境の変化への対応 海洋環境の変化・変動と各種水産資源の資源量、漁場形成の関係についての研究を推進し、海洋環境、水産資源の詳細な現状把握と予測技術開発を進めること。 漁獲効率の大きい大中型まき網漁船については、海洋環境・水産資源の変化・変動に対応した適切な操業調整を行い、新規魚種拡大は抑制すること。 継続	【水産庁】 1 適切な資源管理を推進するためには、その科学的基礎となる資源評価の高度化が不可欠である。昨年3月に策定・公表した「資源管理の推進のための新たなロードマップ」に基づき、資源調査や海洋観測等により、生物情報や海洋環境データ等を収集し、<u>最近の急激な海洋環境の変化による影響を踏まえたより高度な資源評価に取り組んでいるところである。</u> <u>また、(国研)水産研究・教育機構では漁海況予報の発表も実施しており、こちらについても精度向上に取り組んでいるところである。</u> 内容変更 2 また、沿岸漁業であれ、沖合漁業であれ、海洋環境や水産資源が変化・変動する中、これに適応する操業が求められていると認識しており、水産庁としては、このような対応への支援を行ってきている。 また、漁場や資源の利用を巡って生じる漁業調整問題については、地域の漁業実態や要望等を踏まえつつ、必要に応じて立会い、調整等を行うことで双方による協議が行われるよう指導してきたところであり、大中型まき網漁業に限らず、一方的な規制強化は困難であるが、今後もこうした取組を継続してまいりたい。 継続
1⑤ ⑤沖合漁業の漁船の大型化への対応 いわゆる「もうかる漁業」や「IQの導入などの条件の整った漁業種類はトン数制限を撤廃する」方針などによる漁船の大型化は、資源や漁場について沿岸漁業者に大きな影響を与えることが懸念されることから、このような措置を進めるに当たっては、事前に沿岸漁業者の十分な理解を得るとともに、沿岸漁業と競合する漁場については、入口規制も含め、沿岸漁業者に配慮したバランスの良い規制を行うこと。 継続	【水産庁】 1 労働人口が減少する中で、漁業を職場として選んでもらうためには、漁船の大型化を通じた、生産コストの削減や居住性・安全性・作業性の向上を進めていくことが必要と考える。 継続 2 一方で、資源の適切な管理を確保する必要があることから、漁業構造改革総合対策事業(もうかる漁業創設支援事業)において、居住性・安全性・作業性の高い大型漁船の導入等による収益性向上の実証の取組への支援を行う際には、これまで、適切な資源管理措置を講じることにより資源への悪影響がないことを確認し、関係する漁業者からも理解を得ながら進めているところである。 継続 3 漁業法では、漁獲量の相当部分に漁獲割当て(IQ)が導入された漁船については、トン数規制等の規模の制限を定めないこととしているが、操業期間や区域、体長制限などの措置を講じていくなど、<u>海洋環境の変化が漁業に影響を及ぼし、この変化の対応に向けた取組が行われていることも踏まえつつ</u>、適切な資源管理の実施や紛争防止のため、関係漁業者と丁寧に調整しつつ適切に進めてまいりたい。 内容変更

R7年度提案	回答、状況等
2① 2 マサバ太平洋系群の適正利用 ① 大中型まき網漁業、ロシア漁船による漁獲の指導管理 親魚量の増大と漁獲圧の適正化を図るため、漁獲強度が強くマサバを多獲する大中型まき網漁業に対して、引き続き、資源管理の取組みを強力に指導すること。 我が国の排他的経済水域内におけるロシア漁船の操業状況を注視し、漁獲物の組成等の透明化等、資源に影響が及ばないよう管理するとともに、我が国の漁船の安全操業を図ること。 伊豆諸島近海はマサバ太平洋系群の主産卵場であることから、産卵親魚に対して過剰な漁獲圧がかかることのないよう、また、秩序ある漁場利用を図るため、当該海域における大中型まき網漁業の操業を注視し、適時、適切な指導を行うこと。 継続	1 マサバ太平洋系群については、令和2年7月から、持続的に生産可能な最大の漁獲量(MSY)を実現する資源量水準の達成を目標とするTAC管理を開始するとともに、ご指摘の大中型まき網漁業においては、令和3管理年度より漁業法に基づく漁獲割当て(IQ)方式により管理をしているところである。また、令和7年7月からの令和7管理年度開始に向けて、令和6年度中に資源管理方針に関する検討会(ステークホルダー会合)を3回開催し、その結果を踏まえて資源管理方針を見直したところであり、引き続き適切な資源管理を行ってまいりたい。 内容変更 2 我が国200海里水域におけるロシア漁船の操業については、毎年行われる日ロ地先沖合漁業交渉において、日本漁船の安全な操業を確保するため、ロシア漁船の操業禁止期間や操業禁止区域、ロシア漁船と我が国漁船の距離等の操業規制を行っているところ。ロシア漁船に対しては、これらのルールの指導・取締りを行うとともに、立入検査等により漁獲量等の確認を実施している。引き続き、日本漁船の安全確保に向け交渉に臨むとともに、国内における資源管理の効果が損なわれないよう監視・取締りに取り組んでまいりたい。 継続 3 伊豆諸島近海海域においては、沖合・沿岸含め複数の漁業が同資源を利用していると承知しているが、その利用の在り方については、数量管理を基本としつつ、地域の各漁業における漁場利用の実態も踏まえ、漁業調整と適切な資源管理が両立するよう、関係漁業者に対し指導してまいりたい。 継続
2② ②海洋環境変化を加味した目標管理基準値の設定 目標管理基準値は、海洋環境の変化・変動も加えることにより、より科学的根拠に基づく基準値を設定し、資源管理を行うこと。また、漁獲管理については、漁獲量だけではなく、漁獲サイズにも焦点を当てること。 継続	【水産庁】 1 マサバ太平洋系群の目標管理基準値は、現在利用可能な最新の科学的知見を踏まえて実施される資源評価に基づき、設定されているものである。 継続 2 これまでも、水温や海流等の海洋環境が資源に与える影響についても資源調査の一環として調査しており、資源評価では、<u>漁獲以外の海洋環境の影響を考慮した管理基準値の提案や将来予測が行われ</u>、これに基づく資源管理を実施しているところである。 内容変更 3 <u>マサバ太平洋系群については、生物特性(成長・成熟)が歴史的に見て非常に悪い状況にあることを考慮した資源評価結果に基づき、令和6年度中に資源管理方針に関する検討会(ステークホルダー会合)を3回開催し、その結果を踏まえて資源管理方針を見直した結果、令和7管理年度のTACは前年比で6割削減となった。</u> 新規 4 <u>また、大中型まき網漁業においては、漁獲割当て(IQ)方式によりTAC管理が行われており、漁獲対象が、より高い魚価が見込める大型魚へシフトすることが期待される。</u> 新規 5 引き続き、海洋環境の変化を考慮した上で資源評価を行い、様々な想定の下で、漁獲が資源に与える影響を見定めながら、<u>資源管理に取り組んでまいりたい。</u> 内容変更

R7年度提案	回答、状況等
2③ ③漁業者等の関係者に十分配慮した資源管理措置の実施 漁獲管理には漁業者等の関係者の理解が不可欠であることから、管理手法を分かりやすく丁寧に説明すること。また、漁獲量抑制に当たっては、その減収分全額の補償を行なう等、経営を維持するための対策を講じること。 継続	【水産庁】 1 漁業法に基づく資源管理の推進に当たっては、当事者である漁業者をはじめとした関係者の理解が重要と考えており、資源管理方針に関する検討会（ステークホルダー会合）の場以外にも、これまでどおり、要望等に応じ、説明会等を行うこととしており、しっかり漁業者の理解と協力を得た上で、進めてまいりたい。 継続 2 また、資源管理は、適切な水準に資源を回復・維持することにより、中長期的に漁獲してもいい量を増やして、漁業者の所得を向上させるために実施するものである。 継続 3 こうした目標を目指す過程で一定以上の減収が生じるような場合には、適切に資源管理を行う方に対して、漁業収入安定対策事業によりその減収を補填しているほか、漁業経営セーフティネット構築事業や水産業成長産業化沿岸地域創出事業などの支援策を講じること、適切な資源管理の推進と、短期的に生じる収入減への支援の両立を図ってまいりたい。 継続
3 3 カツオ資源の適正利用 近年の来遊量の減少について、大きな原因と想定される赤道海域における大型まき網漁業による大量漁獲との因果関係を究明するとともに、漁獲努力量の大幅削減など、資源の保存管理措置について国際的な働きかけを進め、実効性の高い資源管理を推進する体制の構築と取り組みによりカツオ資源量の増大を図り日本沿岸への来遊量を増加させること。 また、<u>沿岸小型船によるひき縄漁業が安定した操業の確保ができるよう</u>、大臣許可漁業と沿岸ひき縄漁業との資源利用及び操業調整の対策や取組を推進すること。 内容変更	【水産庁】 1 我が国沿岸へのカツオの来遊量の回復に向け、科学的な知見に基づき、実効性のある国際的な資源管理の実施が必要であることは認識している。 継続 2 2022年にWCPFCで採択された管理方式では、親魚量が一定の水準を下回った場合に、漁獲努力量や漁獲量の水準を減らす<u>手続等が定められている</u>。 内容変更 3 <u>本年、WCPFCにおいて、カツオの資源評価が実施される予定であるところ、資源評価の結果を踏まえ、管理方式が適切に実施されるよう対応するとともに、2026年に見直しが予定されているカツオ等の保存管理措置についても、必要に応じて見直しを働きかけてまいりたい。</u> 内容変更 4 なお、水産庁としては、漁場や資源の利用を巡って生じる漁業調整問題については、地域の漁業実態や要望等を踏まえつつ、必要に応じて立会い、調整等を行うことで双方による協議が十分に行われるよう指導してきたところであり、今後もこうした取組を継続してまいりたい。 継続

R7年度提案	回答、状況等
4 4 公海におけるサンマ、マサバ等の水産資源の適正利用 <u>北太平洋公海における外国船の漁獲圧が高まっていることから、サンマ等公海で漁獲されている資源の適正な管理に向け、TACの更なる縮減など、より実効性の高い資源管理措置が実現するよう協議を進めること。</u> <u>公海におけるサンマやマサバの資源調査の充実を図るとともに、外国漁船による公海でのサンマやマサバの大量漁獲が、我が国周辺海域への資源来遊に及ぼす影響と海洋環境の変化を科学的に評価し、資源評価の精度の向上を図るとともに、漁獲上限や国別漁獲枠の設定など、実効ある国際的な資源管理措置に基づく秩序ある操業が早期に実行されるよう、我が国の主導により強力に推進し、日本沿岸への来遊量を増加させること。</u> 内容変更	【水産庁】 <国際的な資源管理の推進> 1 北太平洋におけるサンマ、マサバ等の資源を持続的に利用するため、2015年に我が国の主導によりNPFC(北太平洋漁業委員会)を設立し、国際的な資源管理の議論を進めている。継続 2 サンマについては、<u>本年3月に開催されたNPFC第9回年次会合において、2025年の措置として、公海におけるTACを昨年の13万5千トンから10%削減した12万1500トンに削減する等の措置が合意された。</u>内容変更 3 マサバについても、同会合において、公海における漁獲量を<u>昨年の10万トンから約3割削減し、7万1千トンに制限する措置が合意された。</u>内容変更 4 <u>さらなる強化に向けて、来年4月の次回年次会合に向けて、引き続き関係国・地域に積極的に働きかけを行っていく所存である。</u>内容変更 <科学的評価の実施> 5 また、外国漁船による公海でのサンマやマサバの漁獲及び海洋環境の変化が資源に与える影響を把握するために、公海漁場での調査船調査や人工衛星を活用した外国漁船の動向把握等を実施してきたところである。今後もこれら調査・研究を進めるとともに、資源評価の精度向上を図ってまいりたい。継続
5① 5 沖合漁業の操業秩序の確立 ①VMS情報の多様な活用 <u>沿岸資源の適正な利用や資源管理推進のための新たなロードマップ(令和6年3月15日公表)の取組み、資源評価の向上等のため、VMS情報による操業実態の多様な活用等について、国及び都道府県における意見交換や検討会の場を設けること。</u> 内容変更	【水産庁】 1 VMS設置及び常時作動については、漁業法第52条第2項に基づき、国際的な枠組みにおいて決定された措置の履行その他漁業調整のため特に必要があると認めるときは、当該許可を受けた船舶を対象として命ずることができることとされている。継続 2 VMS情報については、 ① 法の規定に即して利用しなければならず、 ② 個別具体的な取締情報であり、厳重な取扱いが求められることから、ご指摘のような「多様な活用」は基本的には困難であるものの、国としてこれらの観点を踏まえた適切な活用を図ってまいりたい。継続

R7年度提案	回答、状況等
5② ②VMSを有効に活用した取締強化 <u>VMS情報を積極的に活用した、より実効性のある監視・取締りを強化すること。</u> <u>また、禁止区域での水中集魚灯の使用などVMSだけでは対応できない違反についても漁業取締船などによる監視、取締りを強化し、違反者に対する行政処分は、迅速厳正に行うこと。</u> 内容変更	【水産庁】 1 大臣許可漁業については、全許可船への「衛星船位測定送信機(VMS)」の設置・常時作動等を義務付けてきたところであるが、漁船の操業状況等を把握できるVMSの必要性は高まってきていることから、<u>令和5年度に漁業法を改正し、通信を妨害する行為等を禁止するとともに罰則(6月以下の拘禁刑又は30万円以下の罰金)を措置したところである。</u>引き続きVMSを有効に活用し、違法操業の抑止に努めていく所存である。 継続 2 禁止区域内での水中集魚灯の使用など、VMSでは対応できない違反については、取締方法を工夫するなどして対応していきたい。 継続 3 違反者に対する行政処分については、事情聴取や聴聞手続き等所定の手続きを踏んだうえで、迅速に行うよう努めているとともに、違反の内容毎に「漁業関係法令等の違反に対する農林水産大臣の処分基準等」に基づき厳正に対処している。 継続 4 なお、操業秩序を維持するためには、沖合漁業だけでなく沿岸漁業についても違法操業が必要であり、都道府県による指導・取締りの徹底をお願いする。 継続
5③ ③AISの利用普及 <u>AISの利用普及に努めるとともに、AISが設置されている船舶については、沿岸域で航行・操業する際はAISを作動させ、事故防止・安全航行に努めるように指導すること。</u> 継続	【水産庁】 1 AISの利用普及については、 ① 設置漁船に対する漁船保険料の助成 ② 高齢漁業者等を対象に衝突事故防止に資するAISの導入支援 ③ スマートフォンを活用したAISアプリの利用促進等の取組を実施しているところである。 継続 2 また、国土交通省を始め関係各省と連携したパンフレットの作成や、全国漁船安全操業推進月間における<u>ポスターによる周知啓発の実施等</u>、AISの普及に向けた指導に努めている。 継続 3 これらの取組を通じ、引き続き関係省庁と連携しながら、<u>漁業の安全対策</u>に取り組んでまいりたい。 継続 【国土交通省海事局】 AISの設置が義務付けられている漁船については、船員法体系において、操業中を除き、常時作動させることを船長に義務付けており、引き続き、航行中のAISの作動が徹底されるよう周知等を行ってまいります。 継続
6 6 海上大規模開発事業の関係者説明 風力発電等の海上の大規模開発事業について、<u>地元のみだけでなく漁場利用等で関係する他都道府県漁業者等についても早期に情報を伝達し、かつ誠実に説明を行うよう開発者を指導すること。</u> 内容変更	【水産庁】 1 現在、国全体として、2050カーボンニュートラルの<u>実現</u>に向け、再生可能エネルギーを推進しており、洋上風力発電設備の設置については、「再生可能エネルギー利用法」(海洋再生可能エネルギー発電設備の整備に係る海域の利用の促進に関する法律)に基づき、漁業等との調和に配慮しながら進めることとされている。 継続 2 同法では、<u>洋上風力発電事業の実施により「漁業に支障を及ぼさないことが見込まれること」</u>が要件の一つとして規定されている。そのため、具体的な案件形成においては、関係漁業者への十分な情報提供や議論を行い、漁業への支障の有無を確認する必要があると考える。 継続 3 <u>案性</u>によっては、関係する漁業者が、地元の漁業者に限られない場合もあることは認識しており、関係都道府県に対しては、利害関係のある<u>漁業者をきちんと把握し</u>、その者の意見を丁寧に聴いた上で進めるよう<u>求めているところ</u>、引き続き、経済産業省及び国土交通省(再生可能エネルギー海域利用法の主務省庁)とも連携して対応してまいりたい。 継続

V 漁業法改正後の制度運用について

R7年度提案趣旨

改正漁業法では、TAC魚種の拡大など新たな資源管理措置が図られ、これらの管理手法については、科学的根拠に基づく精度の高い資源評価が必要となります。また対象魚種の中には、すでに漁業者が厳しい自主管理に取り組んでいる魚種も含まれ、漁業者はこうした漁業現場の実情が配慮されず、十分な説明もないまま漁獲量管理が導入されることによる減収への不安を抱えています。

また、新たな制度の運用にあたり、事務の円滑化や漁獲報告の負担軽減が求められています。

つきましては、漁業法改正後の制度運用について、次のとおり要望いたします。

R7年度提案	回答、状況等
1 1 改正漁業法施行後の事務の円滑化 ①事務の円滑化 改正漁業法の施行後、沿岸各地において漁業者や漁協等に事務上の混乱が生じていることから、「水産資源の適切な管理」や「漁業秩序の確立」等を推進するため、改めて、国、都道府県及び関係漁業者等の円滑な合意形成に向けた積極的な調整を行うこと。 新たな制度の円滑な運用に当たっては、改正により生じた地域の課題に対して柔軟に対応できるよう、国は適切に指導・助言を行うこと。 継続 ②申請、報告システムの構築 システムの構築と運営について、現場の負担を軽減するための技術的・予算的支援を十分に行うこと。特に許可漁業に係る「資源管理の状況等の報告」の円滑な報告体制の構築については、令和7年度以降も漁獲情報デジタル化推進事業を継続するための必要な予算を確保し、漁獲情報のデジタル化の推進を支援すること。 継続	【水産庁】 1 これまでも、漁業法の円滑な運用のため、定期的に都道府県会議を開催し、都道府県担当者の理解を深めるとともに、各地域において漁業協同組合や漁業者等の関係者に対する説明会等を実施してきたところである。 継続 2 円滑な制度運用に向けては、都道府県や関係者の理解と協力が不可欠であることから、今後とも必要な意見交換等を適切に実施するとともに、様々な課題に対して、必要な指導・助言を行ってまいりたい。 継続 3 また、漁業法に基づく各種の申請や漁獲報告については、<u>漁獲情報デジタル化推進事業等により、関係者の負担が軽減されるよう各種システムの構築を進めてきたところであり、漁獲報告に関しては、都道府県のご尽力により、既に全国500箇所以上の産地市場・漁協等から水揚げ情報を収集する体制が整備され、運営されている状況である。</u> 内容変更 4 <u>引き続き、令和6年3月に公表した「資源管理の推進のための新たなロードマップ」に沿って、国のシステムの整備を進めることにより、現場の事務負担を軽減するデジタル化に取り組んでまいりたい。</u> 継続 削除 <u>なお、報告体制についてはほぼ構築が済んでいると認識しているが、引き続き都道府県の事情に応じて相談に対応して参りたい。</u>

R7年度提案	回答、状況等
2① 2 新たな資源管理措置等 ① 自主的な資源管理の評価 新たな資源管理の検討に当たっては、TACのみを前提とすることなく、漁業者が実施している自主的な資源管理の妥当性や効果を的確に評価した上で、当該管理手法が十分効果を発揮している魚種については、漁獲量管理に固執せず、自主的な資源管理で対応するよう配慮すること。また、ロードマップ等に示されているスケジュールにこだわらず、精度の高い資源評価や生態解明、資源量・再生産の分析・評価を行うこと。資源量推定のための十分な情報と精度が得られていない魚種や、数量管理が困難又は適さないと判断される魚種については、数量管理を行わない<u>など、ステークホルダー会議で丁寧な説明、議論を尽くし、地域の実情に見合った内容で進めること。</u> 内容変更	【水産庁】 1 漁業法に基づく資源管理においては、持続的に生産可能な最大の漁獲量(MSY)を実現する資源量水準の達成を目標とし、TACによる管理を基本とし<u>つつ、稚魚の生育その他の水産資源の再生産が阻害されることを防止するために必要な場合には、漁業時期又は漁具の制限その他の漁獲可能量による管理以外の手法による管理を合わせて行うものとしている。</u> 内容変更 2 漁業者により行われている自主的管理は、地域の実態に応じて様々な取組が行われているなど重要なものであり、法に基づく資源管理協定として、数量管理との組み合わせにより、より効果的な資源管理措置としていくこととしている。 継続 3 また、現時点で利用可能な最善の科学情報を踏まえ、系群毎に資源評価を実施しており、この結果に基づき資源管理を行っているところであり、新たなTAC資源の拡大は、<u>資源評価の進捗状況、漁業経営や地域経済上の重要性、資源の動向等を踏まえ、優先度に応じて推進し、関係漁業者との丁寧な意見交換を踏まえ、管理の段階的導入(ステップアップ方式)により課題解決を図りながら進めてまいりたい。</u> 内容変更
2② ② TAC対象魚種追加の慎重な議論 TAC対象魚種の追加は漁業者に大きな影響を与えることが懸念されることから、漁業者の意見を十分に聴き、種々の課題に対する具体的な解決策を示しながら、関係者の理解を得た上で、資源状況、漁業実態、経済価値のみならず対象魚種の放流技術開発状況や休漁補償等の影響緩和策と併せて慎重に議論すること。 また、数量管理が困難もしくは適さないと判断される魚種をTAC対象とすることへの漁業者等の疑問・疑念を真摯に受け止め、<u>ステップアップ期間中に、丁寧に議論し、漁業者の十分な理解を得た上で慎重に進めること。</u> 内容変更	【水産庁】 1 新たなTAC資源の拡大は、<u>資源評価の進捗状況、漁業経営や地域経済上の重要性、資源の動向等を踏まえ、優先度に応じて推進し、関係漁業者との丁寧な意見交換を踏まえ、管理の段階的導入(ステップアップ方式)により課題解決を図りながら進めてまいりたい。</u> 内容変更 2 資源管理は、適切な水準に資源を回復・維持することにより、中長期的に漁獲してもいい量を増やして、漁業者の所得を向上させるために実施するものであり、<u>こうした目標を目指す過程で一定以上の減収が生じるような場合には、適切に資源管理を行う方に対して、漁業収入安定対策事業によりその減収を補填するなどの支援策を講じることで、適切な資源管理の推進と、短期的に生じる収入減への支援の両立を図っている。</u> 内容変更

R7年度提案	回答、状況等
2③ ③漁業経営に配慮した漁獲管理 複数魚種を同時に漁獲する漁法では、魚種ごとに漁獲管理の必要性を十分に検討し、例えば数量管理の対象は主要魚種に限定し、混獲魚種の漁獲の積み上がりにより主要魚種の操業に制限がかからないようにするなど、漁業実態に適した管理手法を示すこと。 資源管理の強化に当たっては、中小零細な沿岸漁業者の経営に十分配慮するとともに、やむを得ず減収等が生じた場合は、経営を維持するために十分な対策を講じること。 継続	【水産庁】 1 資源ごとにTACを設定し、管理する現在の方法では、魚を選択して獲ることが難しい漁業では、漁獲される資源の中で最も資源状態が悪い資源に合わせた管理になり、過度に非効率な漁業になるリスクがあることは、TAC管理を進めていく上での課題であると認識している。 新規 2 ご指摘の混獲の対応を含め、令和6年3月に策定した「資源管理の推進のための新たなロードマップ」において、TAC管理を円滑に進めるまでの課題について、各資源の特性や漁業の実態を踏まえて、漁業関係者と協力しながら解決を図ることとしており、TAC管理のステップアップ期間も活用して、資源ごとにどのような工夫が可能かを引き続き検討してまいりたい。 内容変更 V-2②参照
2④ ④地域産業の成長対策の具体化 漁獲量の規制は漁業機会の減少が伴うため、新規参入者や若手漁業者の確保につながり、水産加工業や観光業を含めた地域全体の産業を守る成長対策を具体化すること。 継続	【水産庁】 1 我が国の漁業を持続的に発展させ、地域全体の産業を成長産業化していくためには、新規就業者の確保とその定着を図り、年齢バランスのとれた就業構造としていくとともに、水産加工業の支援や海業の振興等による漁村の活性化をしていくことが重要である。 継続 2 このため、新規就業者対策については、現在、水産庁として就業希望者が経験ゼロからでも漁業に就業できるよう、就業相談会の開催や漁業学校等で学ぶ者への就業準備資金の交付、漁業現場での長期研修等を切れ目なく支援している。 継続 3 また、水産加工業に対しては、地域の水産物を活用して生産・加工・流通業者が連携して行う原材料転換や新商品開発等の「売れるものづくり」に向けた取組を支援している。 継続 4 加えて、水産庁は、高い鮮度の水産物、漁業体験、独自の風景や歴史といった地域資源の価値や魅力を活かした海業を推進し、水産物の消費増進や交流の促進を図ることで、漁村地域の所得向上と雇用機会の確保につなげ、漁村の持続的な発展を目指すこととしている。 そこで、海業の振興に向けた取組として、 ① 漁港において海業に取り組みやすくなるよう、漁港漁場整備法の改正(令和6年4月施行)による漁港施設等活用事業の創設 ② 地域が海業に一步を踏み出すための立ち上げに必要な実証調査等を支援する海業振興支援事業の創設 ③ 海業振興の先行事例を創出し、広く普及を図っていくため「海業の推進に取り組む地区」の公表(全国86地区)、これらの地区に対して助言や情報提供 ④ 海業振興に取り組む方々に向けた海業振興総合相談窓口(海業振興コンシェルジュ)の設置 等に取り組んでいるところであり、引き続き、海業の全国展開を推進してまいりたい。 内容変更
2⑤ ⑤正確な漁獲量を把握する仕組み TAC魚種が漁協共販などの既存の管理体制を通さない場合でも、漁獲→水揚→流通→消費の経路の監視により、正確な漁獲量を把握し、漁獲報告に遺漏がない仕組みを整えること。 継続	【水産庁】 1 漁獲物が産地市場を通らずに流通する事例については、一義的には漁業者本人からしっかりと報告を行ってもらうことが必要であり、都道府県によっては、電子的に報告するためのアプリケーションを作成し、正確な漁獲量の集計に努めているところである。 継続 2 流通経路については、資源ごとに様々であることから、新しいTAC資源については、「TAC管理のステップアップ」のステップ1の期間において実態を把握し、関係都道府県等と協力しながら、より正確な漁獲量把握の体制整備を進めてまいりたい。 継続

R7年度提案	回答、状況等
2⑥ ⑥定置網等の特性に応じた数量管理技術開発 定置網漁業の特性に応じた資源管理型の選択性の高い漁具や、混獲される稚仔魚や小型魚を極力削減する技術について、国を中心に開発するとともに、新技術開発後は、普及が促進されるよう、適切な支援策を設けること。 継続	【水産庁】 1 令和3年度から水産庁補助事業「定置網漁業等における数量管理のための技術開発事業」において、特定の魚種が入網しているかどうかを陸上で確認できるようにする技術や、入網した魚を光で誘導し外に逃がす技術などを開発中である。 継続 2 引き続き、技術の開発を推進するとともに、事業実施団体等を通じて開発した技術の普及に努めてまいりたい。 継続

VI 外国漁船問題等について

R7年度提案趣旨

近隣諸国との間には、政府間や民間で様々な協定の締結や交渉等が行われ、漁業秩序の確立のための努力が続いていますが、竹島の不法占拠、尖閣諸島に対する不当な干渉等により、我が国の排他的経済水域、暫定水域等において近隣国との大きな問題が続いています。

我が国の排他的経済水域内における韓国、中国、台湾漁船による違法な操業が常態化しており、中国のサンゴ密漁船や韓国漁船が漁場に放置したサンゴ網やカニかご等の投棄漁具が漁場の荒廃や資源の減少を招くなど極めて大きな問題となっています。

我が国いか釣り漁船が集魚したイカを漁獲するなど外国漁船の違法操業の影響に加えて、スルメイカ資源の減少もあいまって、いか釣り漁船の経営は非常に厳しい状況となっています。

分布域に暫定水域を含む魚種では、関係国が足並みを揃え、漁業秩序の確立と資源管理を行う体制作りがTAC魚種拡大の議論の前に必要との意見が出されています。

外国漁船は、資源管理の必要性を理解せず、貴重な漁業資源を毀損するとともに、漁具の切断や廃漁具の投棄などの粗暴な行為を繰り返し、我が国の漁業の持続的発展に対する深刻な脅威となっているだけでなく、悪質な当て逃げ事故、衝突事故まで発生させ、漁業者の安全をも脅かす危険な存在となっています。

加えて、北朝鮮による弾道ミサイルは令和4年以降はこれまでにない頻度で発射され、令和5年6月15日に発生した事案においては、べにずわいがいかご漁業者の操業する海域付近に落下しており、一歩間違えれば大惨事となった可能性があります。海で操業する全ての漁業者とその家族は、安全操業に対する不安を抱くとともに強い憤りを感じています。

つきましては、我が国の漁業者が安心して漁業を続けていくために、次の事項について要望いたします。

R7年度提案	回答、状況等
1 竹島の領有権確立と排他的経済水域の境界画定 竹島の領土権を早急に確立し、排他的経済水域の境界線を画定することにより、暫定水域を撤廃すること。 境界線が画定するまでの間、暫定水域内での漁業秩序及び資源管理方策を早急に確立すること。併せて、漁場交代利用及び海底清掃について、<u>民間での合意内容が履行されていない現状を踏まえ、国が調整すること。</u> 内容変更	【水産庁】 1 竹島の領有権についての我が国の立場は一貫しており、竹島問題に関し、国際法にのっとり、平和的に解決するため、適切な外交努力が行われるとともに、排他的経済水域の境界の画定については、外交当局間で交渉の進展が図られるよう、外務省と連携を図ってまいりたい。 継続 2 また、我が国の資源管理への取組効果が減殺されることを防ぐため、関係国間における協議や協力を積極的に推進してまいりたい。 継続 3 <u>漁場交代利用及び海底清掃の問題については、これまでも長年にわたり韓国政府に対し、強い姿勢で問題解決に向けた働きかけを行っている。今後とも、暫定水域における資源管理及び操業秩序の問題の解決に向け、しっかりと取り組んでまいりたい。</u> 内容変更 【外務省】 竹島は、歴史的事実に照らしても、かつ国際法上も明らかに我が国固有の領土であり、我が国はこの問題に関し、国際法にのっとり、冷静かつ平和的に解決する考え。 排他的経済水域の境界画定の問題は、我が国の主権的権利等に関わる極めて重要な問題と考えている。 今後とも双方にとって受入れ可能な合意が得られるよう努めていく考え。 <u>暫定水域内の問題については、これまで外務省としても韓国政府に対し、問題解決に向けた働きかけを行っている。今後とも、しっかりと取り組んでいく。</u> 内容変更

2① 2 漁業協定等の見直し・暫定水域等の操業秩序確立と資源管理 ①日台漁業取決め適用水域の一部縮小と協議対象水域の拡張抑制 日台漁業取決め適用水域内から、「東経125度30分より東の水域」及び「八重山北方三角水域」を除外するとともに、我が国の経済水域内においては、取決め適用水域を除いて台湾漁船の操業を一切認めないこと。 また、先島諸島の南側の水域等、取決め適用水域の拡大については、今後一切、協議の対象としないこと。 継続	【水産庁】 1 日台民間漁業取決めに関し、水域の見直し等の御要望については重く受け止めているが、まずは、操業ルールの適切な実施を確保し、関係漁業者が、台湾漁船とのトラブルなく安心して操業できるよう、全力を尽くしてまいりたい。 継続 2 なお、先島諸島の南側水域など、取決め適用水域の拡大について、台湾側と協議するつもりはない。 継続 【外務省】 日台民間漁業取決めに関し、<u>適用水域に関する御指摘</u>については重く受け止めている。<u>本年(2025年)1月に東京で日台漁業委員会が開催され、2025年漁期の操業ルールについて漁業者の方々も交えて粘り強く交渉を行った結果、日本漁船が操業する水域への台湾漁船の漁具流出を抑止するための台湾側の措置を明確に規定することで一致したと承知。</u>まずは、<u>今回一致した操業ルールが適切に実施され、漁業者の方々の操業の安全が確保されるよう、関係省庁と連携しつつ、全力を尽くしたい。</u> 取決め対象外の水域について、本取決めの対象として協議すべきではないと考えているが、いずれにせよ、政府としては、同委員会での協議等を通じ、操業ルールの適切な実施の確保及び改善が図られるよう、引き続き全力を尽くしたい。 内容変更
2② ②日台漁業取決め適用水域内の安全操業確保と台湾漁船のPI保険加入の義務化 日台漁業取決め適用水域内において、日本漁船が安全に操業できる水域の拡大に努めることや操業隻数制限等、資源管理措置に関する協議を進めることに加え、台湾漁船のPI保険への加入義務化を促すこと。 継続	【水産庁】 1 日台民間漁業取決め適用水域における日本漁船の操業については、操業ルールの必要な見直しと適切な実施の確保により、台湾漁船とのトラブルなく安心して操業できることが重要と認識している。 継続 2 本年1月の日台漁業委員会では、<u>操業ルールが6年ぶりに見直され、八重山北方三角水域の日本漁船が操業する水域への台湾漁船の漁具流出を抑止するための台湾側の措置が明確に規定された。</u> 内容変更 3 今後とも、関係漁業者と十分に意見交換しながら、<u>日本漁船が台湾漁船とのトラブルなく操業できるよう、台湾との協議に取り組んでまいりたい。</u> 継続 【外務省】 VI-2①参照

2③	③韓国漁船の操業規制と日韓暫定水域の操業秩序確立 韓国のはえ縄漁船は、我が国漁船と漁場競合しており、我が国のEEZ内における操業を禁止し、取締強化により我が国漁船の安全操業を確保すること。 日韓暫定水域内においては、韓国漁船による漁具被害に対して韓国政府に対し操業秩序や操業ルールを厳守させるよう要請するとともに、効果の高い資源回復・管理対策を講じること。また、海底清掃に係る民間合意への積極的な関与と、海底清掃の実施後も、回収しきれない放置漁具が漁場に残っていることから、十分回収できるよう事業を拡充すること。 ベニズワイガニなど分布域に暫定水域を含む魚種では、関係国が足並みを揃え、漁業秩序の確立と資源管理を行う体制作りがTAC魚種拡大の議論の前に必要であることから、日韓関係改善の動きを捉え、漁業秩序確立と実効性のある資源管理体制の確立に向けた協議を進めること。 また、分布域に暫定水域を含む魚種の適切な資源管理のため、両国が連携し、調査を実施する体制を整えること。 継続	【水産庁】 1 水産庁では、韓国漁船の違法操業を防止するため、違反が頻発する九州・山陰海域に漁業取締船を配備し、<u>我が国の許可が必要な水域への侵入防止を図っているところであり、引き続き、我が国漁船の安全な操業の確保に努めてまいります。</u> 継続 2 暫定水域における資源管理や操業秩序の問題については、<u>これまでも韓国政府に対し、強い姿勢で問題の解決に向けて働きかけているところ。引き続き、しっかりと取り組んでまいります。</u> 内容変更 3 また、海底清掃に係る事業については、今後も暫定水域等において外国漁船の影響を受けている関係漁業者への支援を継続していく必要があると認識しており、引き続き、必要な額を確保できるよう努力してまいります(Ⅵ-4と同旨)。 継続 4 また、分布域に暫定水域を含む魚種について、我が国としても暫定水域を含めた日本海の資源調査を実施してきたところ。資源評価等に関する関係国との連携強化は重要であり、可能なものから取り組んでまいります。 継続 【外務省】 現在、日韓漁業協定との関係では、①韓国漁船による違法操業が後を絶たないこと、②日本海のいわゆる北部暫定水域において、韓国漁船がズワイガニ漁場を事実上占拠していることにより、日本漁船が操業できない状況が続いていること等が大きな問題となっている。 このため、2016年7月以降、相互入漁を一時的に中断し、韓国側に強く対応を求めている。 これらの問題の解決を目指して、外務省としても引き続きしっかりと取り組んでいく。 継続
2④	④中国漁船の日中暫定水域やEEZ内の操業秩序確立とサンゴ網対策 中国については、日中暫定水域において我が国の漁船が安心して操業できるよう、中国漁船に操業条件を遵守させ、今後とも一切の中国漁船の操業水域を設定しないこと。 さんご網漁業に対する取締りを可能にする体制の構築、中国国内法においても禁止されているさんご網漁業の再発防止、放置されたサンゴ網除去による漁場回復対策の充実、強化をすること。 また、北緯27度以南の海域について、日中漁業共同委員会の協議の対象となるよう日中漁業協定を見直すとともに、中国虎網漁船の侵入を抑止する対策を講ずること。 継続	【水産庁】 1 日中暫定措置水域および北緯27度以南水域における中国漁船の操業については、まずは、現行の日中漁業協定の枠組みの下、日中当局間の様々なルートを活用しつつ、問題提起を行い、中国側に適切な対応を求めてまいります。なお、北緯27度以南水域については、日中漁業共同委員会の協議対象と位置づけられている。 継続 2 中国さんご船による密漁は根絶すべきものであり、水産庁は中国さんご船船長を令和4年12月に漁業主権法違反で逮捕したところ。引き続き適切な取締りを行ってまいります。日中暫定措置水域等で中国さんご船を視認した場合は、中国当局に対して通報の上対処を求める等、さんご船根絶に向けた取組を進めてまいります。 また、さんご網の除去など海底清掃に係る事業については、今後も外国漁船の影響を受けている関係漁業者への支援を継続していく必要があると認識しており、引き続き、必要な額を確保できるよう努力してまいります(Ⅵ-4と同旨)。 継続 【外務省】 日中漁業協定に関し、御指摘については重く受け止めており、政府部内でもしかるべく共有したい。頂戴した御意見も踏まえ、漁業者の皆様が安心して持続的に操業が行えるよう、引き続き、日中漁業関係の個別具体的な問題について、<u>二国間当局間</u>のルートを通じてしっかりと対応していく。 継続

25 ⑤対ロシア漁業の操業機会の確保

北海道では、日ソ地先沖合漁業協定をはじめ、ロシア連邦との4漁業協定に基づく漁業が行われているが、その内の1つである「北方四島周辺水域操業枠組協定」に基づく操業は、令和5年1月以降、ロシアが政府間協議に応じないことにより出漁できない状況が続いている。

対ロシア漁業は、漁業生産はもとより、水産加工などの関連産業の裾野も広く、地域経済に大きく貢献する重要な漁業であることから、今後も協定の下での操業機会の確保を強力に推進するとともに、漁業者が希望する操業条件の実現に向けた積極的な外交交渉と国による支援を継続的に行うこと。

内容変更

【水産庁】

1 現在、日ロ関係は全体として厳しい中にあるが、ロシアとの漁業交渉については、我が国の漁業活動に係る権益の維持・確保の観点から、ロシアによるウクライナ侵略以降も、操業機会及び漁業者の要望を踏まえた操業条件等が確保できるよう対応してきたところである。

内容変更

2 ただし、ロシア側に対しては、日本水域においてロシア漁船の操業による影響を受けている日本の漁業者からの要望（ロシア漁船に対する操業規制の強化等）も踏まえて対応する必要があることから、バランスのとれた交渉結果が得られるよう慎重に対応してまいりたい。

内容変更

3 また、ロシア側との4つの協定等のうち、北方四島周辺水域操業枠組協定に基づく操業については、ロシアによるウクライナ侵攻以降、ロシア側は協議に応じず、関係漁業者が操業できない状況が続いている。水産庁としては、関係漁業者の操業機会の確保が重要と考えており、操業が早期に再開できるよう、外務省と連携し、引き続き対応を行ってまいります。

新規

4 なお、北方四島周辺水域における我が国漁業者の安全操業に関しては、漁業者の円滑な操業に必要な経費を助成する「北方海域出漁者経営安定支援事業」等を、我が国200海里水域内における我が国漁業者によるロシア系さけ・ますの漁獲に関しては、同資源の保存及び管理について協力するための「さけ・ます漁業協力事業」を引き続き実施している。

内容変更

【外務省】

1 ロシアによるウクライナ侵略を受けて、日露関係は全般的に厳しい状況にあるのは御承知のとおり。他方、日本政府としては、漁業等の実務的な取組については、漁業者の権益、また、我が国の漁業権益を踏まえ、しっかりと継続していく方針。

継続

2 こうした考えの下、ロシアによるウクライナ侵略開始後も、漁業分野の3つの政府間協定及び1つの民間取決めに基づく操業ができるようロシア側とやり取りを重ねてきており、日ソ地先沖合漁業協定、日ソ漁業協力協定、貝殻島昆布協定に基づく操業が実現。

継続

3 他方、残念ながら、北方四島周辺水域操業枠組協定については、ロシア側は我が国の対露制裁を理由に政府間協議に応じておらず、2023年以来操業が実施できていない。枠組協定は、日露間の懸案である北方領土周辺水域における北方領土隣接地域の漁業者による安全操業を実現するものであり、また、地域経済にも貢献してきた。政府としては、こうした点もしっかりと踏まえ、枠組協定の下での操業を早期に再開できるよう、引き続きロシア側に働きかけていく。

内容変更

4 引き続き、漁業者を含む関係者の御要望を踏まえながら、水産庁と連携し、安定的な操業を可能な限り支援していく。

継続

2⑥ ⑥EEZ内におけるロシア大型トロール船による漁具被害の防止
我が国排他的経済水域内に入域し操業するロシア大型冷凍トロール船に対しては、沿岸漁業者の漁具被害を回避するための連絡体制を維持、継続すること。
現実的に漁具被害が発生していることから、ロシア船による漁具被害において、被害漁具復旧費の全額補償や加害船特定の有無にかかわらず補助対象とするなど、活用しやすい補償の仕組みを早急に構築すること。

内容変更

【水産庁】

1 漁具被害への漁業者の懸念は十分理解しており、被害を未然に防止するため、日本側からロシア側に四半期ごとに日本の漁業者の漁具設置海域を通報し、ロシア側がロシア漁船への情報伝達及び慎重な操業の指導を徹底する体制を構築している。

継続

削除

ロシア漁船が原因と思われる漁具被害が発生した際には、ロシア側に対し、我が国漁業者の被害状況を説明し、再発防止について申し入れるとともに、

2 2022年以降はロシア漁船が原因と思われる漁具被害に関する情報が寄せられていない状況ではあるが、引き続きこうした取組を継続していく考えである。

継続

削除

ロシア側は、日本水域では慎重な操業を行い、日本側から通報のあった海域では特に慎重な操業を行うよう指導する旨を表明しており、

3 なお、外国漁船による漁具被害が発生した場合には、韓国・中国等外国漁船操業対策事業において、被害漁具の原状復帰のために必要な経費の1/2以内を支援することとしているところ。

継続

【外務省】

ロシア・トロール船に関する日本の漁業者の懸念事項については、日ソ地先沖合漁業協定に基づく交渉において水産庁代表からロシア政府の代表に対して累次にわたり伝達してきている。

漁具の設置位置についても、交渉の結果に基づき、在ロシア大使館及び在ウラジオストク総領事館を通じてロシア側に通報してきているが、引き続き水産庁と連携し、通報体制をしっかりと維持するとともに、漁具被害の防止に努めていきたい。

内容変更

3① 3 外国漁船の取締強化と漁業者の安全の確保
①領海及びEEZ内における外国漁船に対する徹底した取締りの実施

サンゴ密漁船や大和堆などで繰り返される外国漁船の違法操業、スルメイカの無秩序な漁獲、日本漁船の近くでの操業及び漁場の違法占有等の事案を未然に防ぐため、海上保安庁の巡視船艇や水産庁漁業取締船の増隻及び人員増等により、我が国の領海及び排他的経済水域における外国漁船の監視・取締体制の一層の拡充強化を図ること。

継続

【水産庁】

1 水産庁では、令和元年度から令和3年度にかけて漁業取締船2隻を大型化するとともに2隻を増隻し、計45隻の漁業取締船で監視・取締活動を行っている。

内容変更

2 また、漁業取締船に乗船する漁業監督官等について、令和元年度から本年度までの6か年で、海事職を34名、その他14名を増員するとともに、令和4年4月に漁業取締課内に外国漁船の対応に特化した外国漁船対策室を設置した。

内容変更

3 外国漁船の取締りにあたっては、違法操業を防止するため、違反が頻発する海域・期間に重点的に漁業取締船・取締航空機を配備し、監視・取締活動を行っている。

内容変更

4 特に、大和堆周辺水域の我が国排他的経済水域においては、周年にわたり配備している漁業取締船に加え、我が国いか釣り漁業の漁期が始まる前の5月からは更に漁業取締船等を重点的に配備し、海上保安庁とも連携して対応を行っている。

継続

5 今後とも、漁業取締体制の更なる強化のため、取締船の装備面の強化・充実、漁業監督官の増員等を図り、引き続き、我が国漁業者の安全な操業を確保できるよう努めてまいりたい。

内容変更

		【海上保安庁】 海上保安庁では、我が国の領海及び排他的経済水域において巡視船艇・航空機によるしゅう戒を行い、外国漁船の動静把握に努めるとともに、違法操業を行う外国漁船に対しては、水産庁とも連携し、厳正に対処しております。 また、令和4年12月に決定された「海上保安能力強化に関する方針」に基づき、大型巡視船や航空機の増強のほか、必要な要員の確保等を推進しているところであり、外国漁船の監視・取締りに万全を期してまいります。 内容変更
32②	②外国公船や外国漁船の位置動向の監視と漁船や漁業関係機関に対する情報提供 中国公船による我が国漁船への追尾・威嚇行為など再発防止の徹底を図ること。また、外国公船及び外国漁船団の位置や動向を監視し情報収集に努めるとともに、水産庁漁業取締船及び海上保安庁巡視船から直接、周辺で操業する漁船や関係機関へ即時に情報提供できる体制をより一層強化し、漁業者が危険を事前に回避し安全・安心に操業できるよう対策の強化を図ること。 継続	【水産庁】 1 中国海警局に所属する船舶が尖閣諸島周辺の我が国領海に侵入し、日本漁船に接近しようとする動きを見せた場合は、日本漁船の安全を確保するため海上保安庁が対応を行っている。また、<u>同事案が発生した際には、外交ルートにおいても、直ちに中国側に厳重に抗議し、再発防止を強く求めている。</u> 継続 2 水産庁は、尖閣諸島周辺水域に漁業取締船を配備し、海上保安庁と連携して<u>同諸島領海内</u>への外国漁船の侵入防止を図っている。なお、取締活動で得られた情報は漁業取締りに関わる情報であるため、直接漁船や関係機関に提供することは困難であるが、水産庁としては、引き続き、関係省庁と連携し、日本漁船の安全が確保されるよう、政府全体として適切に対応してまいりたい。 継続 【海上保安庁】 海上保安庁では、常に尖閣諸島周辺海域に巡視船を配備して領海警備にあたり、<u>中国海警船への対応にあたっては、相手勢力を上回る巡視船で対応するなど、万全の領海警備体制を確保し、中国海警船が日本漁船へ近づこうとする場合には、日本漁船の周囲に巡視船を配備し、漁船の安全を確保することとしております。</u> <u>また、関係省庁と緊密に連携しながら外国船舶の情報収集等を行い、尖閣諸島周辺を含む我が国周辺海域において漁業者の皆様方の安全を確保するための対策を状況に応じて適切に行ってまいります。</u> 内容変更
33③	③外国漁船等の避泊による地元漁業や環境に対する影響の防止 外国漁船等の我が国海域への避泊に当たっては、台風の接近などの船舶に窮迫した危険があった場合など、やむを得ない場合のみ認めることとし、入域中の基本ルールの遵守徹底、国による指導及び監視強化並びに被害防止措置の実施等により、地元漁業や環境に対する影響を最小限に留めること。 継続	【水産庁】 1 外国漁船等の<u>我が国の港への避泊にあつては</u>、台風の接近等、荒天又は異常な気象など船舶に急迫した危険がある場合や急病人の発生など人命の安全を確保する必要がある場合等、やむを得ない緊急の場合にのみ、農林水産大臣の寄港の許可が<u>不要となるものであり、それ以外の場合には、寄港許可が必要である旨、強く指導してきたところである。</u> 内容変更 2 なお、外国漁船に対し、やむを得ず緊急避泊を行わざるを得ない場合には、必ず事前通報を行うよう引き続き指導するとともに、廃棄物の投棄や敷設漁具の損傷等が発生することがないように、外国漁船に対し、基本的ルールの遵守についても要請してまいりたい。 継続 3 また、緊急避泊する外国漁船による漁具被害の軽減・防止等を図るため、監視活動の実施、漁具標識の整備等の支援を行っているところである。 継続 【海上保安庁】 海上保安庁では、海上荒天等を理由に我が国の領海又は内水に入域する外国船舶に対し立入検査を行うなどして、周囲の状況等も総合的に勘案しつつ、緊急入域の要件に該当するかどうかしっかりと確認を行っております。 そのうえで、緊急入域する外国船舶に対しては、事前に錨地に適した海域等必要な情報を提供するとともに、入域場所が他の船舶の航行に支障を及ぼしたり、設置されている漁具に被害を及ぼすおそれがある等適切でない場合は、他の水域に移動するよう指導等しております。 また、緊急入域の要件が消滅した場合には、直ちに領海外に出域するよう指導等を行っております。 引き続き、外国船舶に対し秩序ある緊急入域について指導等を行うとともに、入域海域の秩序維持を図ってまいります。 継続

3④	④北朝鮮のミサイル発射に係る安全確保 北朝鮮のミサイル発射について、<u>令和5年6月</u>には、べにずわいがにかご漁業者の操業する海域付近に落下しており、一步間違えば大惨事となっていた可能性がある。 外交ルート等を通じて根本的な解決を図り、あらゆる手段を講じて阻止すること。また、警戒監視、情報収集を続け、発射の兆候・発射情報を沿岸自治体等の関係機関に速やかに提供し、漁船に搭載されたVMSの位置情報を活用するなど、的確な情報伝達、安全確認体制の構築及び緊急連絡体制の充実など安全確保への一層の強化を図るとともに、漁業者の安全確保と的確な情報提供に万全を期すこと。 万が一、自国漁船が被災した場合の救援救出等について早急に検討すること。 継続	【水産庁】 1 北朝鮮による弾道ミサイルの発射は、<u>関連する安保理決議に違反し、国民の安全に関わる重大な問題であり、政府として、引き続き、必要な情報の収集・分析及び警戒監視に全力を挙げていくとともに、米国及び韓国を始めとする国際社会とも協力しながら、関連する安保理決議の完全な履行を進め、北朝鮮の核・ミサイル計画の完全な廃棄を求めていく考えである。</u> 新規 2 北朝鮮から弾道ミサイルが発射された場合は、内閣官房から送付される発射情報を水産庁から直ちに漁業無線局や都道府県等へ自動転送し、<u>漁業無線局では自動的に音声に変換し漁業無線で漁船へ伝達するシステムを導入しており、さらに水産庁から漁業無線局や都道府県を通じて漁船の安全を確認する作業も行っている。</u> 内容変更 3 <u>水産庁としては、引き続き漁業者の安全確保に万全を期するため、関係省庁と連携して、迅速な安全情報の提供に努めてまいりたい。</u> <u>その上で、万が一、海上において被害が生じた場合には、巡視船艇等による救助をはじめ、政府一体となって、救命・救助等に全力で取り組むことになる。</u> 内容変更
		【外務省】 1 北朝鮮による度重なる弾道ミサイル等の発射は、関連する安保理決議に違反するのみならず、日本、地域及び国際社会の平和と安全を脅かすものであり、断じて容認できない。 継続 2 特に付近を航行する船舶や航空機の安全確保の観点からも極めて問題であり、漁業関係者の安全に対する懸念についても理解。 継続 3 北朝鮮による弾道ミサイル等発射に際しては、その度ごとに北朝鮮側に対して厳重に抗議している。 継続 4 引き続き、米国を始めとする関係国と緊密に連携し、関連する国連安保理決議の完全な履行のための協力を進めていくとともに、必要な情報の収集・分析及び警戒監視に全力を挙げ、漁業関係者を含め、国民の安全・安心の確保に万全を期していく考え。 継続
4	4 投棄漁具等による被害の救済 韓国漁船が日本海に放置したかご漁具や底刺し網、また沖縄、小笠原周辺の海底に点在するサンゴ網等、外国漁船による違法な操業や投棄漁具等による被害の救済のため、韓国・中国等外国漁船操業対策事業等による対策を充実、強化すること。 海底清掃の実施後も回収しきれない放置漁具が漁場に残っているサンゴ網について、除去技術の開発を図り、回収に努めること。 継続	【水産庁】 1 平成25年度補正予算において、外国漁船の投棄漁具等を回収・処分する取組等を支援するための基金を設置し、韓国・中国等外国漁船操業対策基金事業による支援を実施しているところであり、令和6年度補正予算により27億円を積み増したところである。また、沖縄漁業基金事業についても、同様の支援が可能となっており、令和6年度補正予算により25億円を積み増したところである。 内容変更: R5韓国中国20億円、R5沖縄15億円 2 今後も暫定水域等において外国漁船の影響を受けている関係漁業者への支援を継続していく必要があると認識しており、引き続き、必要な額の確保を含め、影響緩和に努めてまいりたい。 継続

VII 海洋性レジャーとの調整等について

R7年度提案趣旨	
海面は、漁業と同時に遊漁や遊泳、ダイビングなど様々なレジャーでも利用されていますが、特に遊漁船やプレジャーボート等の船舶を使用した遊漁は、漁場への集中による操業の支障、漁具や養殖資材の破損、さらには資源管理に対する悪影響が懸念されることから、漁業制度や遊漁マナーの啓発、遊漁者の資源利用実態把握と資源管理を行わせる体制整備が求められています。 プレジャーボート等には運行に係る安全性の確保及び漁具への被害の防止が必要であり、利用者に対する保険加入の義務付け、物損被害への補償の充実や、利用者の把握のための組織化が必要です。 操縦免許・船舶検査が不要なミニボート(登録長3m未満、出力1.5kW未満、プロペラによる身体障害防止機構あり)は、耐航性や他船からの視認性が低いという特性を認識しないまま沖合への出航や夜間航行、船舶の輻輳する港の周辺での遊漁などを行っており、ミニボートによる海難事故が発生していることから、規制強化も含めた法改正を視野に入れた効果的な対策を講じる必要があります。 一方、機動性の高いプレジャーボートや水上オートバイ等については、急回転等の危険走行、港内での遊走、漁船や養殖施設への接近等、マナーの悪い利用者が増えており、無謀な操船で海難事故が頻発しているところです。 つきましては、漁業と海洋性レジャーとの適切な調整を図るため、次の事項について要望いたします。	
R7年度提案	回答、状況等
1① 1 遊漁と漁業の調整 ①遊漁マナーや漁業の基本的考え方に係る積極的な広報等の実施 ア 地域における円滑な漁場の利用調整を支援し、密漁や操業トラブルの未然防止を図るため、遊漁マナーや漁業制度の基本的な考え方が当事者だけでなく社会的コンセンサスとして国民に広く認知されるよう、漁業関係団体に加え、日釣振や全釣協、日本スポーツフィッシング協会などの全国レベルの遊漁団体と協力してイベントの実施やマスメディア等の媒体も活用した積極的な広報等の施策を講じること。 継続 イ 遊漁者による釣果物やゴミの投棄等に対する罰則の強化やガイドラインの策定などの環境保全対策を講じるとともに、漁業者や地元住民とのトラブルを防止するための枠組みを構築すること。 継続 ウ より手軽に、情報を発信出来る仕組み作りとして、その場でスマホをかざせば海辺の利用に関するマナー(遊漁ルール、駐車場、ごみ集積所等)についての案内が出るようなアプリ開発と普及を、国が中心となって実施すること。 継続	【水産庁】 1 遊漁のルールやマナーを広く国民に周知するため、水産庁ではHPに「遊漁の部屋」を設けるほか、釣りを含めた遊漁に関するルールの周知、マナーの向上を目指してパンフレットを作成し、釣りの各種イベントや遊漁団体が行う講習会で配布するなど、直接、普及・啓発を行うとともに、遊漁団体や釣りメディア等を通じて呼びかけを行っているところである。 継続 2 また、遊漁者と漁業者のトラブルを防止する取り組み事例の一つとして、静岡県西伊豆町では、「海釣りGO!」というアプリで漁港内釣り場の管理を行っており、その中でルールの周知を行っているような事例もあることは承知している。 継続 3 引き続き、<u>遊漁船業法に基づく協議会の活用を推進するとともに</u>、遊漁団体、釣りメディア等と連携して遊漁のルールやマナーについて効果的な広報ができるよう、<u>努めてまいりたい。</u> 内容変更

1②	②スピアフィッシングに対する規制強化 漁船や小型船舶の航行安全及びスピアフィッシング愛好者の生命の安全確保の観点から、スピアフィッシングの実態把握や組織化を推進するとともに、スピアフィッシング利用者に対し、衝突事故防止のための目印となる標識等の設置を義務付け、<u>各地域のルール順守や安全教育、資源管理意識の醸成などの指導・普及啓発を強化すること。</u> 内容変更	【水産庁】 1 <u>ヤス等を用いて目的物を突き刺して採捕するスピアフィッシングについては、各都道府県で定めている漁業調整規則において、遊漁者等が使用できる漁具・漁法については制限が課されている。</u> 内容変更 2 スピアフィッシングを含む個別の遊漁の取扱いや規制のあり方については、漁業調整規則を所管する各都道府県に相談されたい。また、漁場の使用に関する紛争の防止等の観点から海面利用協議会や委員会指示の活用も可能であるところ、各都道府県の実態に即した対応を検討されたい。 内容変更 3 なお、水産庁においては、遊漁者からの問い合わせに対応するとともに、<u>HPに「遊漁の部屋」を設けているほか、都道府県の関係法令の遵守等に関する「遊漁のルールとマナー」のパンフレットを作成し配布しているところであり、遊漁団体等とも連携し、釣り教室などにおいて遊漁者への指導や普及啓発に努めているところである。</u> 内容変更
1③	③遊漁者の資源利用の実態把握 国の責任において、プレジャーボート等を利用する遊漁者による採捕の実態把握を早急に進めるとともに、漁業者の主要な漁獲対象である魚種について、法整備等により釣獲実績報告を義務化させ、資源利用の実態を把握し、資源評価に活用するなど適確に管理する制度を創設すること。 継続	【水産庁】 1 遊漁に対する資源管理措置の導入が早急に求められているクロマグロについて、プレジャーボートを利用する遊漁者を含む全ての遊漁者に対して、令和3年6月以降、大型魚の採捕報告を義務付けたほか、<u>令和8年4月から遊漁者や遊漁船・プレジャーボートに対する届出制を導入することとしている。</u> 内容変更 2 クロマグロ以外の魚種については、アプリや遊漁関係団体の自主的取組等を活用した遊漁における採捕量の情報収集の強化など、遊漁者が資源管理に取り組みやすい環境の整備に努めている。 継続 3 漁業におけるTAC管理導入の進展等に応じ、漁業者からは遊漁による採捕量把握や管理強化が強く求められているところであり(マダイ、キンメダイ、ブリ等)、<u>関係者と連携しつつ、採捕量等の情報収集・推計に取り組んでいく必要があると認識している。</u> 内容変更 4 また、遊漁船業法における協議会の仕組みを利用し、地域における遊漁の資源管理に対するルールづくり等を促すとともに、業務主任者に対し、利用者に採捕報告を促すよう協力を求めているところである。 継続 5 なお、遊漁船業と漁業の兼業率は7割程度であることに加え、漁協の中には遊漁船部会が設置されている場合があると認識している。このような既存組織や前述の遊漁船業に関する協議会なども活用して資源管理の重要性や遊漁採捕量把握の必要性、資源の持続的利用のためのルールなどについて意見交換・情報共有を行っていく必要があると考えており、引き続き、都道府県や関係団体と連携して検討していきたい。 継続
1④	④遊漁者に資源管理を行わせる体制整備 漁業と遊漁の問題は、漁業調整規則と海区漁業調整委員会指示で対処できる採捕行為の問題にとどまらず、資源管理及び沿岸漁場の秩序維持全般に多大な影響を及ぼしている。 漁業者に対する操業規制との公平性を担保する観点から、遊漁者の組織化及び遊漁者に資源管理を行わせるための法制度や体制の整備を進め、全国的な資源管理のルール導入を図ること。 都道府県域を超えて活動する遊漁の特性を踏まえ、国が主体となって遊漁の組織化を推進するとともに、将来的に全国一律の制度化を検討すること。 継続	【水産庁】 1 遊漁船やプレジャーボートを利用する遊漁者の組織化については、毎年、都道府県遊漁・海面利用業務担当者に対して調査を実施し、実態を把握するとともに、都道府県に対して組織化を促しているところである。 継続 2 また、<u>遊漁船業法における協議会制度については、都道府県知事が当該都道府県の区域内の遊漁船業者、漁業者、漁協等を構成員として組織することができ、協議会において協議が調った事項については、協議会の構成員は、その協議の結果を尊重しなければならないこととされている。</u>これを有効に活用し、地域の実情に応じた水産資源の管理や理解醸成について努めていただきたい。 内容変更 削除（Ⅶ-1③参照） <u>なお、遊漁船業と漁業の兼業率は7割以上であることに加え、漁協の中には遊漁船部会が設置されている場合があると認識している。このような既存組織や前述の遊漁船業に関する協議会なども活用して資源管理の重要性や遊漁採捕量把握の必要性、資源の持続的利用のためのルールなどについて意見交換、情報共有を行っていく必要があると考えており、引き続き、都道府県や関係団体と連携して検討していきたい。</u>

2①	2 プレジャーボート等の運航に係る安全性の確保と漁業被害の防止 ①プレジャーボート利用者に対する賠償責任保険加入義務化 プレジャーボートの事故発生率は自動車より高いことから、プレジャーボート利用者に対し、漁業被害を想定した賠償責任保険への加入を義務化すること。また、法制化に<u>当た</u>っては、漁業被害を想定し、対人のみならず、休漁、漁具等の物損被害の補償を充実させること。 さらに、義務化できるまでの間、任意保険加入率向上に係る施策を強化すること。 継続	【水産庁】 1 プレジャーボート等は国土交通省が所管しているため、ご要望にある保険加入の義務付けについては、国土交通省にお伝えしたい。 継続 2 なお、日本漁船保険組合においては、漁業者保護の観点から5トン未満のプレジャーボートを対象に、任意保険事業として、プレジャーボート責任保険を取り扱っている。 継続 3 この保険においては、対人のみならず、休漁補償や漁具等の物損被害についても補償の範囲としている。 継続 4 また、同組合では、プレジャーボート責任保険への加入促進のため、全国各地の漁協を介して、プレジャーボート所有者にチラシの配布等を実施しており、今後とも加入隻数の増加に向け、加入促進活動を積極的に展開していくこととしている。 継続
		【国土交通省海事局】 令和6年末の保有台数が約8,300万台、事故発生件数が約29万件の自動車等においては、法律に基づき保険への加入が義務付けられていますが、その補償対象は運転によって人の生命又は身体が害された場合における対人賠償を補償するのみです。 他方、令和6年末のプレジャーボートの保有隻数は約20万隻、海難事故は865件であるところ、年間の事故件数や、自賠責制度の補償の範囲を踏まえると、漁業被害を想定した対物賠償や休漁補償を含む保険加入義務付けの法制化は困難と考えられます。 なお、プレジャーボートには対人賠償、対物賠償、捜索救助費用等が補償内容となっている任意保険があり、これに加入することによって、漁業被害を含む補償を担保することが可能です。 人的・物的被害者保護の観点、マリンレジャーの健全な発展の観点から、保険への加入率の向上は業界全体の課題であると認識しており、国土交通省では関連団体を通じ、販売店に対してプレジャーボート購入者へ<u>保険制度の周知を行うよう</u>指導しております。 今後とも、プレジャーボート保険の加入促進に向けて官民を上げて取り組んでまいります。 内容変更
2	②利用者の組織化によるマナーの周知徹底 法令や規則、マナーの周知徹底を図るため、プレジャーボート利用者の把握や組織化を推進し、漁業の妨げにならない実効性のある対策を実施すること。 また、無謀な操船や海難事故が頻発している水上オートバイについても、免許取得後、法令や規則、マナーの周知徹底を図るため、継続的に研修を受講させること。利用者の把握や組織化を推進し、漁業の妨げにならない実効性のある対策を実施すること。 継続	【水産庁】 1 プレジャーボートや水上オートバイ等の運航に係る安全性の確保については、国土交通省が担当しており、ご要望の内容については、国土交通省に伝えることとしたい。 継続 2 プレジャーボート等が漁業の妨げになっているとの指摘を踏まえ、水産庁ホームページにおいて、マリンレジャー関係者に向けた遊漁・海面利用の基本的なルールやマナーの情報に加え、海上保安庁が作成したマリンレジャーの安全啓発のための情報を掲載するなど、周知を図っている。更に、プレジャーボート愛好者等に対する効果的な周知方法等について、マリンレジャー関係団体と意見交換を行っているところである。 継続

3 また、漁港区域内の放置艇の隻数は、令和4年度に水産庁及び国土交通省が実施した全国実態調査において1.8万隻と、前回調査時(平成30年)と比べ約4千隻減少している。

このような中、地域にとって支障となる放置艇については概ね10年程度を目途に解消できるよう、令和6年3月に、水産庁及び国土交通省において「三水域(港湾・河川・漁港)におけるプレジャーボートの適正な管理を推進するための今後の放置艇対策の方向性」をとりまとめたところであり、具体的な対策として、

- ① 係留・保管能力の向上
- ② 効果的な規制措置の実施
- ③ 水域管理者等による監督の推進
- ④ 放置艇の新規発生を防ぐ予防的措置の実施
- ⑤ 広域的な対策の推進

を示しているところである。

水産庁としては、今後とも、放置艇に係留・保管するための収容施設の整備や既存施設の有効活用等により、地方自治体の放置艇対策を支援してまいりたい。

継続

【国土交通省海事局】

小型船舶操縦士免許の取得又は更新に際しては、教本や視聴覚教材を用いて、関係法令や規則等を習得させるための教育を行っております。

また、小型船舶操縦者の遵守事項について、地方運輸局等が、**関係省庁等**と協力して、全国各地のマリーナ等を巡回して違反の取締りを行うとともに、各地で開催されるボートショーなどにおいてリーフレットの配布等による周知啓発に取り組んでおります。

加えて、毎年4月から8月に関係省庁・団体と連携して実施している「小型船舶に対する安全キャンペーン」において、発航前検査の実施や船外機の適切な点検・整備を促すリーフレットを使用して啓発に努めるなど、プレジャーボートの安全確保に向けた取組を行っております。

なお、ミニボートユーザーに対しては、ボートの製造・販売を行っている業界団体に加盟している事業者が販売時に「ミニボート安全ハンドブック」を同封し、海上交通ルールの順守等を周知しており、国土交通省としても、HPに「ミニボートに乗る前に知っておきたい安全知識と準備」のパンフレット及び安全啓発動画を掲載し周知するとともに、各地で開催されるボートショーなどボートユーザーが多く集まるイベント等において安全講習会の実施に協力するなど安全啓発を実施しているところ です。

国土交通省としましては、これらの活動を通じて、小型船舶操縦士のマナー向上を図り、漁業関係者とプレジャーボート利用者の共生に引き続き努めて参ります。

継続

小型船舶操縦免許証には5年間の有効期間が設定されており、その更新の際に、関係法令や規則に関する最新の知識等について更新講習を受講させることにより、これらの知識等を継続的に習得させています。これに加え、小型船舶操縦者の遵守事項に違反した者に対しては、違反点数を付与するとともに、安全意識の徹底のための再教育も実施しております。

また、毎年4月から8月に関係省庁・団体と連携して実施している「小型船舶に対する安全キャンペーン」において、水上オートバイに乗る際に遵守すべき事項や船舶番号の適正な表示を促すリーフレットを使用して啓発に努めるなど、一層の安全確保に向けた取組を行っております。

さらに、水上オートバイについては、メーカー直営販売店などで組織化された全国NPO法人パーソナルウォータークラフト安全協会(PWSA)において、ユーザーに対して安全に係る周知啓発活動を実施しており、国土交通省もその活動を促進しているところ です。

また、国土交通省においては、ボートユーザーが多く集まる全国のボートショーなどのイベント等において、安全啓発に係る周知活動を実施しているところ であり ます。

国土交通省としましては、これらの取組を通じて、水上オートバイの操縦者に対する周知啓発に努めてまいります。

継続

3① 3 ミニボート等による危険行為の防止 ①安全航行のための制度改正と反射板等装置の必置 海面利用者相互の安全を確保するため、海面における夜間航行の禁止、航行区域(距離)の制限、年齢制限、安全装置の義務化などの制度改正に取り組むとともに安全航行や漁船との衝突事故防止のため目印となる旗やレーダー反射板を掲げることやポールを立てる装置等の設置を義務化すること。 安全対策上の制度創設等に当たっては、国土交通省、水産庁等関係機関が今後とも、より一層協力しながら行うこと。 継続	【水産庁】 1 船舶の安全については一義的には国土交通省が担当しており、ご要望の内容については、国土交通省に伝えることとしたい。 継続 2 ミニボート等が漁業の妨げになっているとの指摘を踏まえ、水産庁ホームページにおいて、マリンレジャー関係者に向けた遊漁・海面利用の基本的なルールやマナーの情報に加え、海上保安庁が作成したマリンレジャーの安全啓発のための情報や船舶の安全を所管する国土交通省が「ミニボートの安全対策の実施」を定めている交通安全業務計画を掲載するなど、周知を図っている。更に、プレジャーボート愛好者等に対する効果的な周知方法等について、マリンレジャー関係団体と意見交換を行っているところである。 継続 3 今後も、国土交通省等関係機関と協力し、当該マニュアルの浸透を軸とした遊漁者等への啓発・普及活動を推進してまいりたい。 継続 【国土交通省海事局】 ミニボート(長さ3m未満かつ機関出力1.5kW未満)は、低出力・低速で航行できる区域に限られることから、船舶検査及び小型船舶操縦免許が不要で、手軽に楽しめるため我が国マリンレジャーの裾野拡大の一翼を担っており、利用者の安全意識の向上を図るような安全対策を推進しております。 国土交通省では、ミニボートによる海難事故を減少させ安全・安心な利用環境整備を推進することを目的として、学識経験者、業界関係者及び行政機関で構成する委員会において策定した指針を基に作成したマニュアル「ミニボートに乗る前に知っておきたい安全知識と準備」及び動画をHPに掲載するとともに、業界団体を通じて周知を図っております。(当該マニュアルでは、3m以上の高さで目印となる旗やレーダー反射板をたてることを推奨しており、メーカーもこれらの装置の取付けを進めております。) また、関係団体はHPに、ミニボート製造事業者は販売時に「ミニボート安全ハンドブック」を掲載・同封するなどの活動を実施しております。(当該マニュアルでは、夜間や暗い未明に出航しないことや、他船に気付いてもらえるよう、ボートに目立つ旗を高く掲げておくことを推奨しております。) このような取組みを継続し、今後とも、誰もが安全に安心して海で遊べるための総合的な安全情報を提供できるよう、官民が連携し取り組んでまいります。 継続
3② ②安全講習の義務化と円滑な救難活動のための所有者把握 ミニボート等(SUPを含む)を販売する際に、「操縦や安全性についての講習受講」を義務付けるとともに、インターネット購買者も含めた販売条件とするよう、ボート製造・販売業界を強く指導するとともに、円滑な救難活動を行うために購入者の氏名や連絡先の情報を把握できる実効性のある方策を、早急に検討すること。 海難事故に伴うボートの漂流などがあった場合、利用者が不明のため、救難活動等に支障を及ぼす恐れがあることから、円滑な救難活動のためにも、登録制度や組織化、検査制度など実効性のある対策を実施すること。 継続	【水産庁】 1 船舶の安全については一義的には国土交通省が担当しており、ご要望の内容については、国土交通省に伝えることとしたい。 継続 2 ミニボート等が漁業の妨げになっているとの指摘を踏まえ、水産庁ホームページにおいて、マリンレジャー関係者に向けた遊漁・海面利用の基本的なルールやマナーの情報に加え、海上保安庁が作成したマリンレジャーの安全啓発のための情報や船舶の安全を所管する国土交通省が「ミニボートの安全対策の実施」を定めている交通安全業務計画を掲載するなど、周知を図っている。更に、プレジャーボート愛好者等に対する効果的な周知方法等について、マリンレジャー関係団体と意見交換を行っているところである。 継続 3 今後も、国土交通省等関係機関と協力し、当該マニュアルの浸透を軸とした遊漁者等への啓発・普及活動を推進してまいりたい。 継続

	【国土交通省海事局】 ボートの製造・販売を行っている業界団体に加盟している事業者では、ミニボート販売時に「ミニボート安全ハンドブック」を同封して、ミニボートの特性、海上交通ルールの遵守、海難事故予防などについて周知しています。 しかしながら、外国メーカー製の販売やインターネットによる個人売買等を全て把握し、その購入者に対して周知することは困難であることから、業界団体では、ミニボートに関する安全対策等習得させる目的で、全国の登録小型船舶教習実施機関と連携し、誰でも参加できるミニボート講習会を案内しています。 国土交通省においても、HP に「ミニボートに乗る前に知っておきたい安全知識と準備」及び安全啓発動画を掲載し周知するとともに、ミニボートユーザーが多く集まるイベント等において安全講習会の実施に協力するなど安全啓発を実施しているところであり、引き続き、業界団体と連携して安全啓発活動に取り組んで参ります。 継続 漂流したミニボートが、救難活動に支障を及ぼすことがないよう、海上交通のルールやミニボート乗船時の注意事項等を守り、適切に利用して頂くため、国土交通省では、業界団体と連携し、安全啓発活動に取り組んでいます。 漂流しているミニボートの利用者を特定するために、国土交通省では、HP に掲載している「ミニボートに乗る前に知っておきたい安全知識と準備」において、ミニボートに連絡先を記載しておくことを推奨し、万が一流出した場合に海上保安庁へ連絡することを案内しています。 なお、国による船舶の登録制度については、売買時のトラブルの防止や信用販売の円滑化等を図るほか、放置艇の適正な保管場所への誘導や不法投棄の未然防止のために実施しているものですが、財産価値が低いこと等の理由から、小型で小馬力の船舶などは、対象外としています。 また、ミニボートは、構造・設備に起因する事故は少なく、航行できる水域が限られることから、船舶検査の対象とする必要性は低いと考えています。 いずれにせよ、ミニボートの海難事故の減少に向け引き続き実効性のある対策を検討実施していきたいと考えています。 継続
3③	③ミニボートの保険加入義務化とゴムボートの保険対象化 ミニボート利用者に保険加入を義務付けること。法制化に当たっては、漁業被害を想定し、対人のみならず、休漁、漁具等の物損被害の補償を充実させること。 賠償責任保険の強制加入が法制化されるまでは、任意保険への加入促進のため、より実効性のある取組みを強力に推進すること。 日本漁船保険組合のプレジャーボート責任保険の保険対象外である、船底がFRP成型されていない推進器付きゴムボートも加入対象とし、ミニボートの過失による漁業損失や遭難救助費用を補償する制度を創設するとともに、保険加入率の向上、義務化について検討すること。 継続 【水産庁】 1 ミニボート等は国土交通省が所管しているため、ご要望にある保険加入の義務付けについては、国土交通省にお伝えしたい。 継続 2 日本漁船保険組合のプレジャーボート責任保険は、漁港等に保管又は係留されている5トン未満のプレジャーボートが対象であり、スポーツやレクリエーション用のミニボートは当該責任保険の対象になっている。 継続 3 なお、漁船等と衝突した場合に漁船等の被害が大きならないため、ゴムボートはプレジャーボート責任保険の対象となっていないが、船底がFRP成型されている推進器付きゴムボートについては、漁船等の被害が大きくなる恐れがあるため、漁業者保護の観点から当該責任保険の対象となっているところである。 継続 4 プレジャーボート責任保険は、漁船保険事業の実施に支障のない範囲において、日本漁船保険組合が行う任意保険事業であるため、ご要望にある保険加入対象の拡大については、日本漁船保険組合にお伝えしたい。 継続

【国土交通省海事局】

ミニボートが船体、漁具、積荷などに損害を与えてしまった場合や、定置網や海産物などの漁業用施設に損害を与えてしまった場合等の「対物賠償」や、ボートに乗っている人が落水して見つからず捜索してもらった場合の「捜索救助費用」等については、現行のプレジャーボート保険の制度で対応できると考えております。

また、ミニボートの利用者に対しては、プレジャーボート保険への加入を促すことを含めて安全啓発を行っている（パンフレットの配布等）ところ、今後も保険への加入率向上に向けて取り組んでまいります。

なお、プレジャーボート保険については、様々な損害保険会社等が提供しているところ、「船底がFRP成型されていない推進器付きゴムボート」を対象としているかは保険商品により異なるため、各保険会社にお尋ねいただければと思います。

継続